第６節　第 33 次調査（平成 27 年度、PSK11）

（1）概要

33 次調査においては、微高地１東部（開法寺東方地区）の建物群における中心的な大型建物の全容把握に主眼を置いた。その対象となる大型建物は、31 次調査 SB2022.2023.2024、32 次調査 32-1Tr・SB2011 であり、31 次調査 SB2022.2023.2024 の周囲を 33-2 トレンチ、32 次調査 32-1Tr・SB2011 の西側を 33-1 トレンチとして、主に二つの調査区を設定し、これらの建物主軸及び規模等の確認を行った。

調査の結果、33-2 Tr・2022.2023.2024 は、東西方位をもつ廂付の大型建物であり、８世紀後葉から 11 世紀前葉にかけて、同一地点で建替えられたことが明らかになった。現時点で具体的な性格・機能を明らかにできないが、微高地１東部（開法寺東方地区）の建物群の中でも、中心的なものの一つであると考えられる。

33-1Tr・SB2011 は、南北方位をもつ梁行３間、桁行３間の大型建物であり、９世紀中葉から 10 世紀前葉の一時期にのみ営まれている。33-2Tr・2022.2023.2024 のような継続性をうかがうことはできない。

また、本次調査においては、真北を基準とする７世紀後葉から８世紀初頭の建物群の様相も明らかになっている。33-1Tr・SB2010 は、32 次調査 32-1 トレンチの成果を組み合わせることにより、梁行３間、桁行４間以上の南北棟に復元された。また、SB2010 の西側には、梁行をそろえた南北棟の SB2015 が検出された。SB2015 は、南北柵（板塀）SA2012 と一体的に営まれ、同柵を介して SB2016 と連結されるなど、真北を基準とした当該期の建物配置の規格性を示すものと考えられる。

以上のように、本次調査においては、微高地１東部（開法寺東方地区）の建物群の平面配置や継続性などについて大きな成果を得た。

現地調査は、平成 27 年 10 月より開始し、平成 28 年３月に終了し、調査面積　680 ㎡である。調査途中の平成 28 年２月 13 日、14 日に現地説明会を開催し、約 200 名の参加をみた。

（2）33-1 トレンチの層序

層序（図 165）

現況からみて、33-1 トレンチは微高地１の頂部から北西緩斜面に相当すると考えられる。調査前は水田として利用されており、０層は現在の耕作土である。１層は現在の耕作土の基盤層の灰色粘土層であり、鉄分の沈着が著しい。２a 層とした灰色シルトは、分級が悪い層相からみて耕作土と考えられる。包含される遺物は古代期を中心とするが、周辺における既往の調査成果からみて、中世後半から近世の所産である可能性が高い。一方で２ｂ層は、調査区北西部のみに分布するもので、層相は２ａ層と同じであるが顕著なグライ化が認められるとともに、粒度は粘土に近い。中世後半と考えられる SD1001.1002 は本層上面から穿たれていることからみて、中世後半以前に形成された耕作土層と考えられる。

３層は焼土・炭化物をやや多く含む黒褐色シルトから粘土である。２ｂ層が分布する調査区北西部以外の全域にみられ、古代から 12 世紀までの遺物を多く含んでいる。下面に凹凸が顕著にみられることや、焼土・炭化物を多く交える点からみて自然堆積層とは考えられないため、12 世紀頃の微高地１上面の削平等に伴う撹拌土壌と考えられる。

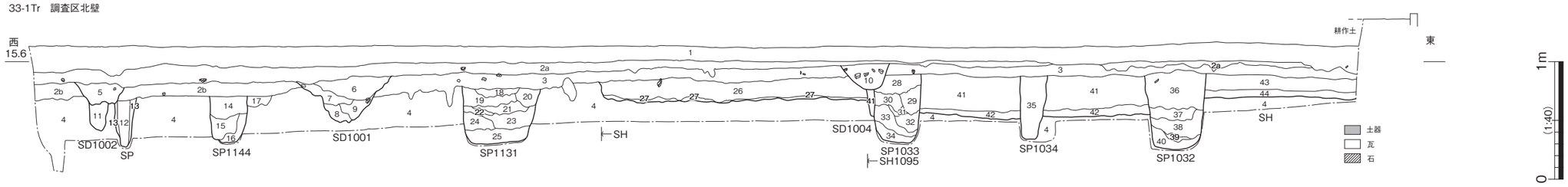
古代以降の基盤層は黄褐色シルト～極細砂である。箇所によって粒径が異なるが、調査区全域で確認されるもので、本層上面は遺構検出面である。微高地１と鼓岡神社が乗る丘陵との間の低地帯へ向かって、南東から北西へ緩やかに傾斜している。

各層からの出土遺物（図 166 ～ 171）

１～ 16 は、１～２層出土遺物である。須恵器杯（１）の見込みには「上□」の墨書が確認できる。４・５は猿投産の灰釉陶器椀であり、９世紀後半から 10 世紀初頭の資料とみられる。６は美濃産の灰釉陶器皿であり、10 世紀代の資料と考えられる。土師質土器杯（７）の内面には煤状の物質が付着することから、灯明皿に転用されていると考えられる。10 は須恵器風字硯。軒平瓦（11）は KH203 型式とみられ、開法寺で確認される資料である。15・16 は白色凝灰岩片である。

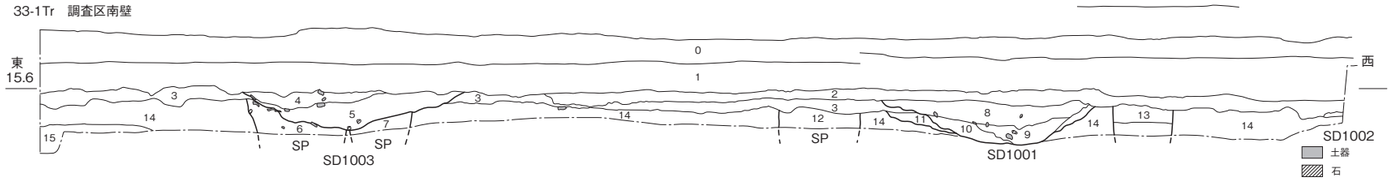
図 164　33 次調査区遺構平面図

33-1Tr　調査区北壁



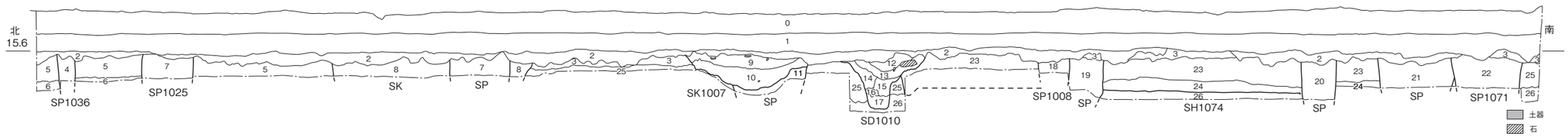
1　灰色粘土（粗砂多く含む ,Fe 沈着）床土
2　灰白色粘土～シルト（Mn 沈着）
3　黒褐色シルト～粘土（炭化物 , 焼土粒やや多く含む）
4　黄褐色シルト～細粒砂（上方細粒化）縄文土器 , サヌカイト包含）古代以降ベース層
5　灰白色シルト（灰白色粘土ブロックやや多く含む）SD1002　※上層遺構
6　灰白色シルト（灰白色粘土ブロックやや多く含む）
7　灰白色シルト（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝少量含む）SD1001
8　灰白色シルト（黄褐色粘土ブロックΦ9 ㎝以上やや多く含む）SD1001
9　灰白色シルト（黒褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝やや多く含む）SD1001
10　灰色シルト（土器片 , 瓦片多く含む）SD1004
11　茶褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む）SP
12　黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む）SP 柱痕
13　黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　SP 裏込め土
14　灰色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝やや多く含む）SP1144
15　黒褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝やや多く含む）SP1144
16　黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝やや多く含む）SP1144
17　灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　SD ?
18　黒色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝
19　黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む）SP1131
20　黄褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝　SP1131
21　黒褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む）SP1131
22　黄褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝　SP1131
23　黒灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む）SP1131
24　黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　SP1131
25　黄灰色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝　SP1131
26　黒褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝やや多く含む）SH 埋土
27　黄褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝（炭化物少量含む）SH 貼床土
28　黒褐色粘土ブロック（黄褐色粘土ブロック , 炭化物やや多く含む）SP1033
29　黒褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝　SP1033
30　黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　SP1033
31　黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　SP1033
32　灰色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む）SP1033
33　灰黄色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む）SP1033
34　黄灰色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝　SP1033
35　黒褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ , 炭化物やや多く含む）SP1034
36　黒褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ , 炭化物やや多く含む）SP1032
37　黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝多く含む）SP1032
38　灰色シルトブロックΦ5 ～ 8 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む）SP1032
39　灰黄色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝　SP1032
40　黄褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝　SP1032
41　黒褐色粘土ブロック（焼土粒 , 炭化物やや多く含む）SH 埋土
42　黄褐色粘土ブロック（焼土粒 , 炭化物少量含む）SH 貼床土
43　灰黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝やや多く含む）SH 埋土
44　黄褐色粘土ブロック　SH 貼床土

33-1Tr　調査区南壁



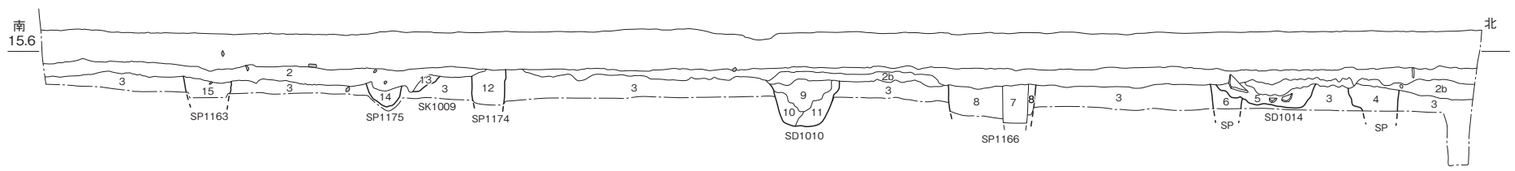
0　現耕作土
1　灰色粘土（Fe 沈着）
2　灰色シルト（Mn 沈着）中世包含層
3　黒褐色粘土（Mn 沈着）3 層で取り上げ
4　黒褐色粘土　SD1003 上層
5　暗褐色粘土　SD1003 下層
6　黒褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝やや多く含む）SD1003 に切られる条里方向のピット
7　黒色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　SD1003 に切られる 7c 以前のピット
8　灰褐色粘土（灰色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝多く含む）SD1001 上層
9　灰色粘土（褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝やや多く含む）SD1001 下層
10　暗灰色粘土ブロック　SD1001 下層
11　灰色粘土ブロック　SD1001 に先行する遺構埋土
12　灰黄色粘土ブロック（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む）7c 以前のピット
13　暗褐色粘土ブロック（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝やや多く含む）
14　黄灰色シルト～粘土　古代以降基盤層　上方細粒化　縄文包含層
15　茶褐色細砂　縄文包含層

33-1Tr　調査区東壁



0　現耕作土　0 層で取り上げ
1　灰色粘土（Fe 沈着）
2　灰色シルト（Mn 沈着）中世包含層
3　黒褐色粘土
4　灰黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝）SP1036　柱穴列
5　黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝）SH 埋土
6　黄褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝　SH 貼床土
7　灰黄色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝　SP 埋土
8　黒灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　SH?SK 埋土　7c 以前 ?
9　黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（焼土粒 , 炭化物多く含む）SK1007 上層　12c
10　灰黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　SK1007 下層
11　黒色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝（灰黄色，黄灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む）SP1037　正方位大型建物
12　灰褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　SD1010 上層
13　黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（焼土粒，炭化物やや多く含む）SD1010 上層
14　黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　SD1010 下層
15　黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む）SD1010 下層
16　黄褐色粘土ブロックΦ9 ㎝以上　SD1010 下層
17　灰色細砂（ラミナ有り）SD1010 最下層
18　灰黄色粘土ブロック（焼土粒多く含む）SP1068
19　黒色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（黄灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む）7c 以前の SP　SH1074 を切り込む
20　黒色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（黄灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む）7c 以前の SP　SH1074 を切り込む
21　灰褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（焼土粒 , 炭化物やや多く含む）SH1074 を切り込む条里方向のピット
22　灰褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝（焼土粒 , 炭化物やや多く含む）SP1071
23　黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む）SH1074 埋土
24　黄褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝　SH1074 貼床土
25　黄灰色シルト～細砂　古代以降基盤層　上層細粒化　縄文包含層
26　茶褐色細砂

33-1Tr　調査区西壁



1　灰黄色シルト（現耕作土，旧耕作土と床土）
2　灰色シルト（Mn 沈着）
2b 灰色シルト～粘土（基盤層上面における 2 層からの撹乱）
3　黄褐色細砂～シルト（上方細粒化，古代地山層，縄文土器，サヌカイト包含）
4　黒灰色粘土　7c 以前のピット
5　灰褐色粘土（瓦片多く含む）9c 前葉 SD1014
6　黄褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝（黒褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝）7c 以前のピット
7　黒褐色粘土　SP1166 柱痕
8　黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む）SP1166 裏込め土
9　灰褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝　SD1010 上層　11c
10　灰褐色粘土ブロックΦ9 ㎝以上（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む）SD1010 下層　11c
11　灰褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む）SD1010 下層　11c
12　黒褐色粘土ブロック　SP1174
13　灰褐色粘土　SK1009　9c 前葉
14　黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　SP1175　7c 以前
15　灰褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　SP1163　7c 以前

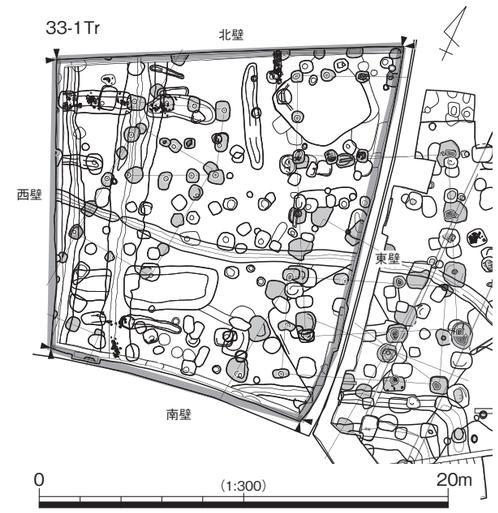


図 165　33 次調査区各壁断面図

17 ～ 128 は、３層からの出土遺物である。須恵器蓋（18）の内面には墨書が確認されるが、朦朧として字義は不明となる。須恵器杯（33）の内外面には墨書があり、外面は「工」、内面は字義不明。須恵器鉢（45）は篠産の 10 世紀後半の資料と考えられる。須恵器椀（46）は外面に回転ミガキが認められる西村産の 12 世紀の資料。47 は須恵器風字硯の小片。48 ～ 62 は須恵器転用硯である。56 は須恵器蓋の内面を利用するもので、磨滅痕とともに赤色顔料が確認される。

63 ～ 95 は畿内系土師器であり、７世紀後葉から８世紀中葉の資料と考えられる。96 は両黒の黒色土器鉢であり、編年的位置付けは不明とせざるを得ない。97 は二彩陶器の椀とみられる小片であり、三彩の可能性もある。98 は防長（長門）産の緑釉陶器椀であり、９世紀後半の資料と考えられる。99 は美濃、あるいは近江産の緑釉陶器椀であり、10 世紀中葉から後葉の資料とみられる。土師器甕の胴部片（102. 103）の外面には墨書が確認できるが、字義は不明とせざるを得ない。104 ～ 108 は製塩土器片、104. 105. 108 は６世紀後葉から７世紀前葉、106. 107 は７世紀中葉から８世紀前葉の資料と考えられる。109. 110 は土師器飯蛸壺。111 は鞴羽口である。

軒丸瓦（112）、軒平瓦（113）は、小片のため型式を特定できない資料である。120 ～ 122 は白色凝灰岩片。119 は花崗岩製の砥石である。123 は鉄製刀子の茎部。鉄器片（124）はやや大型であるが鉸具の可能性がある資料である。125 は鉄鋲、126 は鉄釘である。

129 ～ 142 は、遺構検出面から出土した資料である。132 は須恵器杯の内面を利用した転用硯。土師器杯（137）は白色の精製素地をもつもので、搬入品の可能性が高い。138 は KH106 型式、139 は KH105 型式とみられる軒丸瓦であり、開法寺で確認されている資料である。142 は結晶片岩製の剥片であり、表裏に粗い研磨痕、一側縁に擦切りによる分割痕が確認できる。石帯の未成品の可能性が高い。

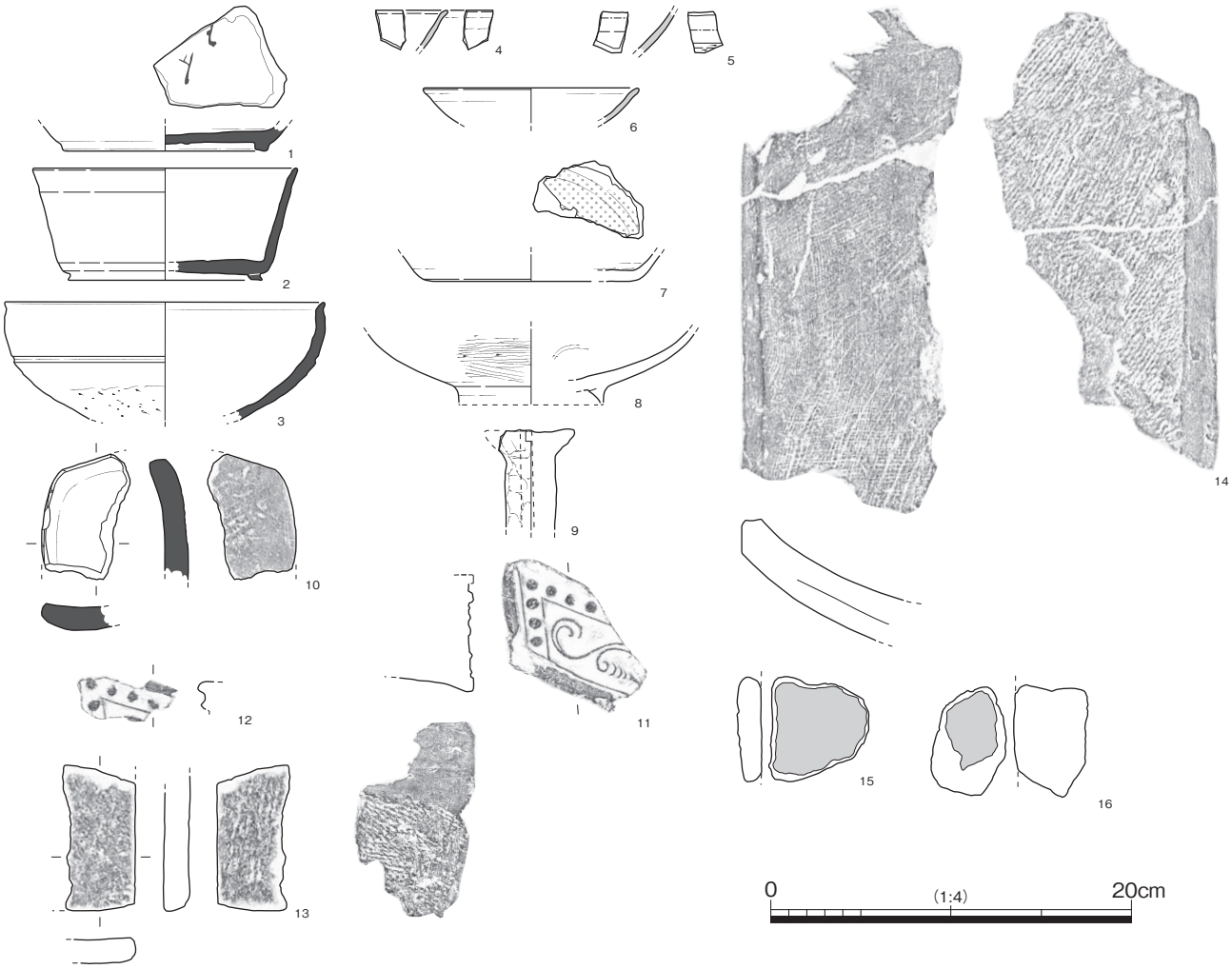


図 166　33-1Tr1.2 層出土遺物

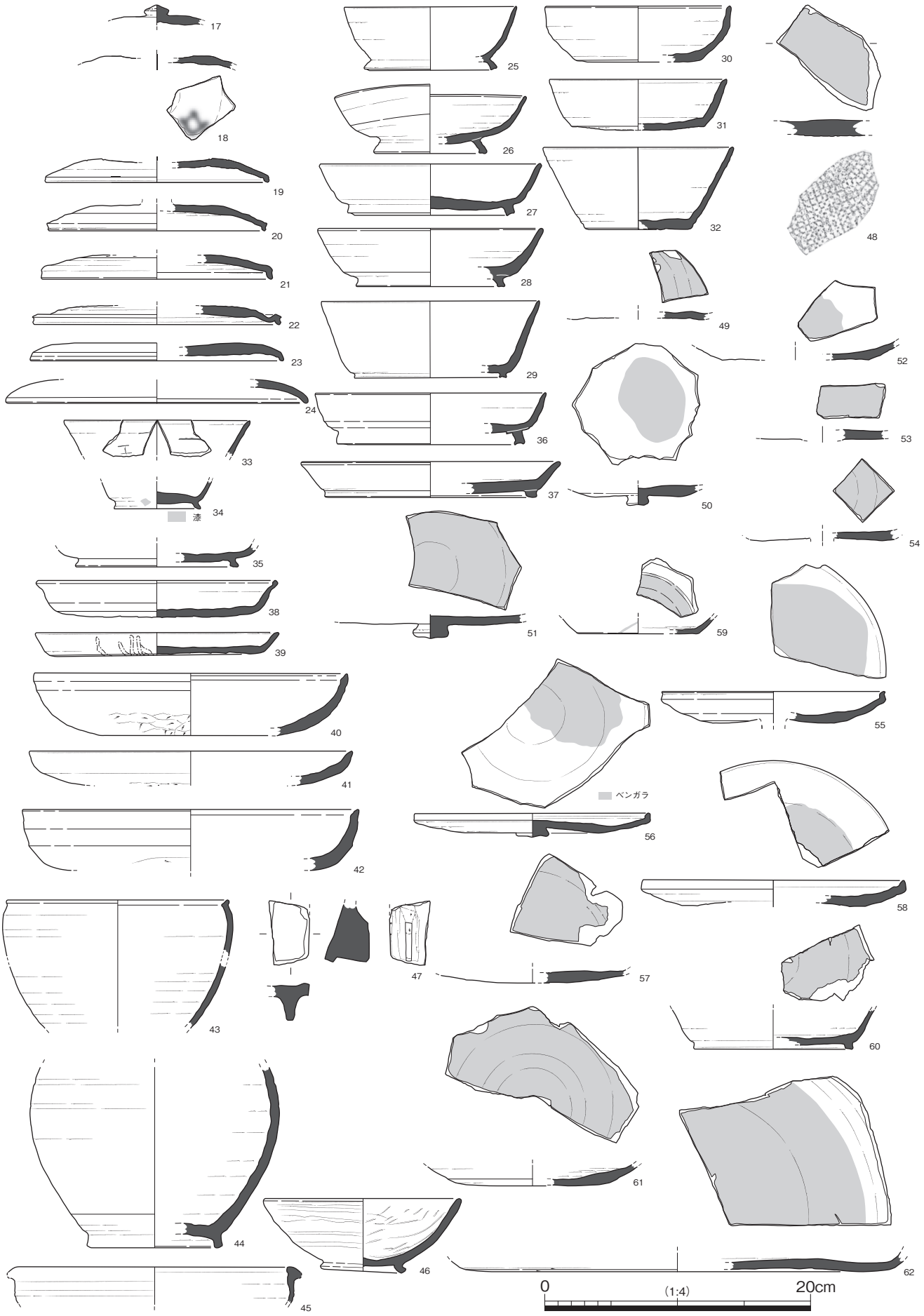


図 167　33-1Tr3 層出土遺物 1

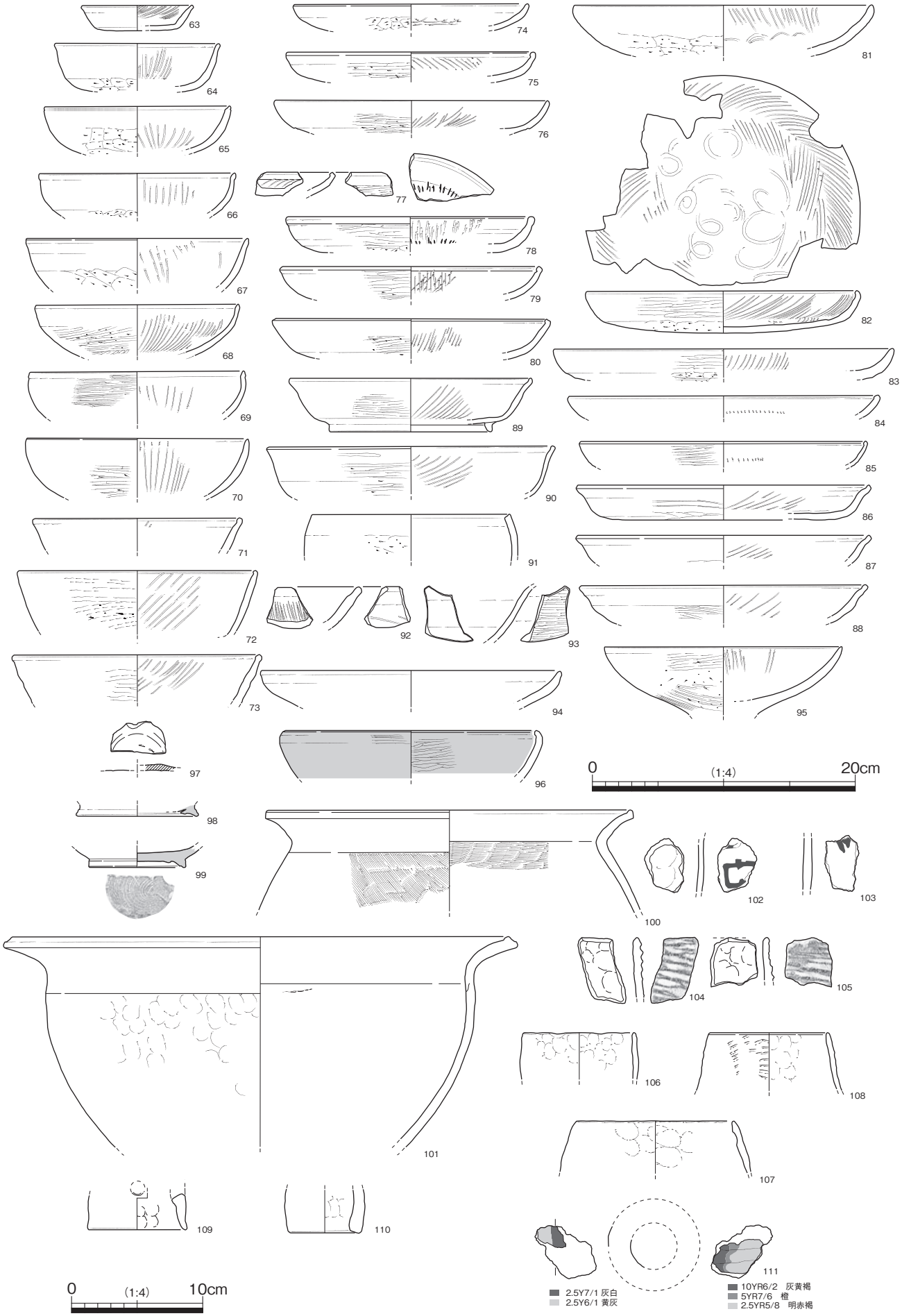


図 168　33-1Tr3 層出土遺物 2

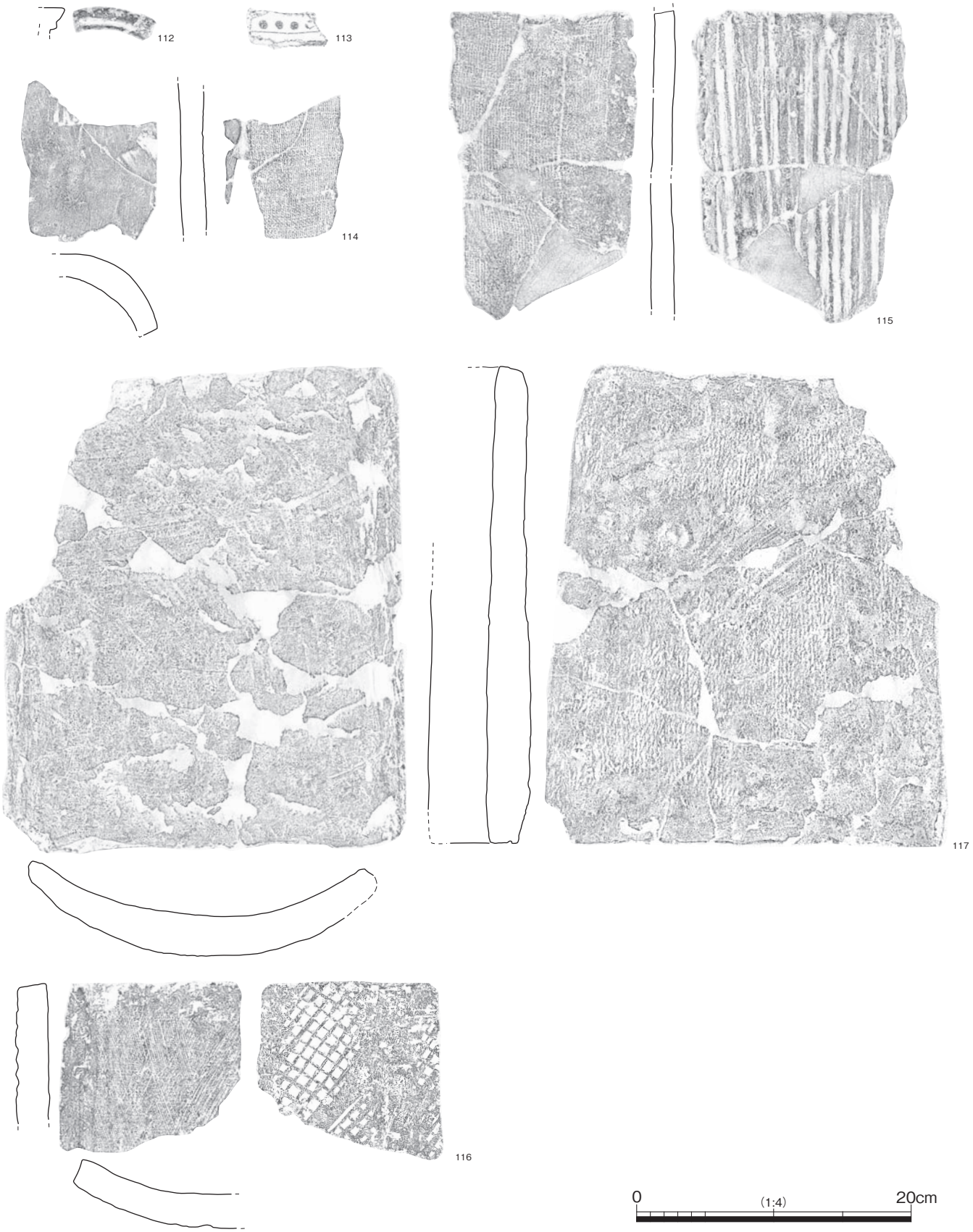


図 169　33-1Tr3 層出土遺物 3

（3）33-1 トレンチの遺構・遺物

SB2015（図 172 ～ 174）

33-1 トレンチ西部で検出した南北棟の掘立柱建物であり、SB2017、SD1001 に切られる。梁行２間（4.2 m）、桁行４間（６m）の柱配置をもち、建物主軸は座標北から５°東偏する。床面積は 25.41 ㎡である。

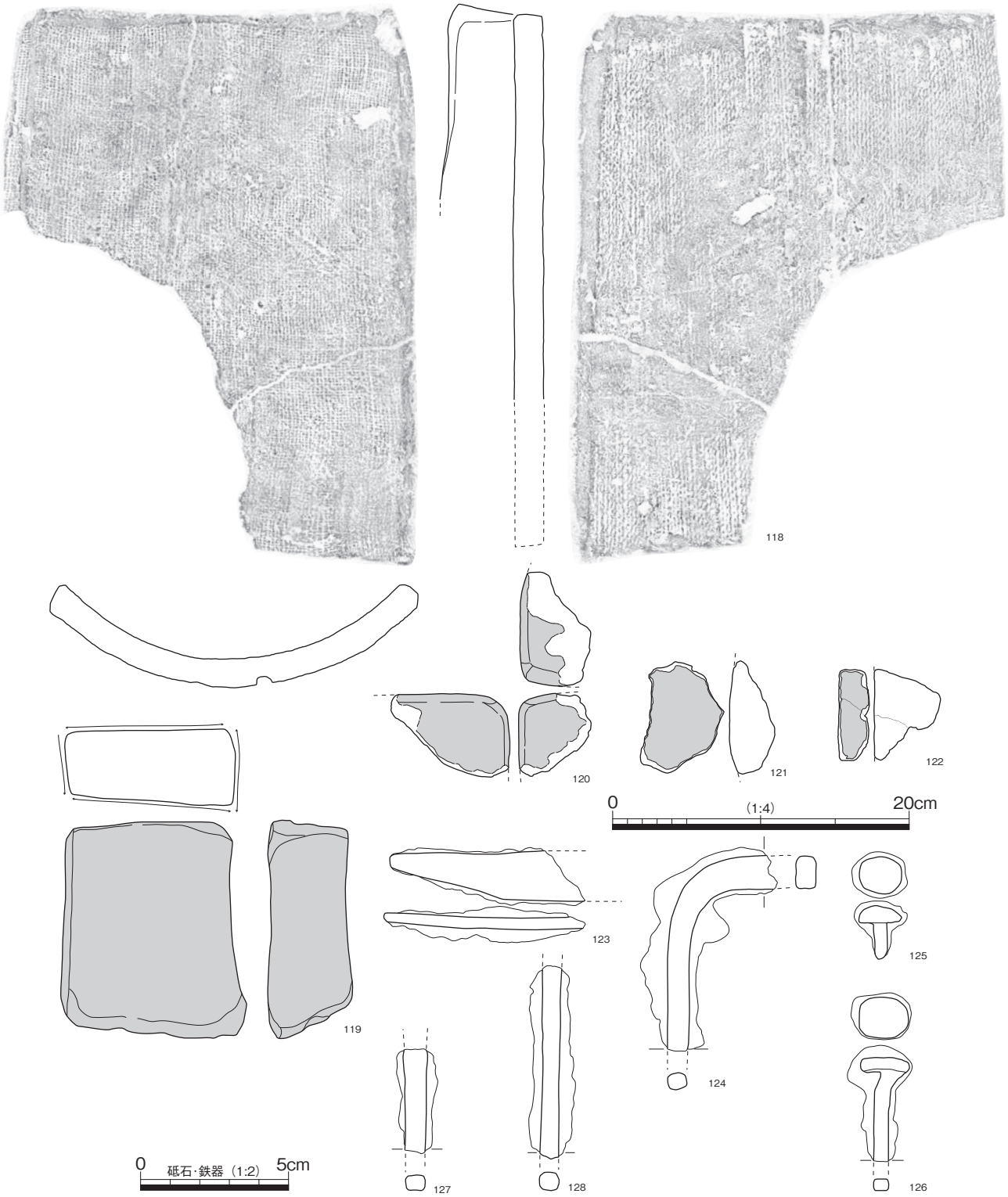


図 170　33-1Tr3 層出土遺物 4

平面及び断面において、径 0.18 mの柱痕跡を確認しており、柱間は梁行で 2.1 m、桁行で 1.5 mと推定できる。

北西隅柱 SP1145、南西隅柱 SP1146 に SA2012 が接続され、南側の SB2016 と南北で連結した配置となる。また、北側梁行は本建物東側の SB2010 の北側梁行に合致する。

出土遺物には、SP1109 の断ち割り（層位不明）より須恵器高杯（143）、同杯（144）、SP1109 上層から土師器甕（145）、SP1084 上層からの土師器甕（146）がみられる。

これらの出土遺物や建物方位、８世紀前葉から中葉の SB1204 に切られることからみて、本建物は７世紀後葉から８世紀初頭に機能したものと考えたい。

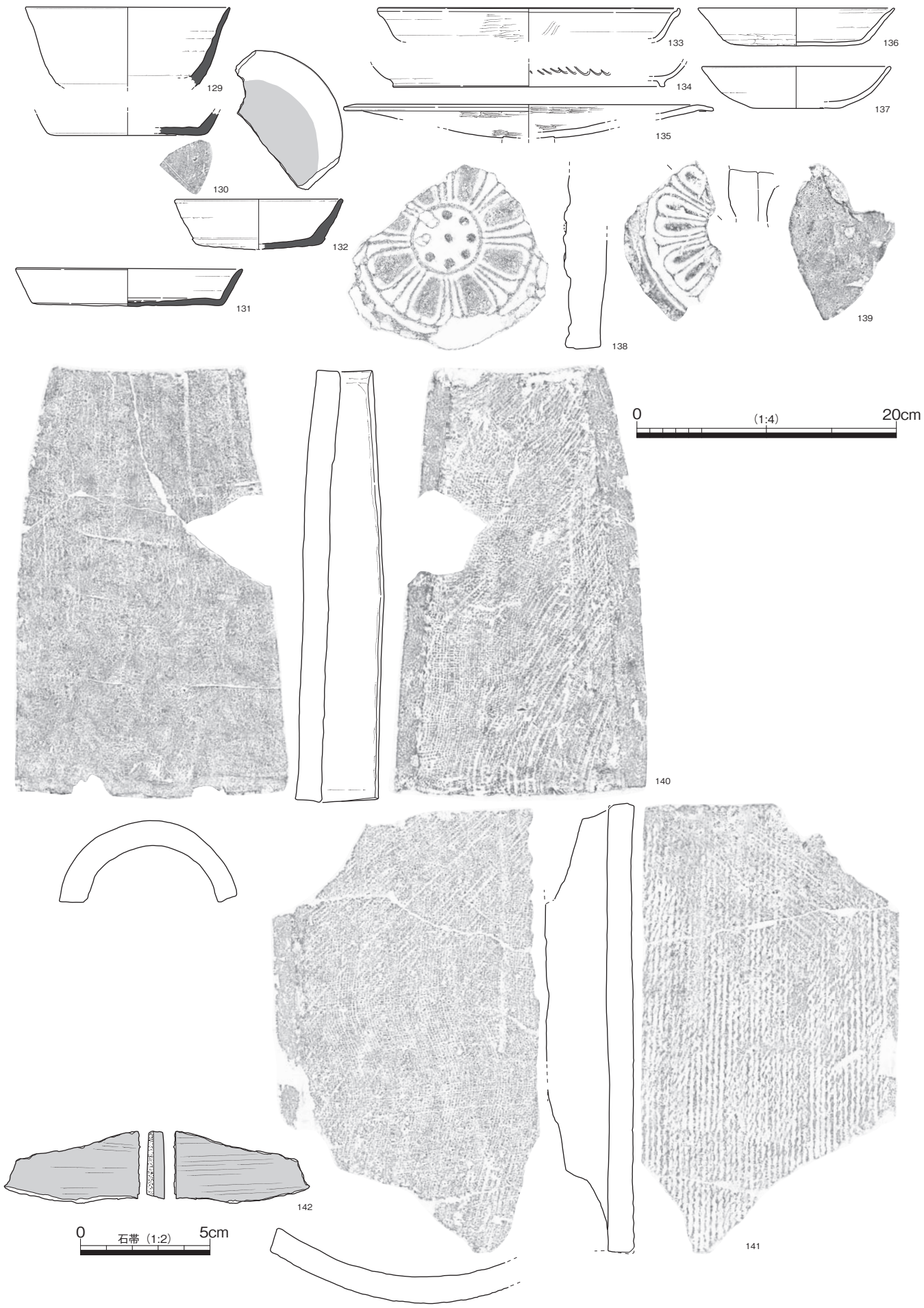


図 171　33-1Tr 北西部遺構面直上出土遺物

図 172　33-1Tr 周辺建物配置状況

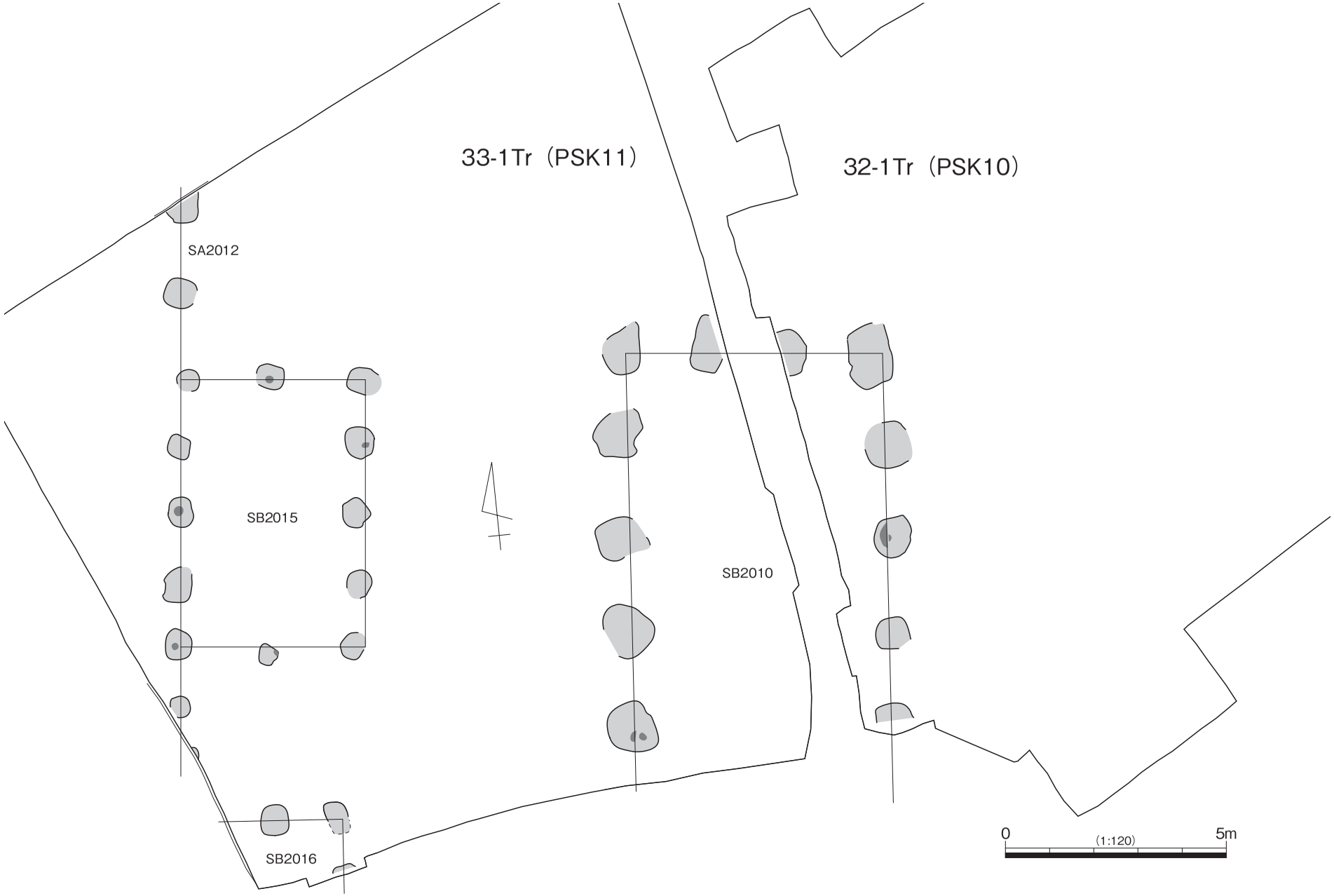


図 173　33-1・2Tr・SB2010 ほか配置図

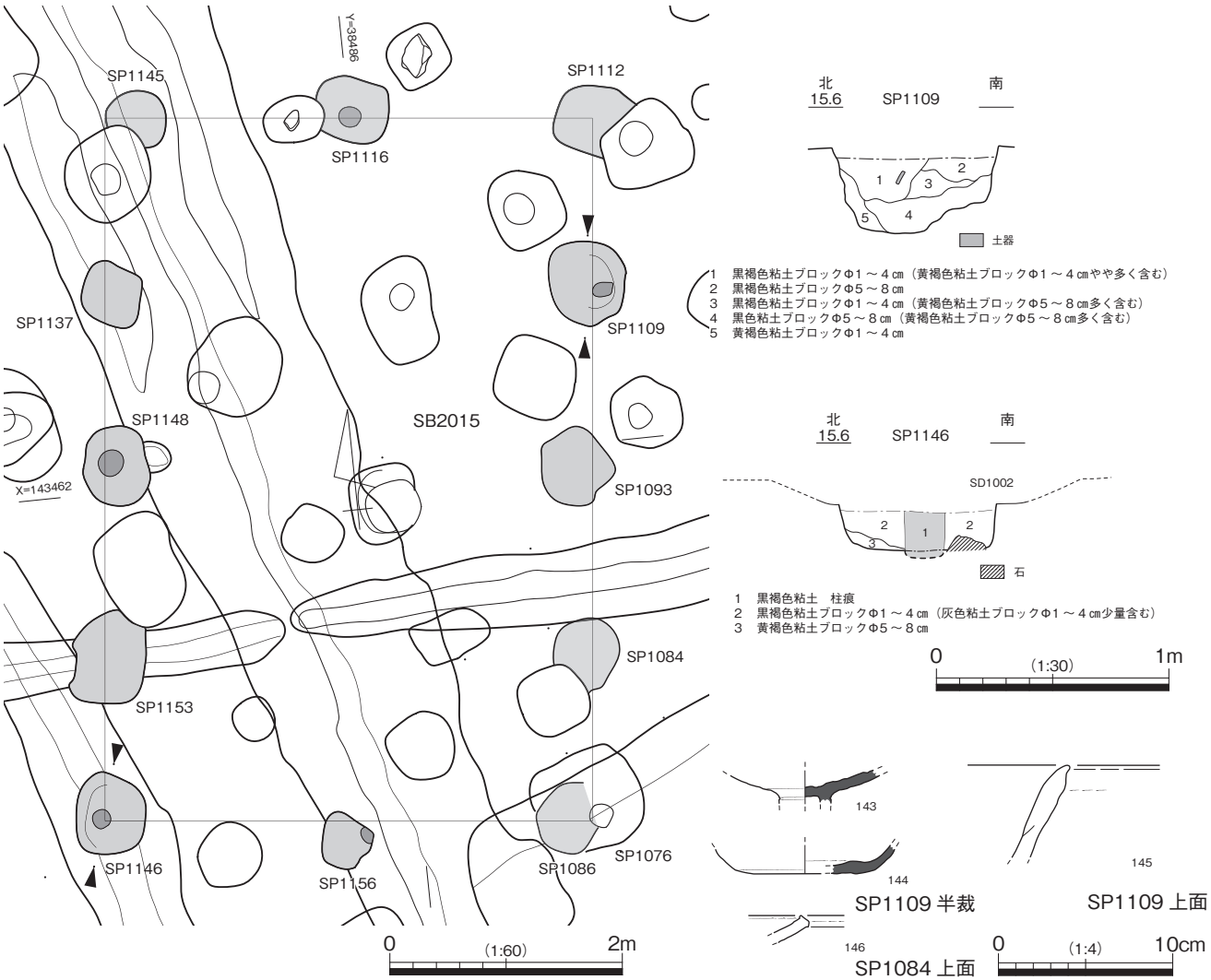


図 174　33-1Tr・SB2015 平断面図及び出土遺物

SB2016（図 172.173.175.176）

33-1 トレンチで検出した掘立柱建物である。検出範囲は、SP1147. 1154. 1173 の 3 基にとどまるが、SB2015.SA2012 との位置関係から建物として復元する。特に SP1147.1154 については、SB2015 南側梁行 SP1156.1086 に柱筋を揃えたものである。

全体形は不明ながら、SA2012 を介して SB2015 と連結された南北棟の建物と考えておきたい。調査範囲内での出土遺物はみられなかったが、SB2015 等と同様の 7 世紀後葉から 8 世紀初頭に帰属する建物と考える。

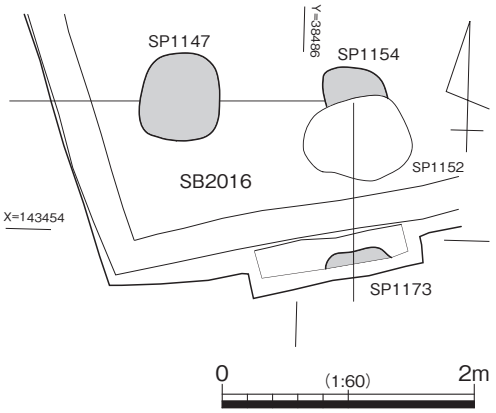


図 175　33-1Tr・SB2016 平面図

SA2012（図 172.173.176）

33-1 トレンチ東部で検出した南北の柱列である。主軸方位は座標北から 5°東偏するもので、SB2015 の西側桁行に接続している。SB2016 とは調査範囲内での接点を確認することが出来ないが、南側への延伸方向及び距離、SB2015 と SB2016 の位置関係からみて、SB2016 の西側桁行に接続する可能性が極めて高いと考える。

柱間は、SB2015 北側で 1.8 m、同建物南側で 1.2 m と一定していないが、南側の SB2015.2016 間で異なる構造をもつことも予想される。

出土遺物は、SP1040 上層より出土した須恵器杯（147）がある。7 世紀後葉に位置付けられる資料であり、SB2015 の年代観とも矛盾していない。

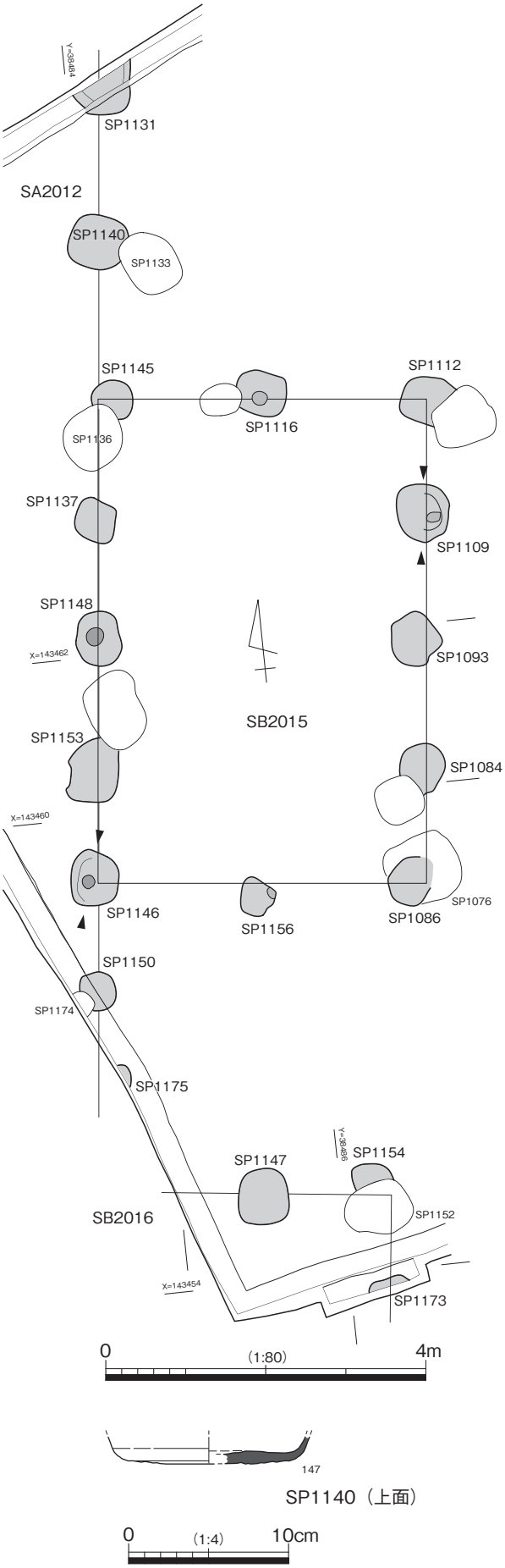


図 176　33-1Tr・SA2012 平面図及び出土遺物

SB2010（図 172.173.177）

33-1 トレンチ東部で検出した南北棟の掘立柱建物である。７世紀中葉の SH1074 を切り、９世紀後葉から 10 世紀前葉の SB1206、11 世紀の SD1010 に切られる。32 次調査 32-1 トレンチの遺構検出状況と合わせて、梁行３間（5.8 m）、桁行４間（8.7 m）以上の柱構造をもち、建物主軸は座標北にほぼ合致した南北棟の大型建物に復元した。前述した SB2015 と建物主軸方位と北側梁行と揃えて構築されている。

掘り方は、長軸１～ 1.4 m、短軸 0.7 ～１mの不定形なものであり、断ち割りを行った 32-1Tr・SP1134、33-1Tr・SP1060 では、径 0.2 mの柱痕跡が確認されている。これら以外の柱穴において、平面で柱痕跡を確認することは困難であったが、柱間は梁行で 1.8 m、桁行で 2.1 mと推定できる。

出土遺物は、33-1Tr・SP1052 の上層から出土した須恵器蓋（148）、32-1Tr・SP1072 上層から出土した須恵器無蓋高杯（10-90．10-91）、平瓦（10-92）がある。

これらの出土遺物の年代観や、SB2015・SA2012 との一体性を考慮して、本建物は７世紀後葉から８世紀初頭に帰属するものとして考えておきたい。

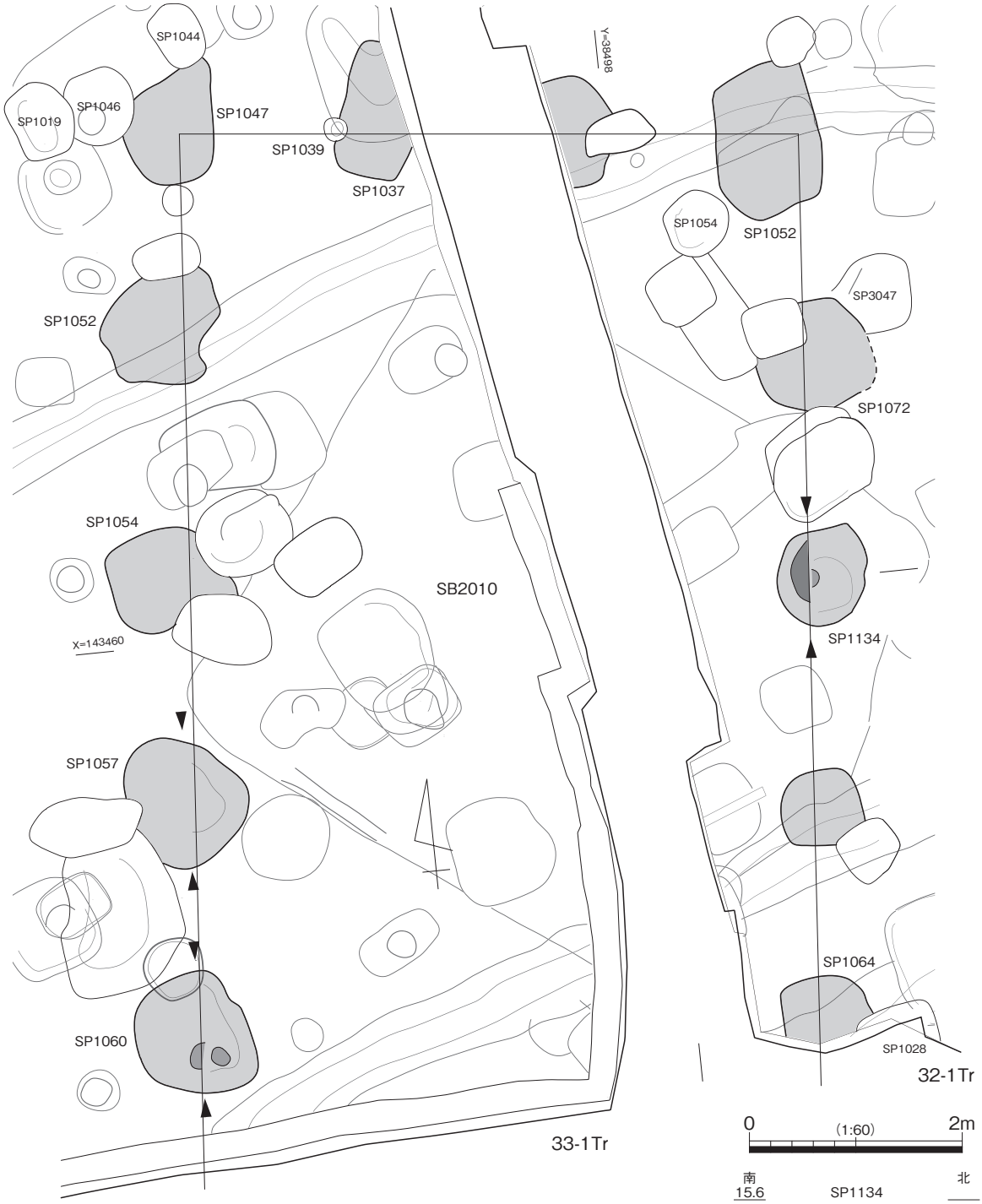
SB2017（図 179）

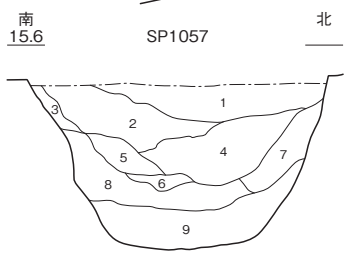
33-1 トレンチ北西部で検出した東西棟の掘立柱建物である。SB2015 を切り、SD1014.SD1001 に切られる。梁行２間（3.5 m）、桁行３間（4.5 m）の側柱に、内部の束柱（SP1118.1119）を加えることで総柱建物となる。床面積は 16 ㎡、建物主軸は座標北から 109°西偏し、条里地割の方位に合致する。平面及び断面における柱痕跡は径 0.13 ～ 0.15 mを測り、南側桁行の柱通りが悪いが、西側梁行及び北側桁行を基準にすれば、柱間は梁行 1.8 m、桁行 1.5 mと考えられる。

束柱穴の SP1118.1119 には、長さ 0.2 ～ 0.4 m、厚さ 0.2 ～ 0.3 mを測る安山岩の板石を据え付けている。

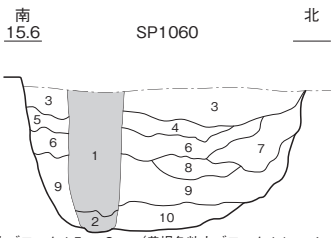
149 ～ 159 は各柱穴からの出土遺物である。152 は製塩土器であり、７世紀中葉から８世紀前半の備讃瀬戸の倉浦式と考えられる。

これらは帰属する層位を特定できないものが多いが、概ね７世紀中葉から８世紀中葉に納まる資料と考えられる。８世紀後葉の SD1014 に切られることや、建物主軸方位が条里地割に合致することなどからみて、本建物は８世紀前葉から中葉に機能したものと考えておきたい。

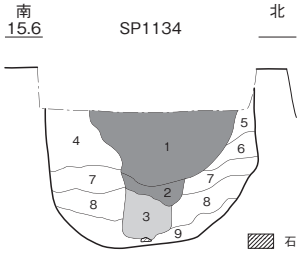




1　黒褐色粘土ブロックΦ5～８㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1～４㎝やや多く含む）
2　黒色粘土ブロックΦ5～８㎝
3　灰黄色粘土ブロックΦ1～４㎝
4　黒色粘土ブロックΦ9㎝以上
5　黒褐色粘土ブロックΦ5～８㎝
6　黒色粘土ブロックΦ9㎝以上
7　黒灰色粘土ブロックΦ5～８㎝
8　黒色粘土ブロックΦ5～８㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1～４㎝やや多く含む）
9　黒色粘土ブロックΦ1～４㎝（黄褐色粘土ブロックΦ5～８㎝多く含む）
※柱痕不明確



1　黒色粘土ブロックΦ5～８㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1～４㎝やや多く含む）柱痕
2　黄褐色粘土ブロックΦ1～４㎝柱痕
3　黒褐色粘土ブロックΦ9㎝以上（黄褐色粘土ブロックΦ1～４㎝やや多く含む）
4　灰褐色粘土ブロックΦ5～８㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1～４㎝やや多く含む）
5　黒色粘土ブロックΦ1～４㎝
6　黒褐色粘土ブロックΦ5～８㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1～４㎝やや多く含む）
7　灰黄褐色粘土ブロックΦ5～８㎝
8　黒色粘土ブロックΦ9㎝以上
9　黒色粘土ブロックΦ9㎝以上（黄褐色粘土ブロックΦ5～８㎝やや多く含む）
10　黒色粘土ブロックΦ9㎝以上（黄褐色粘土ブロックΦ9㎝以上やや多く含む）
※半裁位置やや柱痕からずれる．底面で柱の当たりを確認



1　黒褐色粘土ブロックΦ1～４㎝（灰色，黄色粘土ブロックΦ1～４㎝多く含む）抜き取り
2　灰黄色粘土ブロックΦ1～４㎝（黄色粘土ブロックΦ1～４㎝やや多く含む）抜き取り
3　黒褐色粘土　柱痕
4　黒色粘土ブロックΦ9㎝以上（灰色粘土ブロックΦ5～８㎝多く含む）
5　灰オリーブ色粘土ブロックΦ9㎝以上
6　黒褐色粘土ブロックΦ9㎝以上（黄褐色粘土ブロックΦ5～８㎝多く含む）
7　灰黄色粘土ブロックΦ1～４㎝（粗砂多く含む）
8　灰黄色粘土ブロックΦ5～８㎝（黒色粘土ブロックΦ5～８㎝多く含む）
9　黄褐色粘土ブロックΦ1～４㎝（黒褐色粘土ブロックΦ1～４㎝多く含む）

0　(1:30)　1m

図 177　33-1Tr・SB2010 平断面図

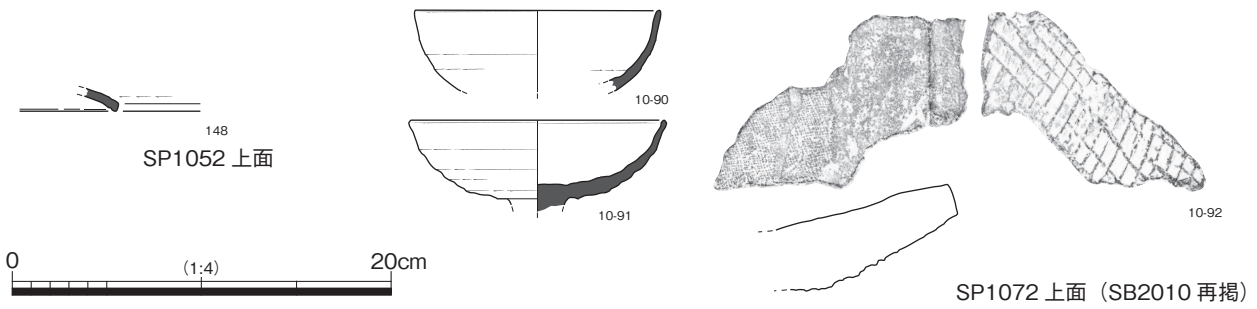


図 178　33-1Tr・SB2010 出土遺物

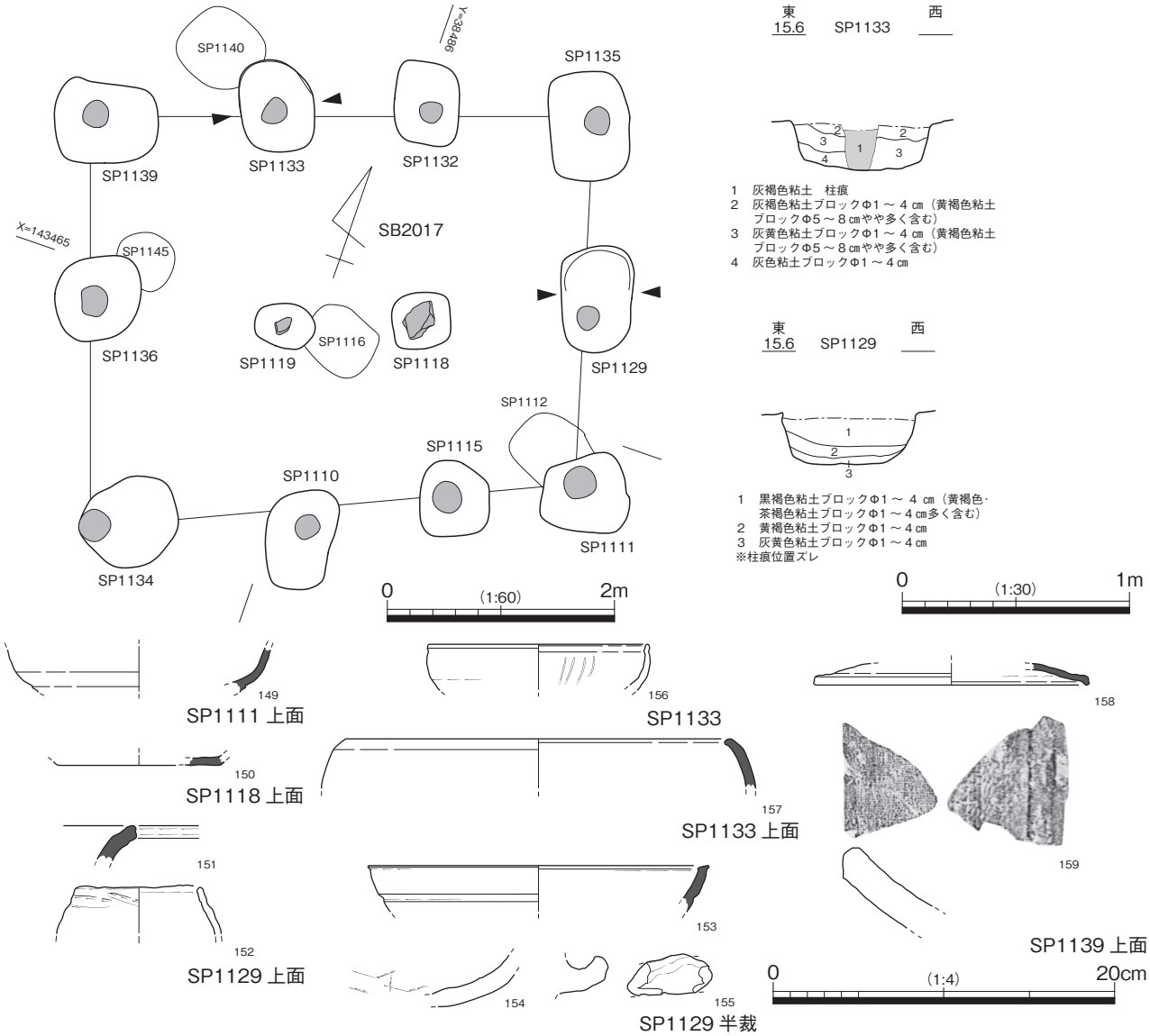


図 179　33-1Tr・SB2017 平断面図及び出土遺物

SA2013（図 180）

33-1 トレンチ北東部で検出した東西方位の柱列である。トレンチ北壁際で、西から SP1033．1034．1032．1036 が柱間 1.8 mで並び、方位は座標北から 115°西偏するものである。SP1036 を除いた柱穴において径 0.2 mの柱痕跡を確認しており、SP1032.1034 の柱のあたりには安山岩製の礎盤石を検出した。大半が調査区外となるため、主軸方位や全体形の把握は困難であるが、入念な据え付けを行っていることから、柵ではなく掘立柱建物となる可能性が高い。

出土遺物は、SP1032 の上層からの須恵器蓋（160）、同裏込土の須恵器蓋（161）、SP1036 上層から出土した須恵器杯（162）がある。SP1036 上層から出土した須恵器杯（162）は 7 世紀末から 8 世紀初頭の資料とみられるが、SP1032 の上層の

須恵器蓋（160）、同裏込土の須恵器蓋（161）の年代観や方位からみて、本遺構は８世紀前葉から中葉に機能したものと考えておきたい。

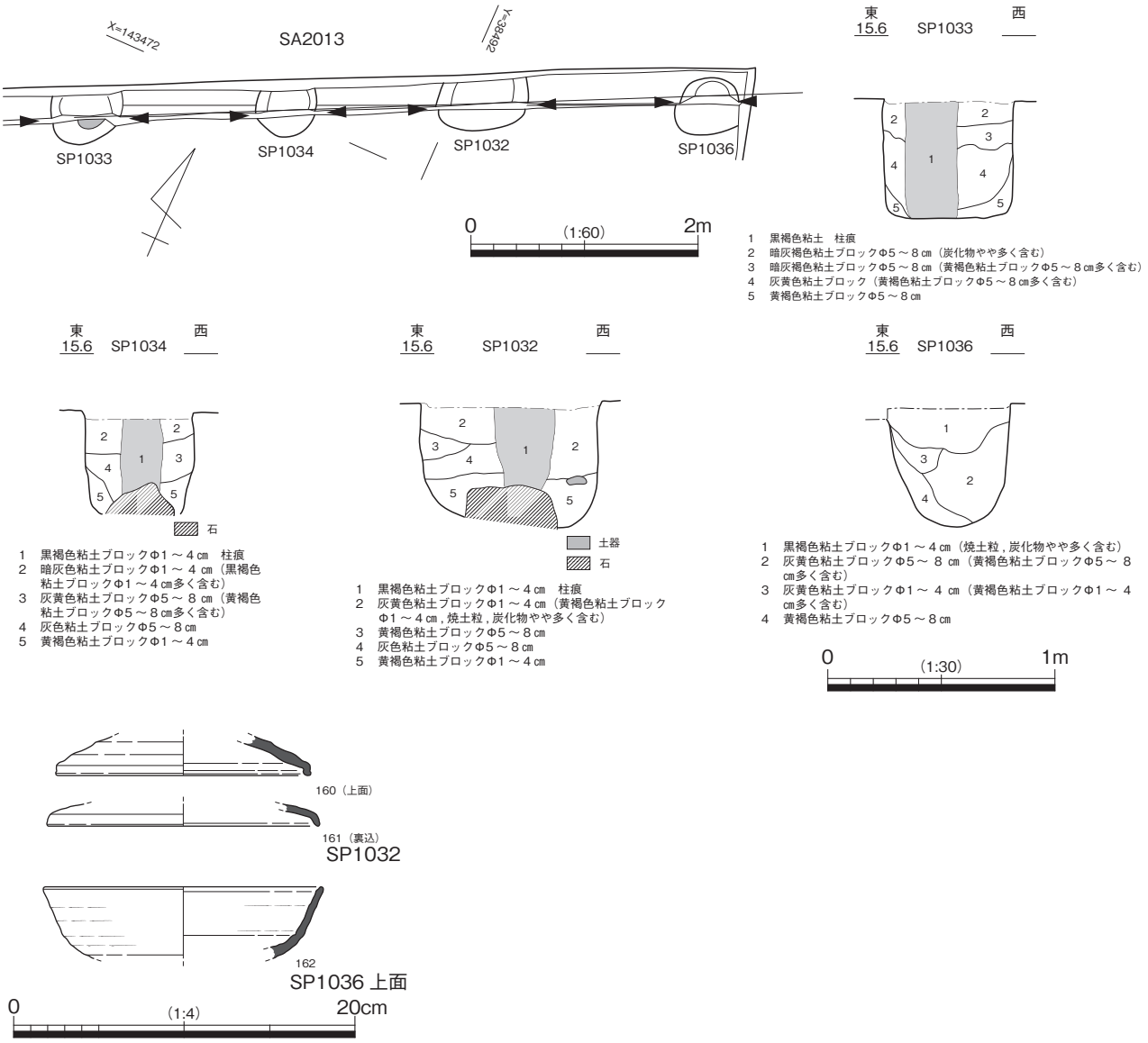


図 180　33-1Tr・SA2013 平断面図及び出土遺物

SB2018（図 181）

33-1 トレンチ北東部で検出した東西棟の掘立柱建物である。梁行２間（3.9 m）、桁行３間（4.5 m）以上の柱配置をもち、主軸方位は座標北から 113°西偏する。南側桁行は、32 次調査 32-1Tr・SA2009 に合致する。本次調査においては、本建物と 32 次調査 SA2009 の詳細な接続関係を確認することはできなかった。

柱は全ての柱穴において抜き取られているが、現状から推定した柱間は、梁行 1.8 m、桁行 1.6 mとなる。断ち割りを行った南側桁行の間柱 SP1012 では、抜き取りの下位に安山岩製の礎盤石が据え付けられ、その傍らに瓦塼（167）が添えられていた。この礎盤石による据え付けは、32 次調査 SA2009 とも共通する。

また、抜き取り上位に石材が集中する点は注意される。この石材集中は、北側桁行 SP1020.1025、南側桁行 SP1017 において顕著にみられるものであり、柱抜き取り後の礎石据え付けに伴う可能性も考えられる。

163 ～ 167 は、本建物からの出土遺物である。須恵器杯（163）は９世紀代、同（165）は 10 世紀前葉の資料と考えられる。畿内系土師器蓋（164）、同杯（166）は７世紀末から８世紀初頭の資料であり、時期的に先行する遺構からの混入資料と考えられる。瓦塼（167）は複数の粘土板を接合したものであり、擬口縁で剥離するものである。

これらの資料のうち、SP1015 の抜き取りから出土した須恵器杯（165）の年代観から、本建物は 10 世紀前葉に柱抜き取りが行われたと考えられる。しかし、抜き取り上部に石材が集中することから、礎石建物化され、その後一定期間継続した可能性も指摘しておきたい。

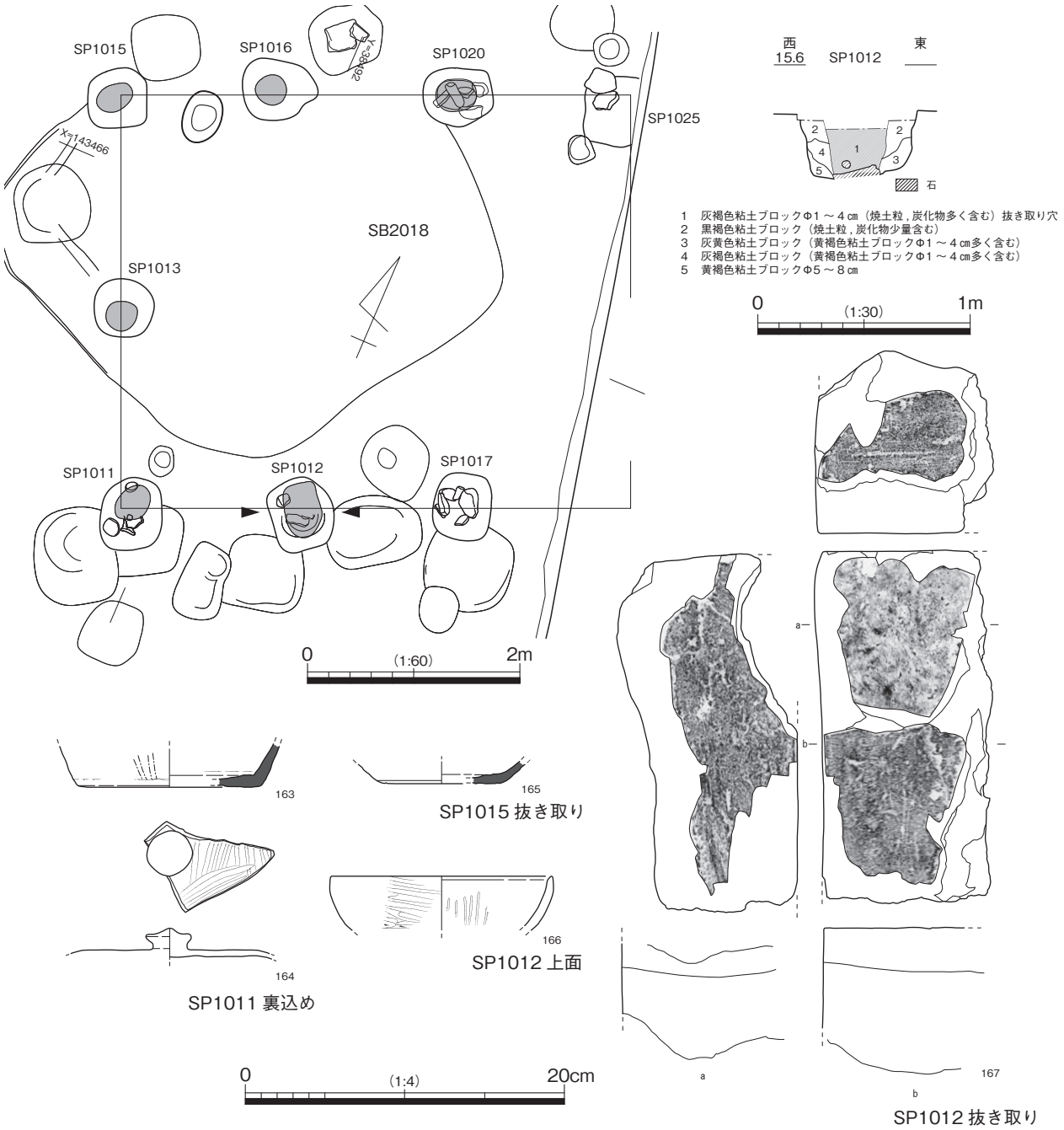
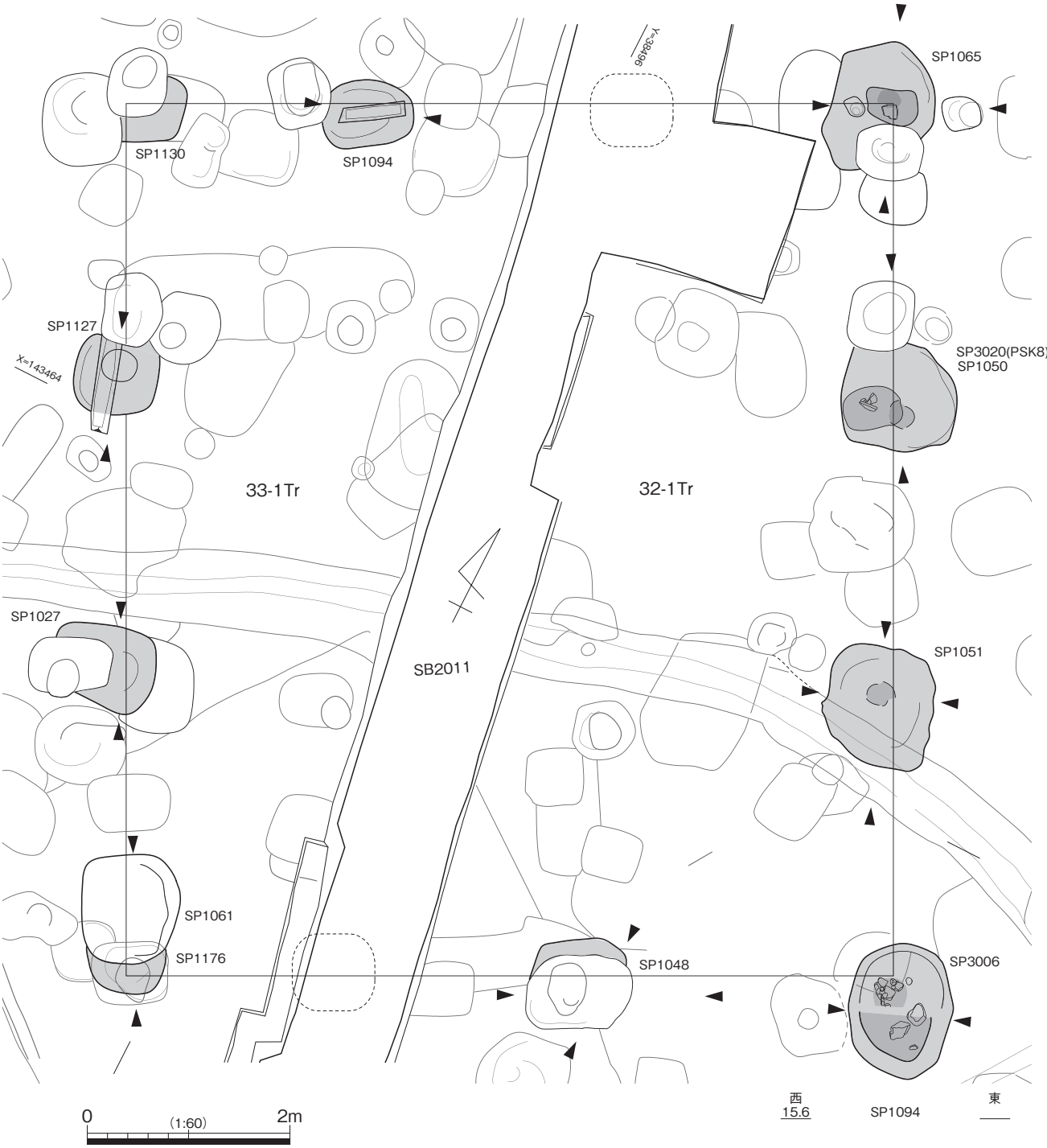


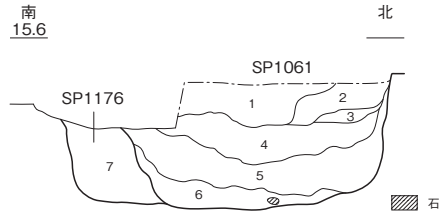
図 181　33-1Tr・SB2018 平断面図及び出土遺物

SB2011（図 182.183）

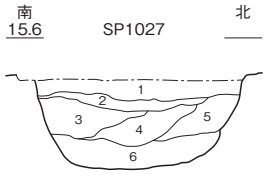
33-1 トレンチ東部で検出した掘立柱建物である。SH1074 を切り、SB2018. 2012. SD1010 に切られる。32 次調査 32-1 トレンチにおいて建物東半部（SB2011）を確認しているが、本次調査結果より、梁行３間（7.5 m）、桁行３間（8.5 m）、床面積63.8 ㎡、建物主軸方位は座標北から 26°西偏した南北棟の掘立柱建物に復元した。柱通りは概ね良好であるが、梁行が 32-1・33-1 トレンチ間の未調査部分を挟んでいるため、構成する柱穴の特定に検討の余地を残すが、現状での柱間は、梁行 2.4 ～ 2.6 m、桁行 2.7 ～ 3 mを測り、東側桁行を中心に径 0.3 mの柱痕跡を確認している。

168 ～ 171、10-93 ～ 95 は出土遺物である。これらのうち、時期的に後出資料は SP1094 上面から出土した土師質土器杯（169）であり、10 世紀中葉の資料とみられる。しかし、本資料は上面からの出土資料であり、帰属する層位に課題を残している。

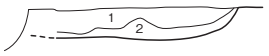




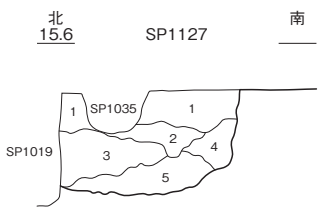
1　灰褐色粘土ブロックΦ1～4㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む）
2　黒褐色粘土ブロックΦ1～4㎝
3　灰黄色粘土ブロックΦ1～4㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む）
4　黒褐色粘土ブロックΦ5～8㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む）
5　灰褐色粘土ブロックΦ5～8㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む）
6　灰黄色粘土ブロックΦ5～8㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む）
※柱痕不明確
7　黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝（黒褐色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む）



1　灰褐色粘土ブロックΦ1～4㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝,焼土粒やや多く含む）
2　黒褐色粘土ブロックΦ1～4㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む）
3　黒色粘土ブロックΦ5～8㎝
4　灰黄色粘土ブロックΦ1～4㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む）
5　灰オリーブ色粘土ブロックΦ1～4㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む）
6　黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝



1　灰褐色粘土ブロック（黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む）
2　黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝



1　黄褐色シルトブロックΦ9㎝以上（黒褐色シルトブロックΦ1～4㎝やや多く含む）
2　黄褐色シルトブロックΦ9㎝以上
3　黄褐色シルトブロックΦ5～8㎝（灰色シルトブロックΦ1～4㎝多く含む）
4　灰黄色粘土ブロックΦ5～8㎝
5　黄褐色粘土ブロックΦ5～8㎝（灰色シルトブロックΦ1～4㎝多く含む）

図 182　33-1Tr・SB2011 平断面図

ここでは、10 世紀前葉に柱抜き取りが行われる SB1205 に切られることを重視して、本建物は 9 世紀の後葉から 10 世紀前葉に機能したものと考えておきたい。

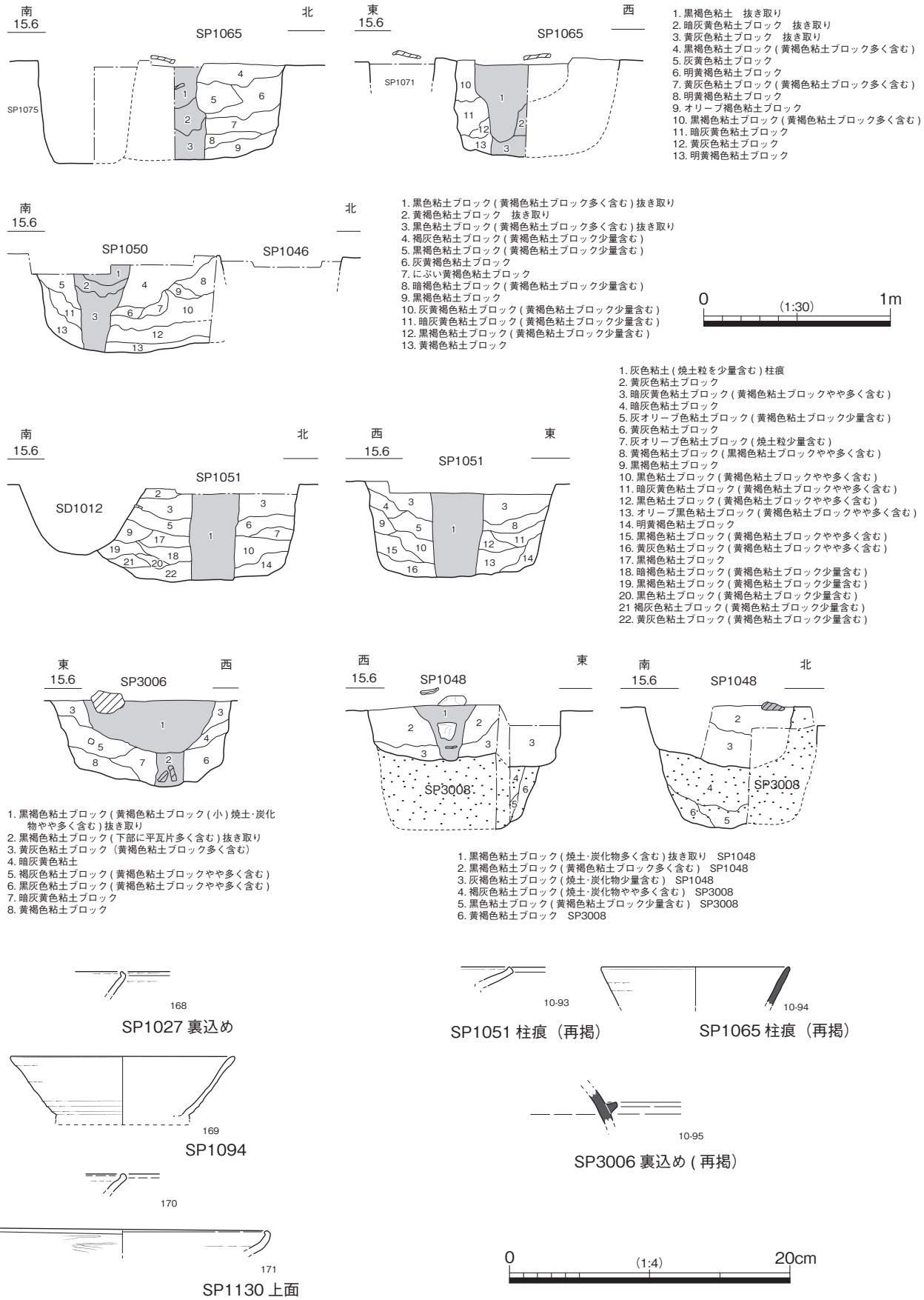


図 183　33-1Tr・SB2011 断面図及び出土遺物

SB2012（図 184.185）

33-1 トレンチ西部で確認した東西棟の掘立柱建物である。SH1074・SB2011 を切り、SD1010 に切られる。30 次調査及び 32 次調査において東半部を確認しており、本次調査成果をもって、梁行２間（4.8 m）、桁行３間（7.8 m）、建物主軸方位が座標北から 110°西偏する東西棟として復元する。また身舎に SP3008 が存在することから、総柱建物となる可能性が高い。また、北側桁行 SP1040 に対応する南側桁行柱やこれらに対応する東柱の柱穴については、32-1・33-1 トレンチ間の未調査地を挟んでいるために明確にできなかった。

柱は全て抜き取られているが、現況から判断した柱間は梁行 2.4 m、桁行 2.4 mである。32-1Tr・SP3005 では、掘り方の中位に安山岩製の礎盤石が据えられている。他の柱穴の柱の当たりより高い SP3005 中位から検出されていることからみて、改修を受けた際に据え付けられたものと考えられる。

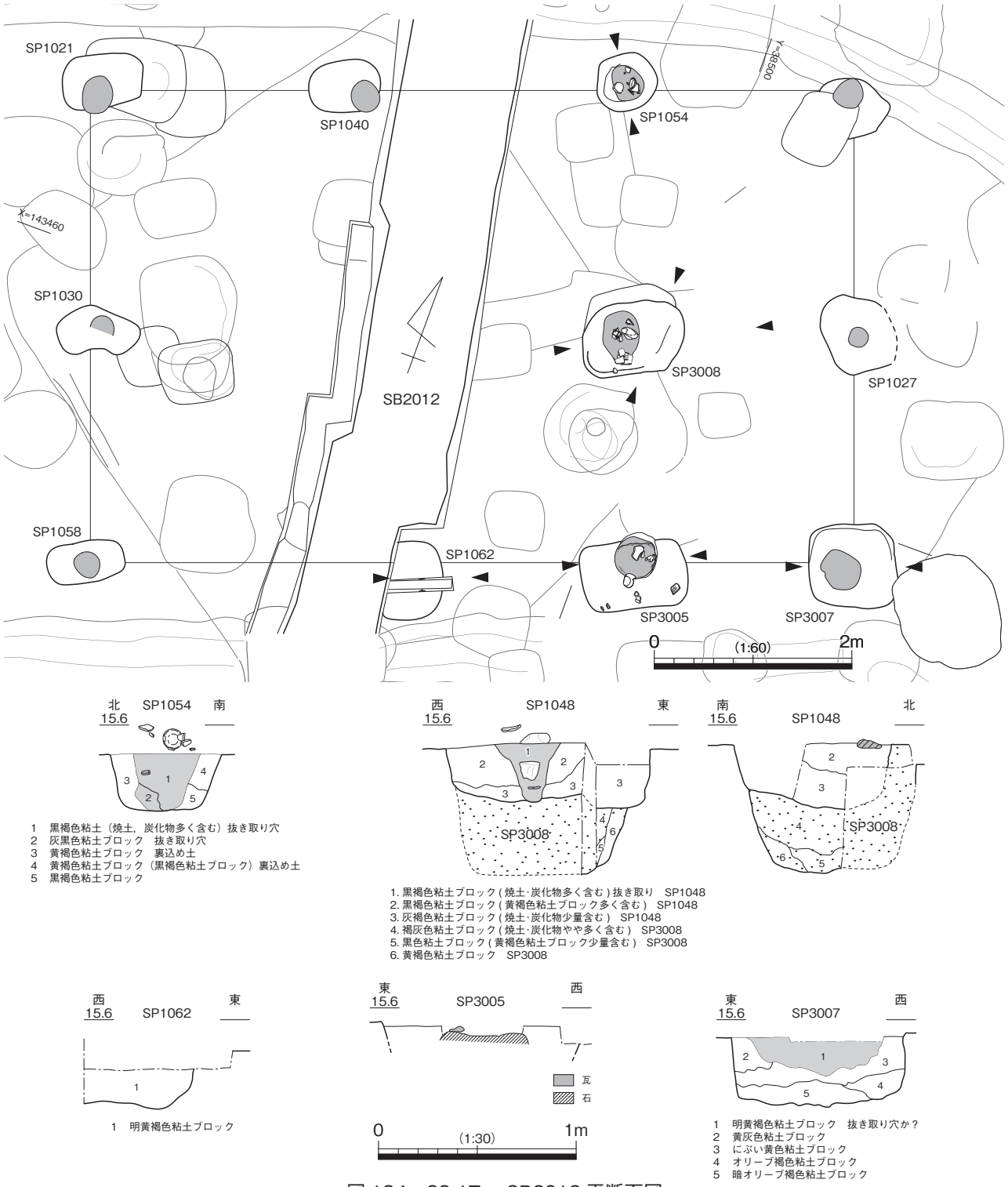


図 184 33-1Tr・SB2012 平断面図

出土遺物のうち、SP1054 抜き取りから出土した土師質土器杯（10-96．10-97．10-99）、SP3005 の抜き取り出土の土師質土器杯（8-391）、SP3005 の裏込土からの土師質土器杯（8-392）の年代観より、本建物は 10 世紀中葉に構築され、１回程度の改修を経て、11 世紀前葉に廃絶したものと考える。SP3005 の裏込めから出土した篠産の須恵器鉢（8-393）は、10 世紀後半に比定される資料である。

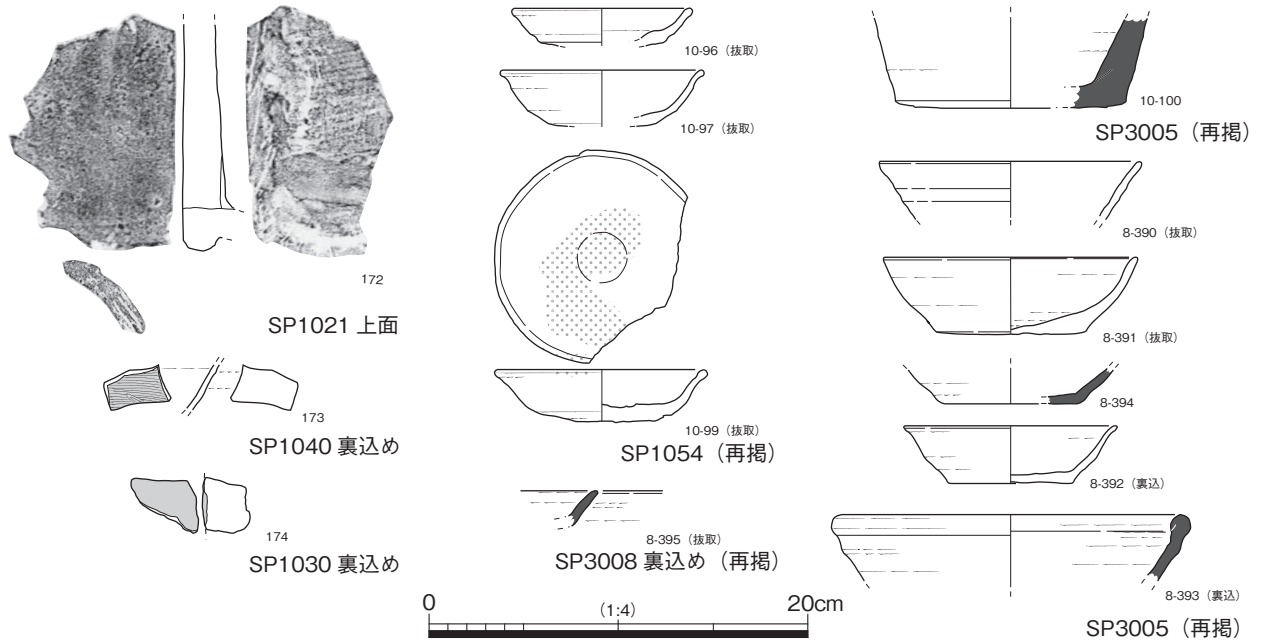


図 185　33-1Tr・SB2012 出土遺物

33-1 トレンチ柱穴出土遺物（図 186）

175 ～ 186 は、33-1 トレンチの柱穴のうち、建物復元に至らなかったものから出土した資料である。本調査区における遺構形成時期を示す資料であるので、ここに提示しておきたい。

176・181 は製塩土器であり、７世紀中葉から８世紀前半の資料と考えられる。180 は鞴羽口、185 は瓦塼、186 は白色凝灰岩片である。

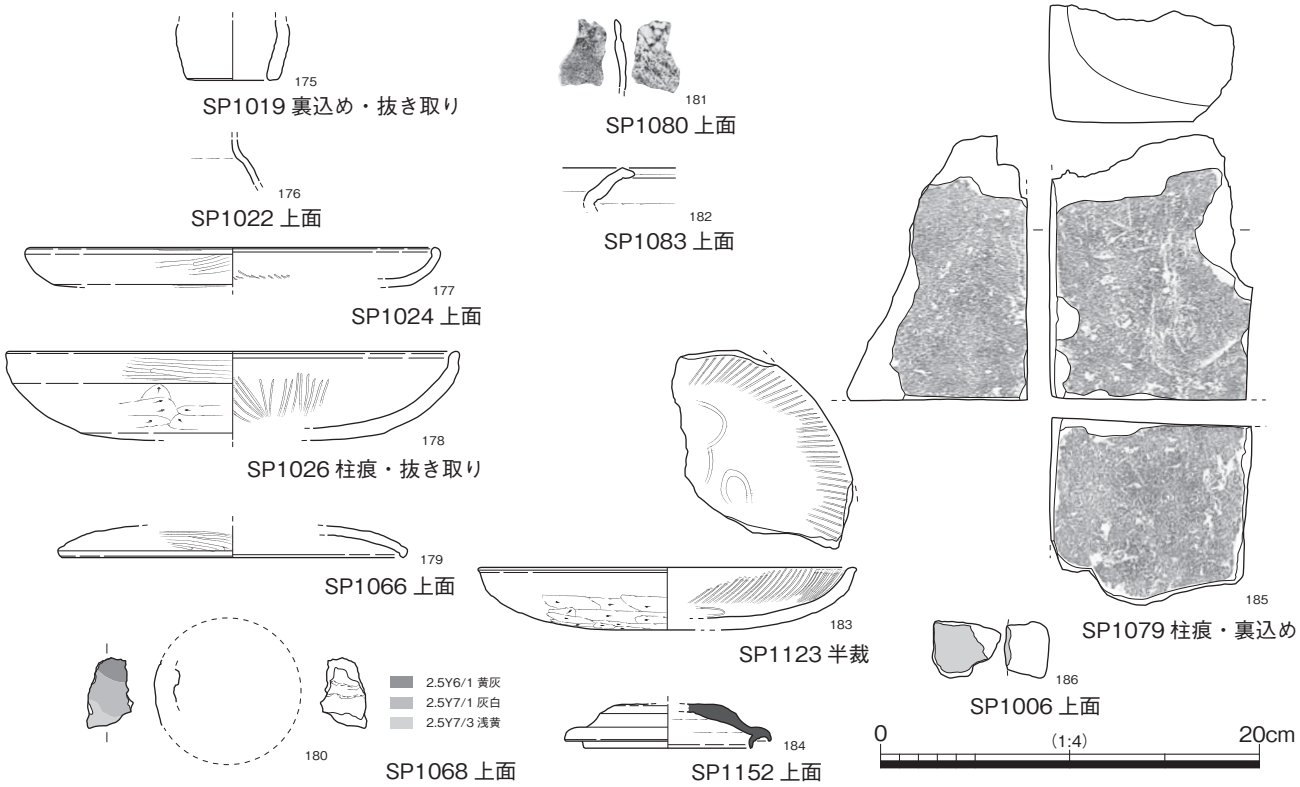


図 186　33-1Tr・柱穴出土遺物

SH1074.1095（図 187）

33-1 トレンチ東部で検出した竪穴建物である。

SH1074 は、32 次調査において東半部を検出し、本次調査において一辺が約 5 mの竪穴建物であることが確定した。

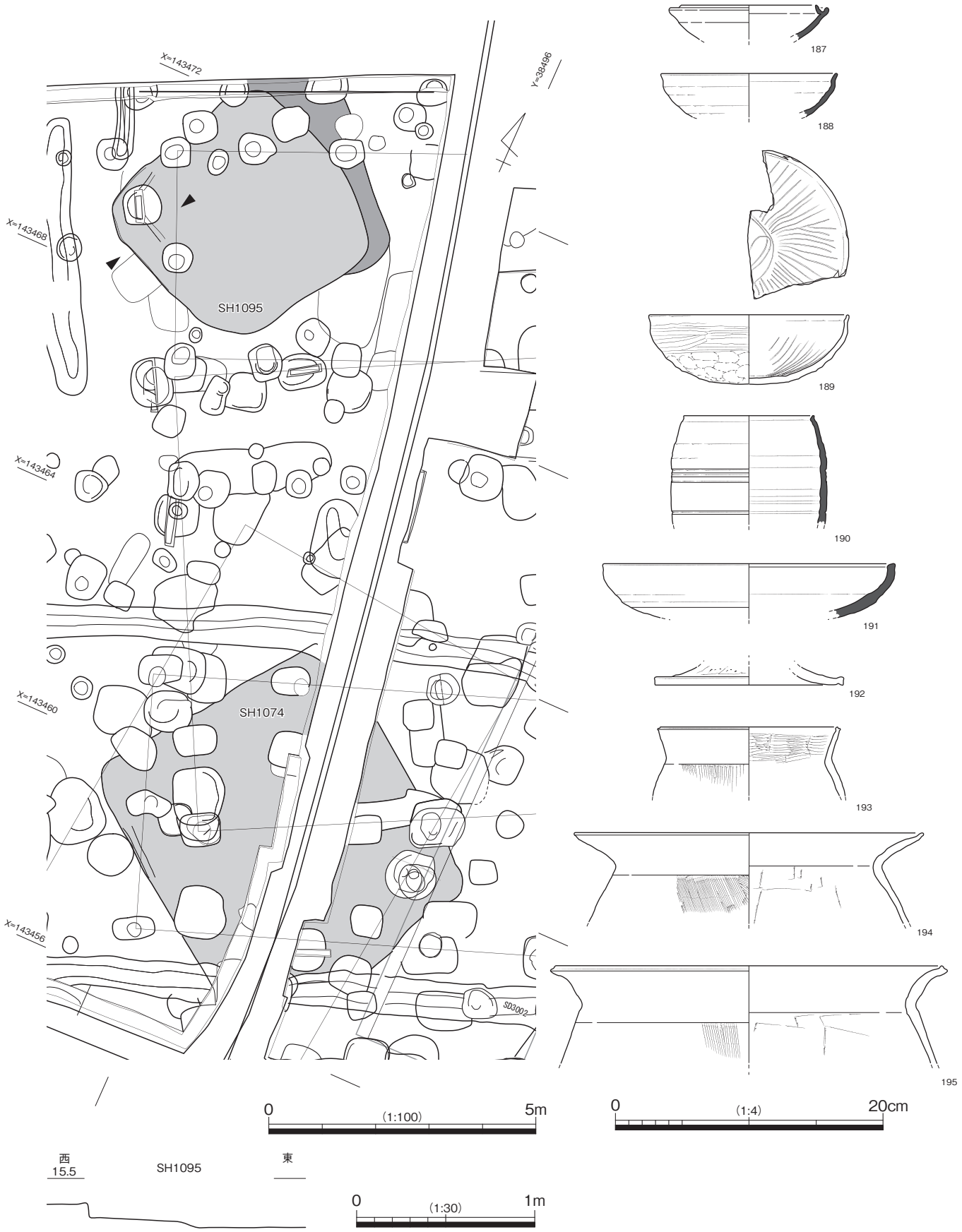


図 187　33-1・32-1Tr・SH1074.SH1095 平断面図及び出土遺物

SB2010.2011.2012.SD1010 等の遺構に切られるもので、層位的には本調査区で最も先行する時期の遺構であると考えられる。

調査範囲内で出土遺物はみられないが、層位及び周辺における竪穴建物の年代観からみて、７世紀中葉の所産と考えられる。

SH1095 は、一辺約４ｍの隅丸方形を呈し、SA2013、SB2018 に切られる。遺構番号を与えていないが、北東部に先行する同規模の竪穴建物が存在している。現状で竈をもたず、約 0.15 ｍの壁高が遺存している。

出土遺物（187 ～ 195）は全て埋没土中から出土した。これらの資料は、７世紀中葉に位置付けられるものと考えられる。

SK1009（図 188 ～ 192）

33-1 トレンチ南西部で検出した大型土坑である。条里地割に合致した東西方位を示し、SB2015 を切り、SD1001.1002 に切られる。現状で東西長さ約７ｍ、南北幅 2.1 ｍ、深さ 0.3 ｍを測る。断面形は逆台形を呈し、底面は平滑である。埋没土は褐灰色粘土の偽礫が主体をしめており、部分的に茶褐色粘土の偽礫がまとまってみられる箇所がある。掘開後の流入・流水を示す堆積層は確認しておらず、早期に一括して埋め戻されたと考えられる。

層位的にはほぼ単一層であるが、遺物はレベルにより上位・下位の２単位に区分して取り上げた。

196 ～ 235 は上位出土遺物である。216 ～ 218 は須恵器蓋の内面を利用した転用硯であり、218 の内面には字義不明の墨書が確認できる。219 は異形の土師器鉢。軒丸瓦（220）は、開法寺でみられる KH106 型式と考えられる。平瓦（223 ～ 232）は細い縄目叩き、部分的な枠線をもつ格子叩きが主体となるが、平行叩き（232）が１点のみみられる。233･234 は白色凝灰岩片である。本遺構から出土した瓦の出土量は破片数 69 点（丸瓦 19 点（28%）、平瓦 50 点（72%））、総重量 19,917 ｇ（丸瓦 3,916 ｇ（20%）、平瓦 16,001 ｇ（80%））を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと縄叩きの比率は破片数では 42%：58%、重量比では 57%：43%となる。

236 ～ 239 は、底面直上から出土し、下位として取り上げた資料である。薄手の土師器皿（237）外底面に手持ちケズリが確認されるため、回転台の使用を想定することはできない。238 は法量・器形からみて、大型の円面硯と考えられる。

これらの資料のうち、一部に須恵器杯（202）や同横瓶（213）等の古相を示す資料がみられるが、大半の資料は８世紀後葉に比定されるため、本遺構の形成時期を同時期と推定しておきたい。

SD1014（図 188.193.194）

33-1 トレンチ北西部で検出した東西溝である。SB2017・SA2012 を切り、SD1001.1002 に切られる。現状で東西長さ約８ｍ、南北幅 1.2 ｍ、深さ 0.1 ～ 0.2 ｍを測り、西側の調査区外へ延びる。埋没土は、灰褐色粘土の偽礫による単一層であり、流水痕跡はみられない。

出土遺物（240 ～ 262）は３か所程度にまとまって出土している。246 は製塩土器片であり、５世紀代に遡る資料と考えられる。247 は瓦当面が剥落する軒丸瓦。丸瓦（248）の凹面には竹状模骨痕が確認できる。262 は白色凝灰岩片である。本遺構から出土した瓦の出土量は破片数 59 点（丸瓦 23 点（39%）、平瓦 36 点（61%））、総重量 19,578 ｇ（丸瓦 4,927 ｇ（25%）、平瓦 14,651 ｇ（75%））を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと縄叩きの比率は破片数では 28%：72%、重量比では 27%：73%となる。

これらの出土遺物のうち、須恵器（240 ～ 243）、土師器甕（245）の年代観から、本遺構は９世紀前葉に埋め戻されたと考える。

SD1010（図 188.195）

33-1 トレンチ中央で検出した東西溝である。本調査区西側における 30 次調査 30-3 トレンチ（SD3046）、32 次調査 32-1 トレンチ（SD1012）と同一溝と考えられる。

上面幅１ｍ、深さ 0.5 ｍを測り、逆凸形の断面をもっている。埋没土は３つに区分できる。最下層は、ラミナがみ

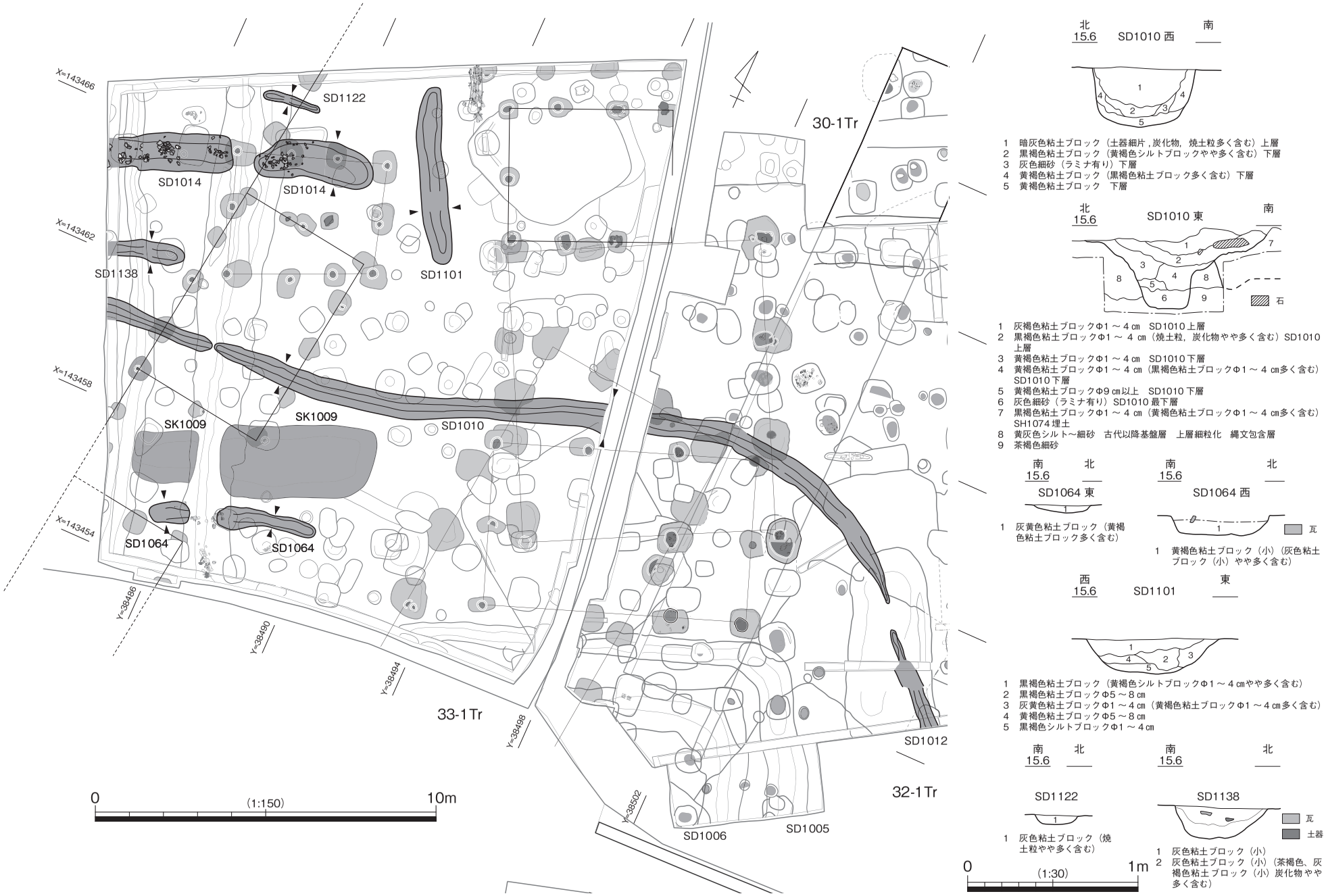


図 188　33 次調査区各溝平断面図

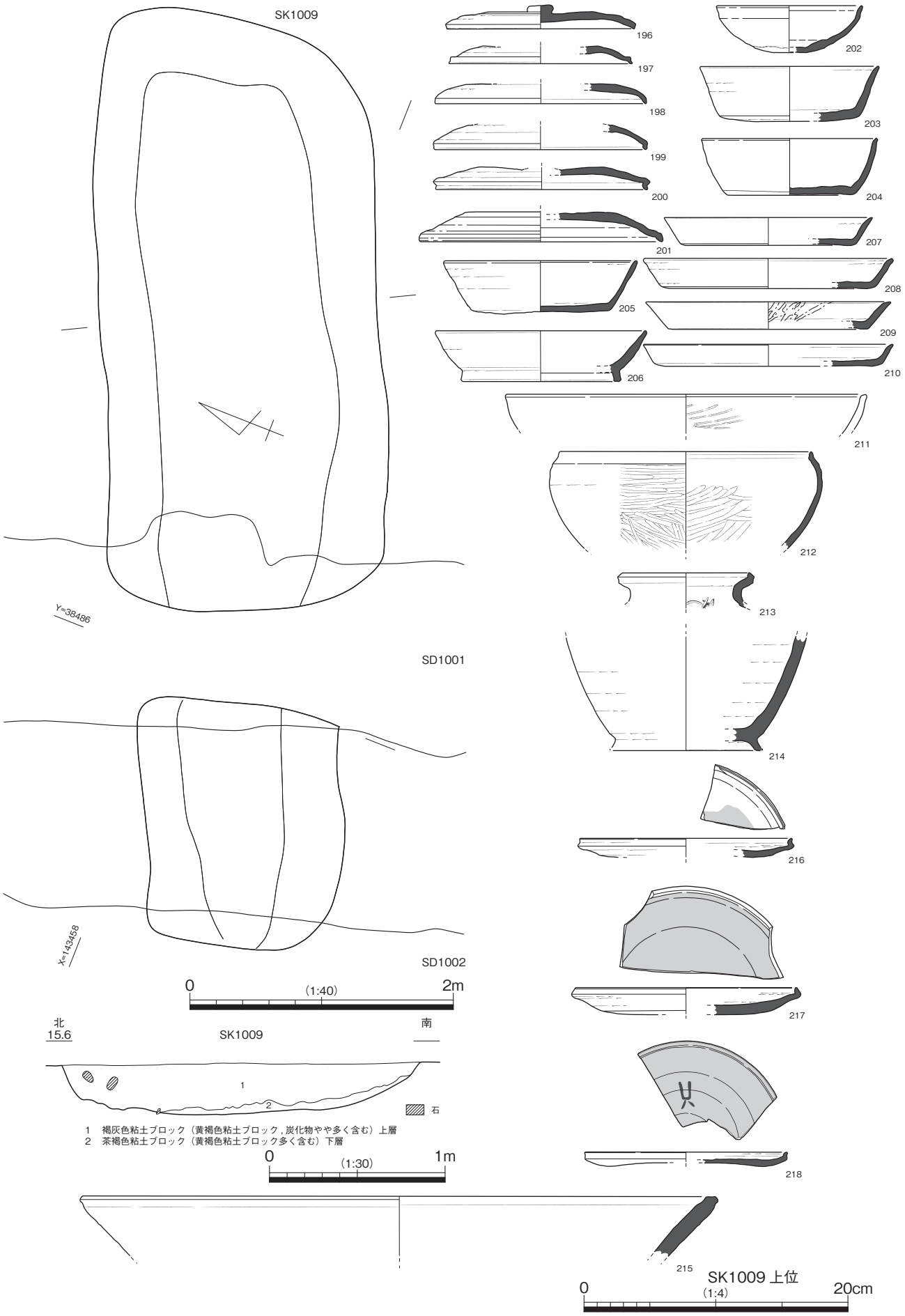


図 189　33-1Tr・SK1009 平断面図及び出土遺物

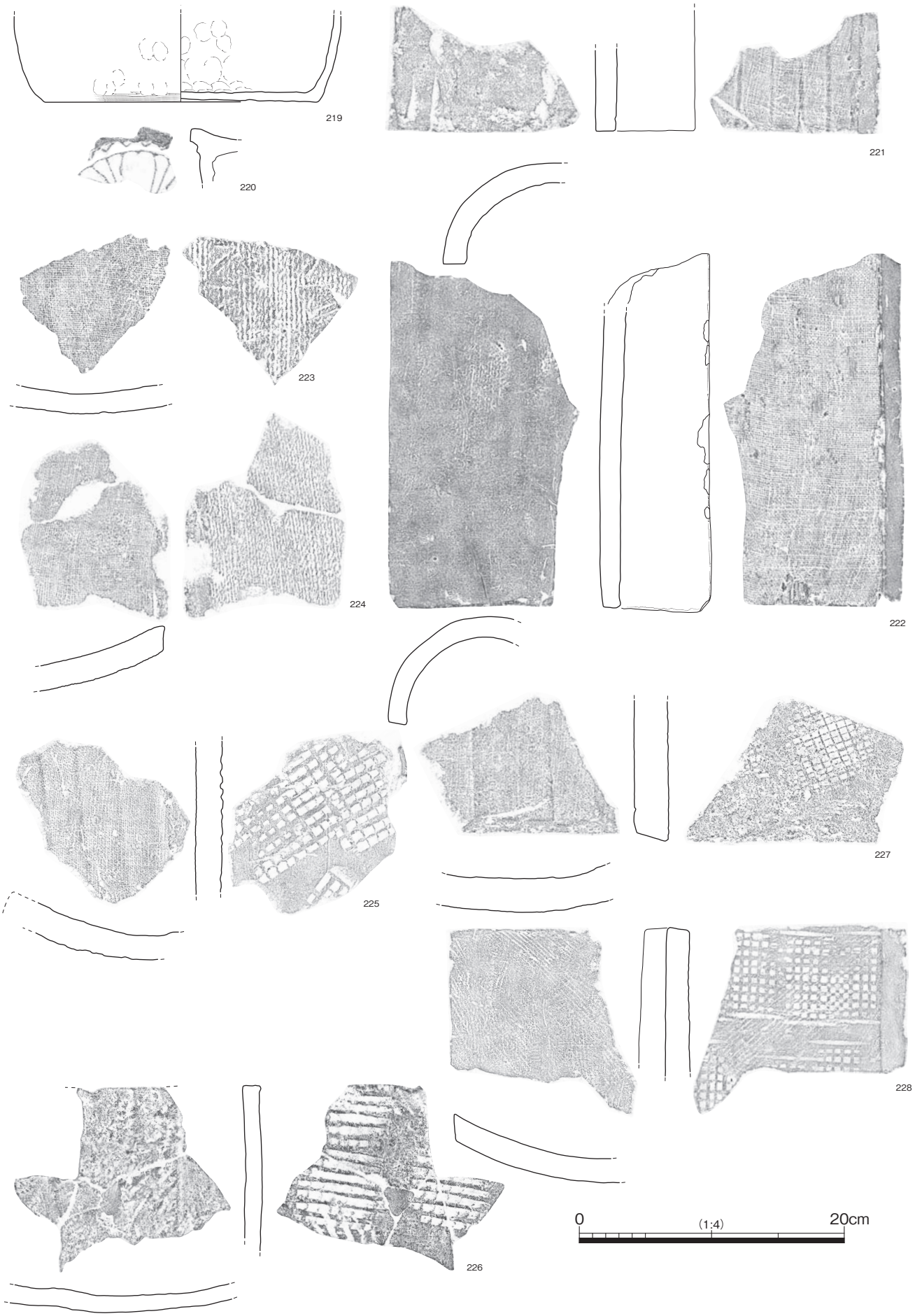


図 190　33-1Tr・SK1009 上位出土遺物 1

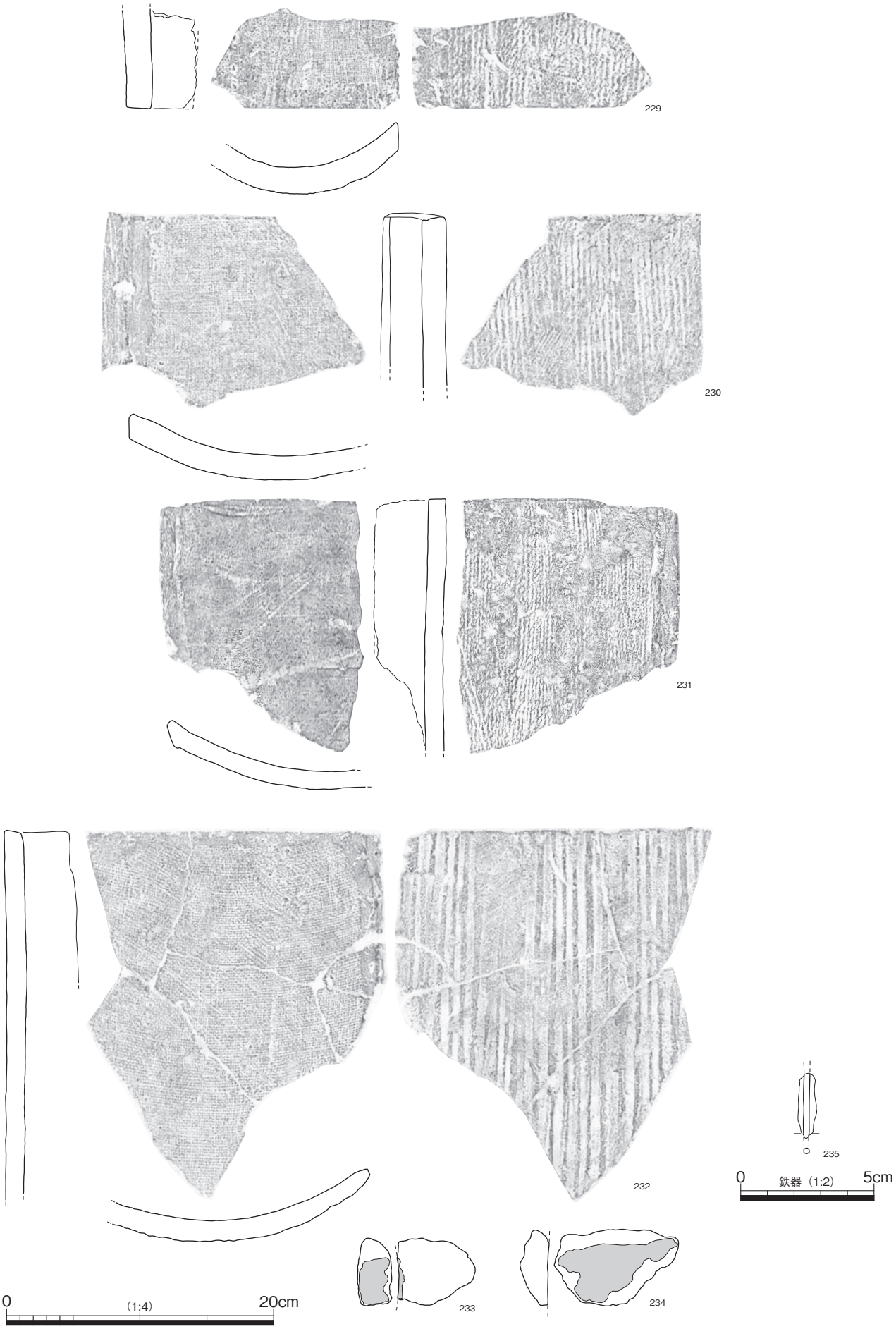


図 191　33-1Tr・SK1009 上位出土遺物 2

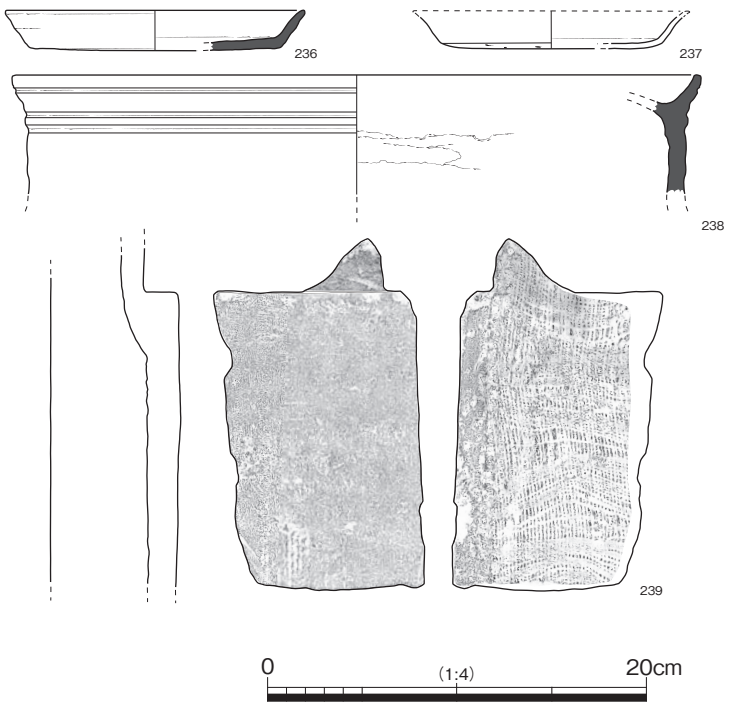


図 192　33-1Tr・SK1009 下位出土遺物

られる灰色細砂であり、流水状態を示す機能時堆積層と考えられる。下・上層とも、大振りの偽礫を含む埋め戻し土であり、上層には焼土粒・炭化物が含まれている。底面は東西で 0.15 m程の比高差があり、西へ流下方向を推測できる。弧状を描く平面形や底面の機能時堆積層からみて、微高地１上面の排水目的で掘開された溝として考えられる。

263 ～ 270 は本溝からの出土遺物である。271 は凹面に布目をもち丸瓦片にみえるが、全ての側縁に焼成前の面取りが確認できる。機能不明の特殊瓦としておきたい。

土師質土器（263 ～ 267）の年代観から、本遺構は 11 世紀前葉から中葉に機能したものと推定しておきたい。

SD1001.1002.1003（図 196.197）

SD1001.1002 は、33-1 トレンチ西部を２条並行で南北に延びる溝である。検出位置や埋没土の特徴からみて、トレンチ南東隅の SD1003、32 次調査 32-1Tr・SD1005.1006 は同一溝と考えられる。SD1001.1002 ともに、基本層序２層に類似する灰色系シルトで同時に埋没している。SD1001 の調査区南壁付近では、土器・瓦片とともに動物遺存体がややまとまって出土している。

285 ～ 292 は SD1001 からの出土遺物である。286 は近江産の緑釉陶器皿である。土師質土器鍋(288)、同把手付鍋(287)は、16 世紀後半から 17 世紀前半まで下る資料と考えられる。290・291 は須恵器蓋の内面を利用した転用硯。軒丸瓦(292）は、開法寺でみられる KH109 型式と考えられる。

これらの出土遺物からみて、本溝群は中世後半から近世初頭まで機能したものと考えておきたい。

その他の遺構（図 195）

図 195 には、33-1 トレンチにおいて詳細な報告に至らなかった遺構からの出土遺物をまとめて掲載している。本調査区の遺構形成時期を示す資料として提示しておきたい。

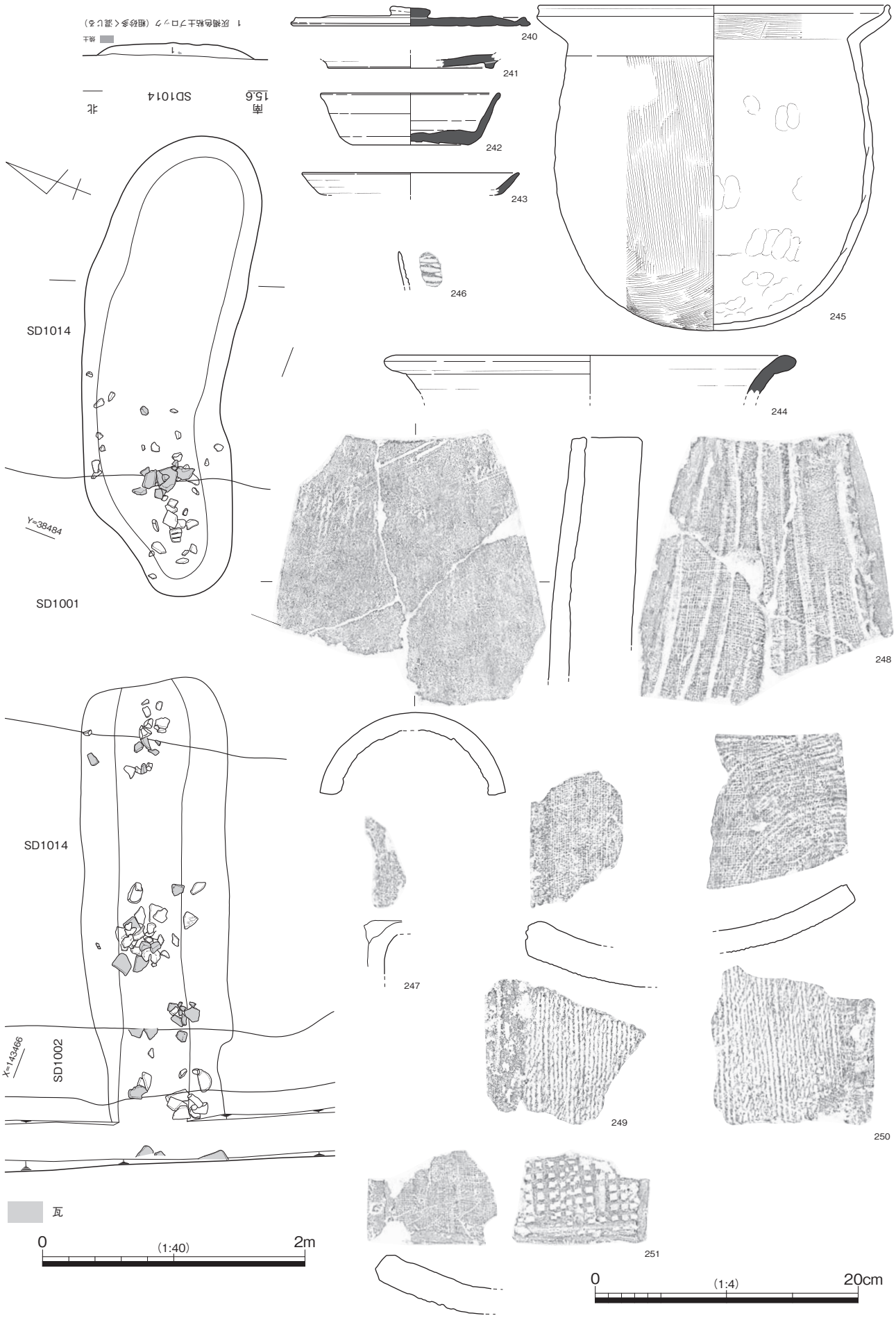


図 193　33-1Tr・SD1014 平断面図及び出土遺物

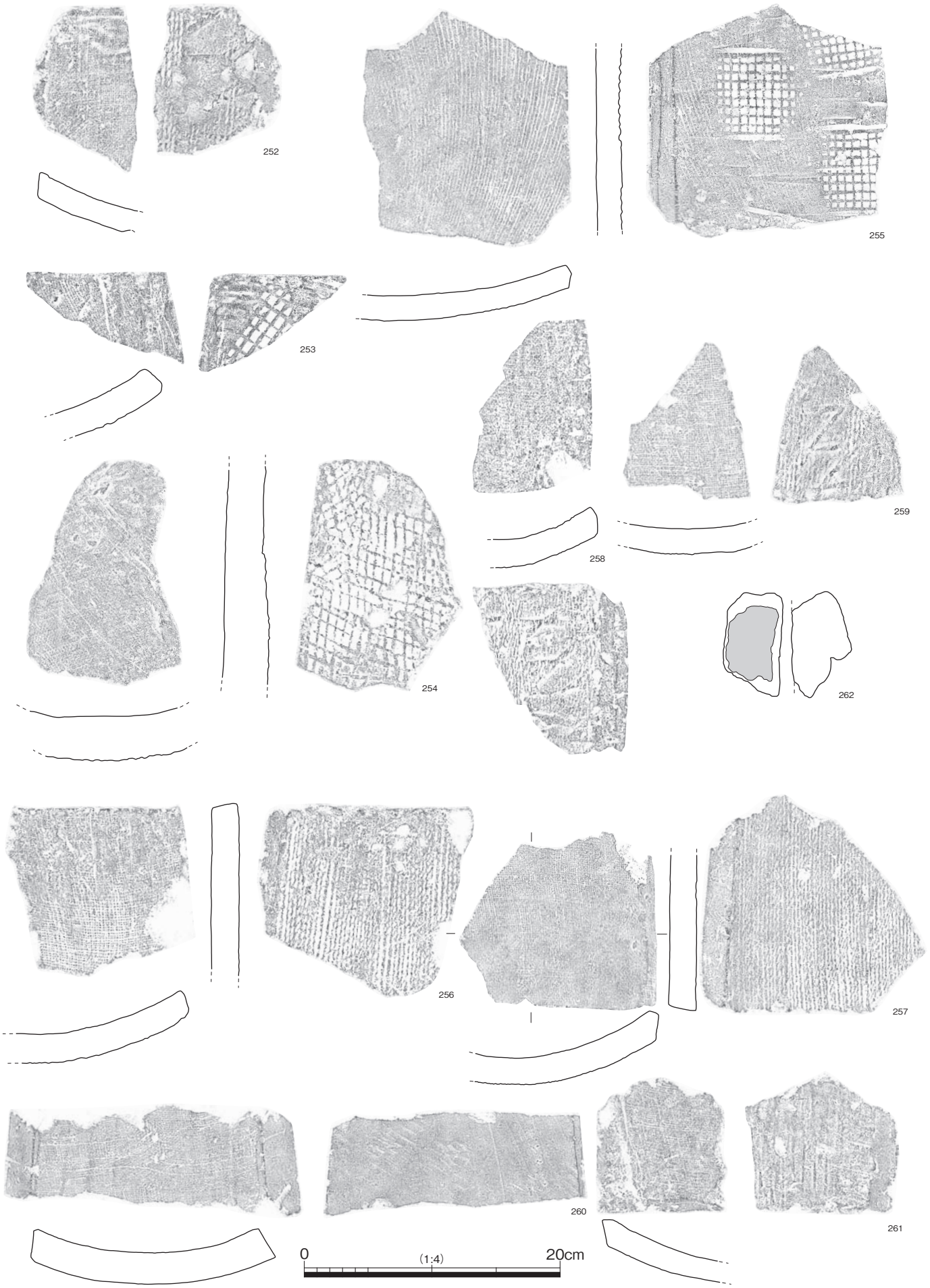


図 194　33-1Tr・SD1014 出土遺物

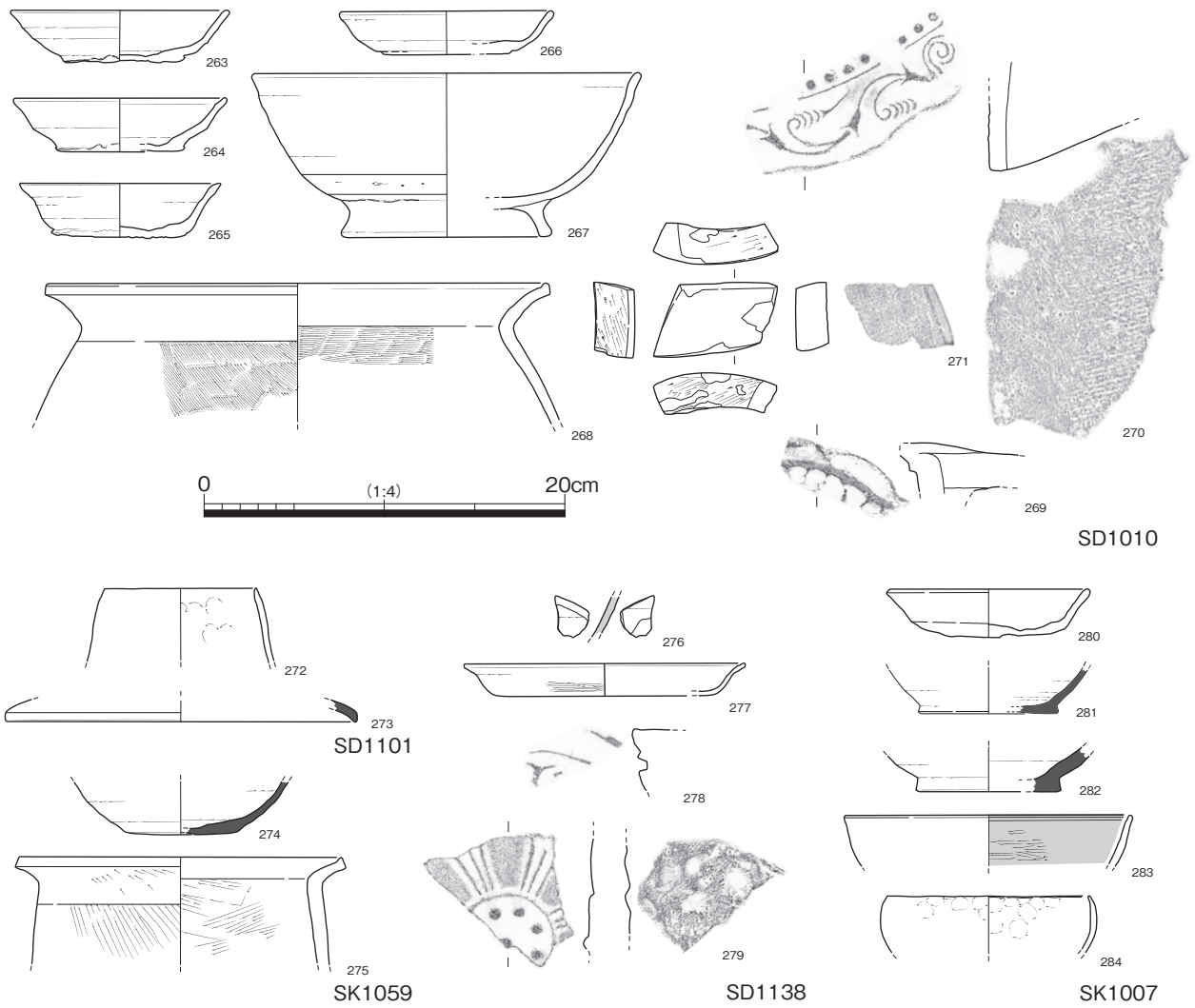


図 195　33-1Tr・SD1010 ほか出土遺物

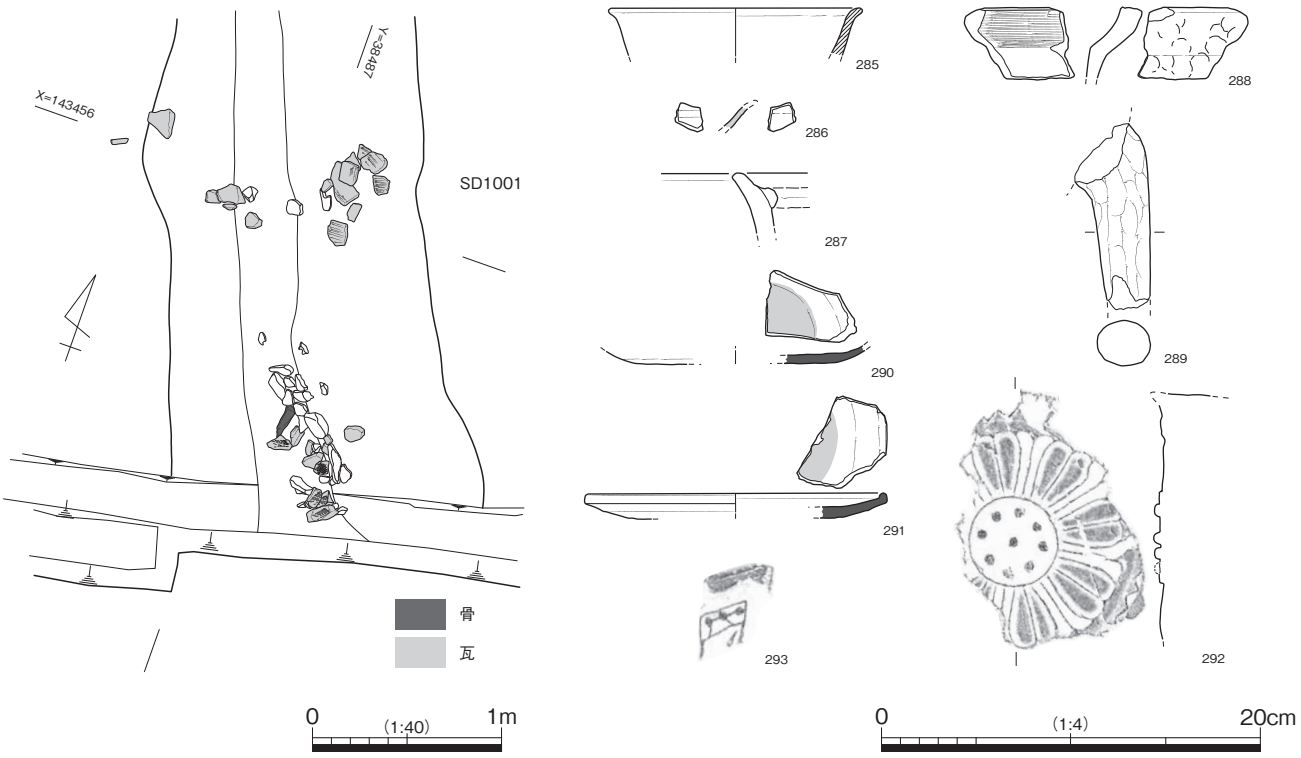


図 197　33-1Tr・SD1001 南端遺物出土状況及び出土遺物

図 196　33-1Tr・SD1001.1002 ほか平断面図

（4）33-2 トレンチ

①概要及び層序（図 199）

33-2 トレンチは、31 次調査 31-4 トレンチで確認された大型建物 SB2022.2023.2024 の全容把握を目的とする調査区である。調査前は水田として利用されていた。

１層は現在の耕作土の基盤層となる灰黄色粘土であり、近代以降の耕作土と考えられる。２層の灰白色シルトは、分級が悪いため旧耕作土と考えられるもので、トレンチ東部では１層により大きく削平を受ける。２層下位は箇所により、層位が異なる。トレンチ東半部では、焼土・炭化物をやや多く含む黒褐色シルト～粘土（北壁 26 層、東・南壁３層）、同西半部は灰色シルトの偽礫や小礫をやや多く含む淡灰色･灰白色シルト（北壁３層･西壁 10 層、南壁４層）が分布する。トレンチ東半部の黒褐色シルト～粘土は、周辺における既往調査で確認されている 12 世紀から 13 世紀の削平・整地層と考えられる。

トレンチ西半部の淡灰色・灰白色シルトは、31 次調査 31-2 トレンチで検出されていたが、本次調査により、本トレンチ西部を中心とした範囲のみ分布することが明らかになった。本トレンチ西部では、本層を介して遺構検出面が分かれる。７世紀後葉から９世紀の年代が想定される SB2022.2023、SD2187.2115.2107 は本層下面より掘り込まれている。９世紀末から 10 世紀前葉の SD2106 は本層により埋没、10 世紀中葉以降の SB2024、SD2100.2104 は本層上面から穿たれている。層相から判断して、自然堆積層と捉えられないことや、これらの遺構の掘り込み面の様相からみて、本層は整地土として敷設されたと考える。本層の形成時期を示す遺物は少ないが、SD2106 の出土遺物からみて、10 世紀前葉と考えられる。

黒褐色シルト～粘土及び淡灰色・灰白色シルトの下位は、古代以降の基盤層である黄褐色シルト～粘土がみられるが、トレンチ南西部ではグライ化した淡灰色シルトとなる。トレンチ南西部で行った深掘り調査では、グライ化した淡灰色シルトの下位にラミナが認められる灰色粗砂が確認された。この灰色粗砂は、微高地１形成層の一つであり、既往の調査において縄文晩期土器の包含が確認されている粗砂層に対比されるものと考えられる。

各層からの出土遺物（図 200）

294 ～ 314 は、２層及び遺構面からの出土遺物である。302 は須恵器甕の胴部片の内面を利用した転用硯であり、破断面に磨滅痕が及んでいる。転用硯（303）は、須恵器杯の内面に強い磨滅痕が確認できる。304 は風字硯であり、下面及び側縁にはケズリ、内面に磨滅痕が確認できる。軒丸瓦（305）は周縁の圏線のみであり型式不明となる。312 は鹿角装の刀子、鉄器片（314）は鉸具の可能性がある。308 ～ 311 は白色凝灰岩片である。

②検出遺構・出土遺物

SB2022（図 201 ～ 203）

33-2 トレンチ中央で検出した東西棟の片廂建物である。建物敷地の区画の機能が想定できる東西溝 SD4001、2148.2167 に挟まれた約 189 ㎡（13.5 × 14 m）の範囲に、本建物を先駆けとして SB2023、SB2024 の順で建て替えが行われる。

身舎は梁行２間（6.2 m）、桁行５間（12.5 m）の柱配置に対して、南平側一面に廂をもつ。建物主軸は座標北より 112°西偏し、身舎の床面積は 77.5 ㎡、廂を含めると 109.18 ㎡を測る。柱掘方の平面規模は、身舎で長軸 1.1 ～ 1.6 m、短軸１～ 1.4 mの隅丸長方形を基本とし、検出面からの深さは 0.55 ～ 0.9 mを測る。柱掘方の埋土は、細かな単位で入念に込められた黒色粘土・黄褐色粘土の偽礫を中心とするが、単位によっては粘性が強い真砂土が多く含まれている。この真砂土は、微高地を形成する基盤層に含まれず、遺跡周辺の花崗岩地質の山麓部で採取が可能と考える。

多くの柱穴が SB2023 と重複するため十分な断ち割り調査が行えていないが、北西隅柱 SP2123、北側柱 SP4002、4003 では径 0.25 ～ 0.3 mの柱痕跡が検出された。また、柱掘方の途中で柱痕跡が途切れるなど埋土に不整合が確認されるとともに、掘方壁面にも階段状の食い違いが認められたため、最低１回の改修が行われたことを想定しておきたい。本建物のうち、当初の段階を SB2022 a、その後を SB2022 b と呼称する。なお、各柱穴の土層注記においても a. b の記号を付すことで、諸段階を区分する。

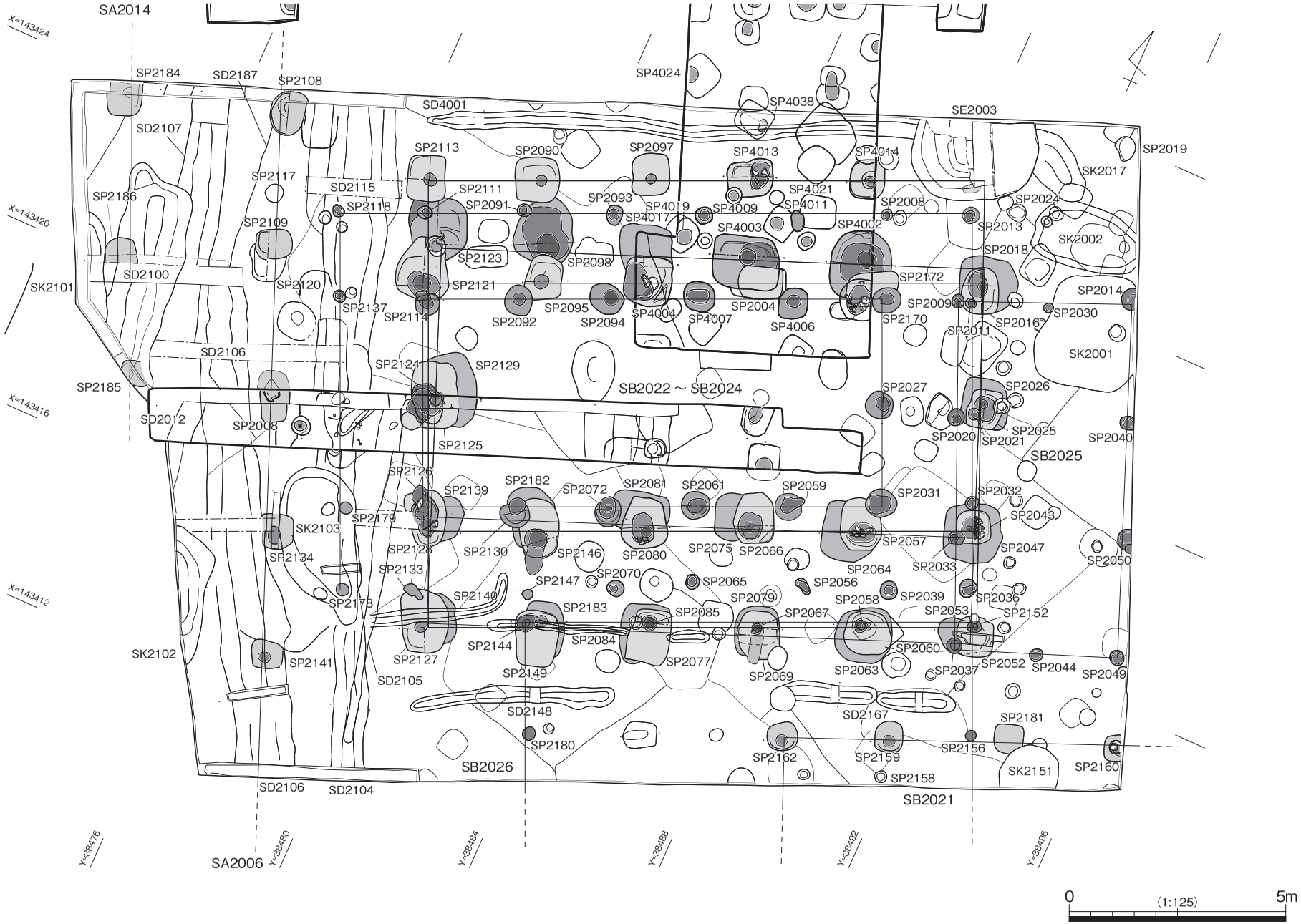


図 198　33-2Tr 遺構平面図

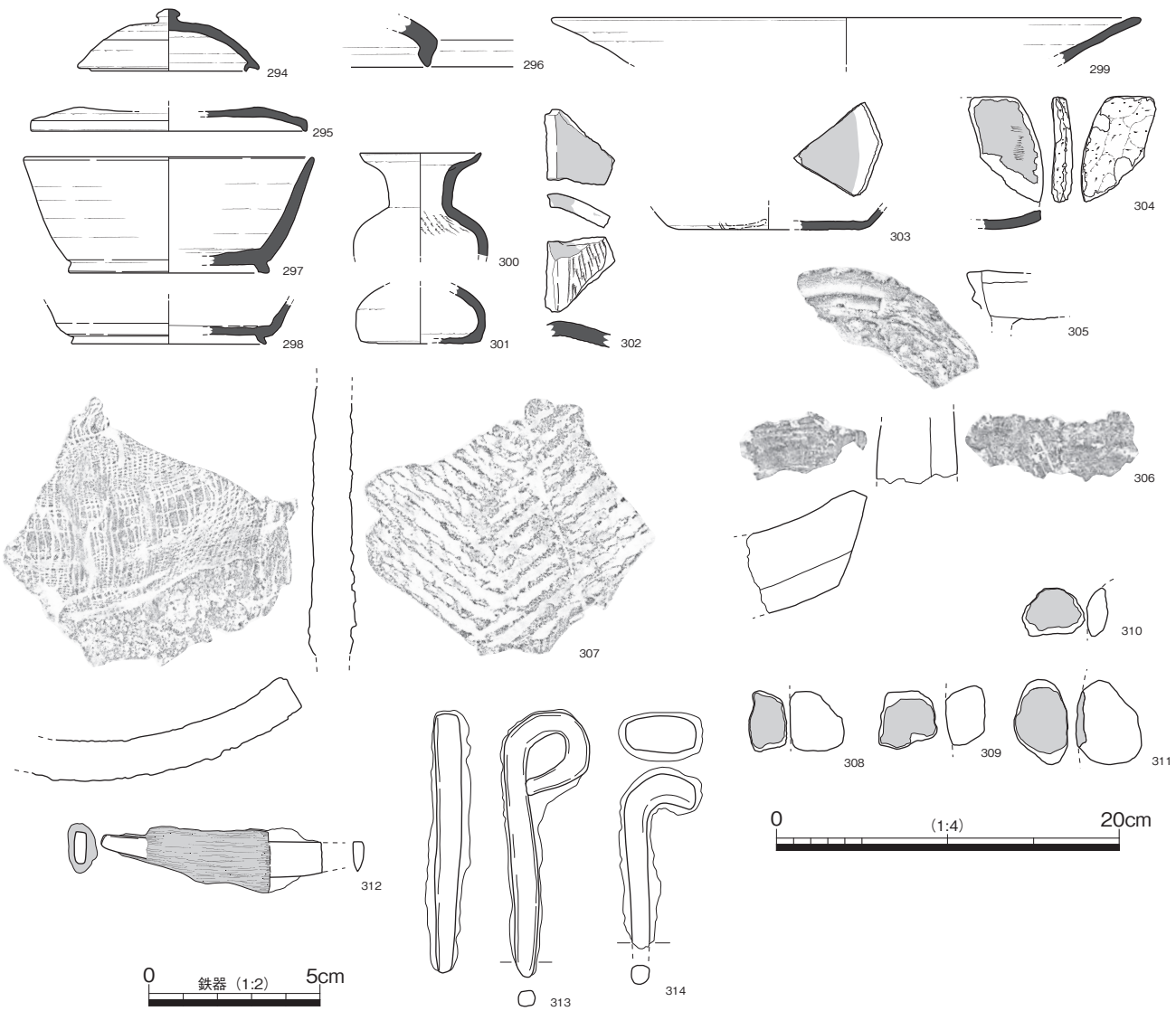


図 200　33-2Tr2 層遺構面出土遺物

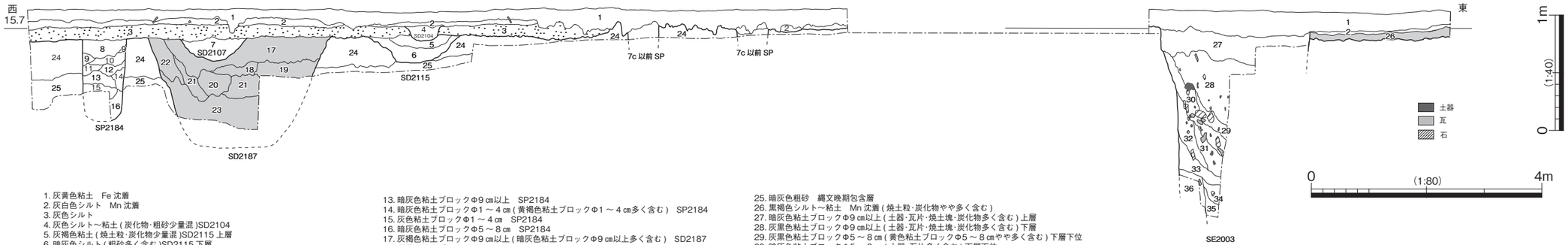
柱痕跡が確認されているのは SB2022 a 段階の SP4002. 4003、SB2022b 段階の SP2123 のみであり、SB2022 b 段階は、SP2098 において抜き取り痕跡が確認されている。これらや柱掘方から推定した柱間は、梁行 3. 1 m、桁行 2. 4 mと推定できる。

南の平側の廂の柱掘方は、後出する SB2023 の廂柱穴と重複が激しく、正確な平面規模をうかがい知ることが困難であるが、比較的広範囲に掘方を検出することに成功した SP2084、2063 を主たる材料として、長軸約 1. 2 ～ 1. 4 m、短軸約 1 mの規模を推定することができ、これらは身舎の柱穴と比較して遜色ないものである。廂の出は 2. 4 mと推定され身舎梁行の 3 mに比べてやや短いが、柱掘方規模からみて、附廂ではなく身舎と一体的な屋根構造を推定しておきたい。

315 ～ 321、9-90 ～ 92 は出土遺物である。これらの資料は、前述した建て替えの事実を把握する以前に取り上げたものがほとんどであり、段階別に提示することができないことをお断りしておく。

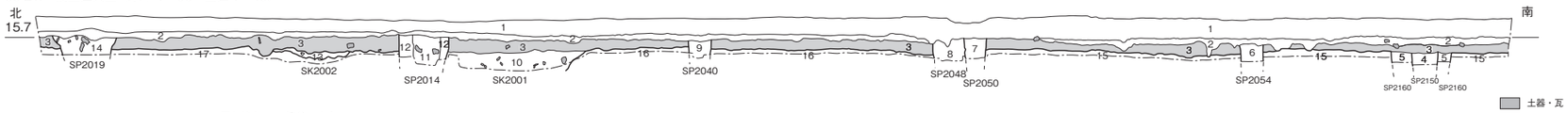
315. 316 は SP2098 の裏込土から須恵器甕、317. 318 は丸瓦片である。須恵器甕（315）は、7 世紀末から 8 世紀前半の時間幅で捉えられる。須恵器鉢（319）は SP2123 の裏込土から出土した。土師器杯（320）は建て替え後の SP4002 b 裏込土から出土したもので、7 世紀後葉の畿内系土師器である。土師器甕（321）は SP4017 の上層から出土した。9-90 ～ 9-92 は、SP4003 の裏込土から出土したもので、31 次調査時資料を再掲する。土師質土器杯（9-90）は 12 世紀に下る資料であり、他の資料と比較して明らかに後出するものであることから、混入品と考える。須恵器杯（9-91. 92）は、7 世紀末から 8 世紀前葉の資料とみられる。

33-2Tr　調査区北壁（水平１：80　垂直１：40）



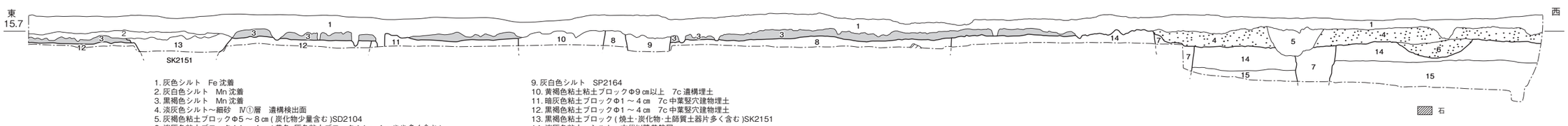
1. 灰黄色粘土　Fe 沈着
2. 灰白色シルト　Mn 沈着
3. 灰色シルト
4. 灰色シルト～粘土 (炭化物･粗砂少量混)SD2104
5. 灰褐色粘土 (焼土粒･炭化物少量混)SD2115 上層
6. 暗灰色シルト (粗砂多く含む)SD2115 下層
7. 灰褐色粘土 (粗砂多く混)SD2107
8. 暗灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む)SP2184
9. 灰色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝　SP2184
10. 暗灰色粘土ブロックΦ9 ㎝以上　SP2184
11. 灰色粘土ブロックΦ9 ㎝以上　SP2184
12. 灰褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝　SP2184
13. 暗灰色粘土ブロックΦ9 ㎝以上　SP2184
14. 暗灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む)　SP2184
15. 灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　SP2184
16. 暗灰色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝　SP2184
17. 灰褐色粘土ブロックΦ9 ㎝以上 (暗灰色粘土ブロックΦ9 ㎝以上多く含む)　SD2187
18. 灰黒色粘土ブロックΦ9 ㎝以上　SD2187
19. 青灰色粘土ブロックΦ9 ㎝以上 (褐色粘土ブロックΦ9 ㎝以上多く含む)　SD2187
20. 青灰色粘土ブロックΦ9 ㎝以上 (黄褐色粘土ブロックΦ9 ㎝以上多く含む)　SD2187
21. 灰色粘土ブロックΦ9 ㎝以上　SD2187
22. 灰褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝ (暗灰色粘土ブロックΦ9 ㎝以上多く含む)　SD2187
23. 暗青灰色粘土ブロックΦ9 ㎝以上 (黄褐色粘土ブロックΦ9 ㎝以上多く含む)　SD2187
24. 黄褐色シルト～粘土　上方細粒化　古代以降基盤層
25. 暗灰色粗砂　縄文晩期包含層
26. 黒褐色シルト～粘土　Mn 沈着 (焼土粒･炭化物やや多く含む)
27. 暗灰色粘土ブロックΦ9 ㎝以上 (土器･瓦片･焼土塊･炭化物多く含む) 上層
28. 灰黒色粘土ブロックΦ9 ㎝以上 (土器･瓦片･焼土塊･炭化物多く含む) 下層
29. 灰黒色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝ (黄色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝やや多く含む) 下層下位
30. 暗灰色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝ (土器･瓦片多く含む) 下層下位
31. 暗灰色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝ (黄褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝多く含む) 下層下位
32. 灰黒色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝ (黄色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝多く含む) 西層部下層
33. 暗灰色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝　西層部下層下位
34. 青灰色粘土 (木片･炭化物少量含む)　最下層上位
35. 灰色粘土 (木片･炭化物少量含む)　最下層下位
36. 黄褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝　井戸枠裏込土

33-2Tr　調査区東壁（水平１：60　垂直１：40）



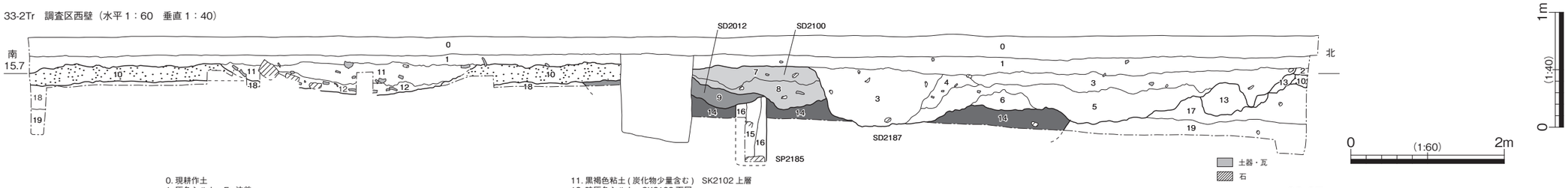
1. 灰色粘土　Fe 沈着　床土
2. 灰白色シルト
3. 黒褐色粘土～シルト (炭化物･焼土粒やや多く含む)　遺構検出面１　遺物取り上げ３層
4. 黒褐色粘土 (焼土･炭化物多く含む)SP2150
5. 灰黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む)SP2160
6. 黒褐色粘土 (炭化物多く含む)SP2054
7. 黒褐色粘土 (炭化物多く含む)SP2050
8. 暗褐色粘土 (炭化物多く含む)SP2048
9. 黒褐色粘土 (炭化物多く含む)SP2040
10. 灰褐色粘土ブロック (灰色粘土ブロックΦ9 ㎝以上焼土･炭化物･瓦片多く含む)SK2001
11. 黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ SP2014 柱痕
12. 灰褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ SP2014
13. 灰褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝ (炭化物多く含む)SK2002
14. 黒褐色粘土 (炭化物多く含む)SP2019
15. 黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　7c 中葉竪穴建物埋土
16. 灰黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　7c 中葉竪穴建物埋土
17. 黄褐色粘土　古代遺構基盤層　上方細粒化

33-2Tr　調査区南壁（水平１：60　垂直１：40）



1. 灰色シルト　Fe 沈着
2. 灰白色シルト　Mn 沈着
3. 黒褐色シルト　Mn 沈着
4. 淡灰色シルト～細砂　Ⅳ①層　遺構検出面
5. 灰褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝ (炭化物少量含む)SD2104
6. 淡灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄色･灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝やや多く含む)
7. 暗灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　7c 柱穴
8. 黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝少量含む)
9. 灰白色シルト　SP2164
10. 黄褐色粘土粘土ブロックΦ9 ㎝以上　7c 遺構埋土
11. 暗灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　7c 中葉竪穴建物埋土
12. 黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　7c 中葉竪穴建物埋土
13. 黒褐色粘土ブロック (焼土･炭化物･土師質土器片多く含む)SK2151
14. 淡灰色粘土～シルト　古代以降基盤層
15. 灰色粗砂　縄文晩期包含層

33-2Tr　調査区西壁（水平１：60　垂直１：40）



0. 現耕作土
1. 灰色シルト　Fe 沈着
2. 灰白色シルト　Mn 沈着
3. 灰白色シルト (灰色･灰褐色粘土ブロックやや多く含む)SK2101 上層
4. 灰褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝ (灰色シルトブロックΦ1 ～ 4 ㎝やや多く含む)SK2101 下層
5. 暗灰色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝ (灰色シルトブロックΦ1 ～ 4 ㎝やや多く含む)SK2101 下層
6. 灰色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝　SK2101 最下層
7. 灰色シルト (粗砂･中粒砂やや多く含む)SD2100 上層
8. 茶褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (炭化物･青灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝やや多く含む)SD2100 下層
9. 灰褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　SD2107
10. 淡灰色シルト
11. 黒褐色粘土 (炭化物少量含む)　SK2102 上層
12. 暗灰色シルト　SK2102 下層
13. 暗褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝ (黄褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝多く含む) 遺構？番号無し
14. 暗灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (青灰色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝Φ5 ～ 8 ㎝多く含む)SD2187
15. 淡灰色粘土　SP2185 柱痕
16. 灰褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝ (黄色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝灰褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む) SP2185
17. 黄褐色粘土　古代基盤層
18. 淡灰色シルト
19. 灰色粗砂　縄文晩期包含層

33-2Tr

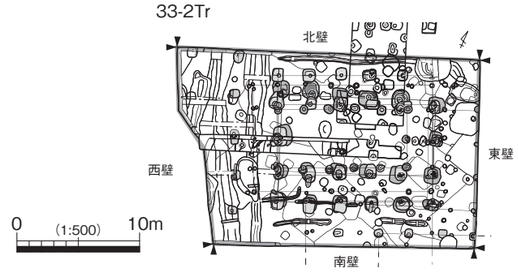


図 199　33-2Tr 各壁断面

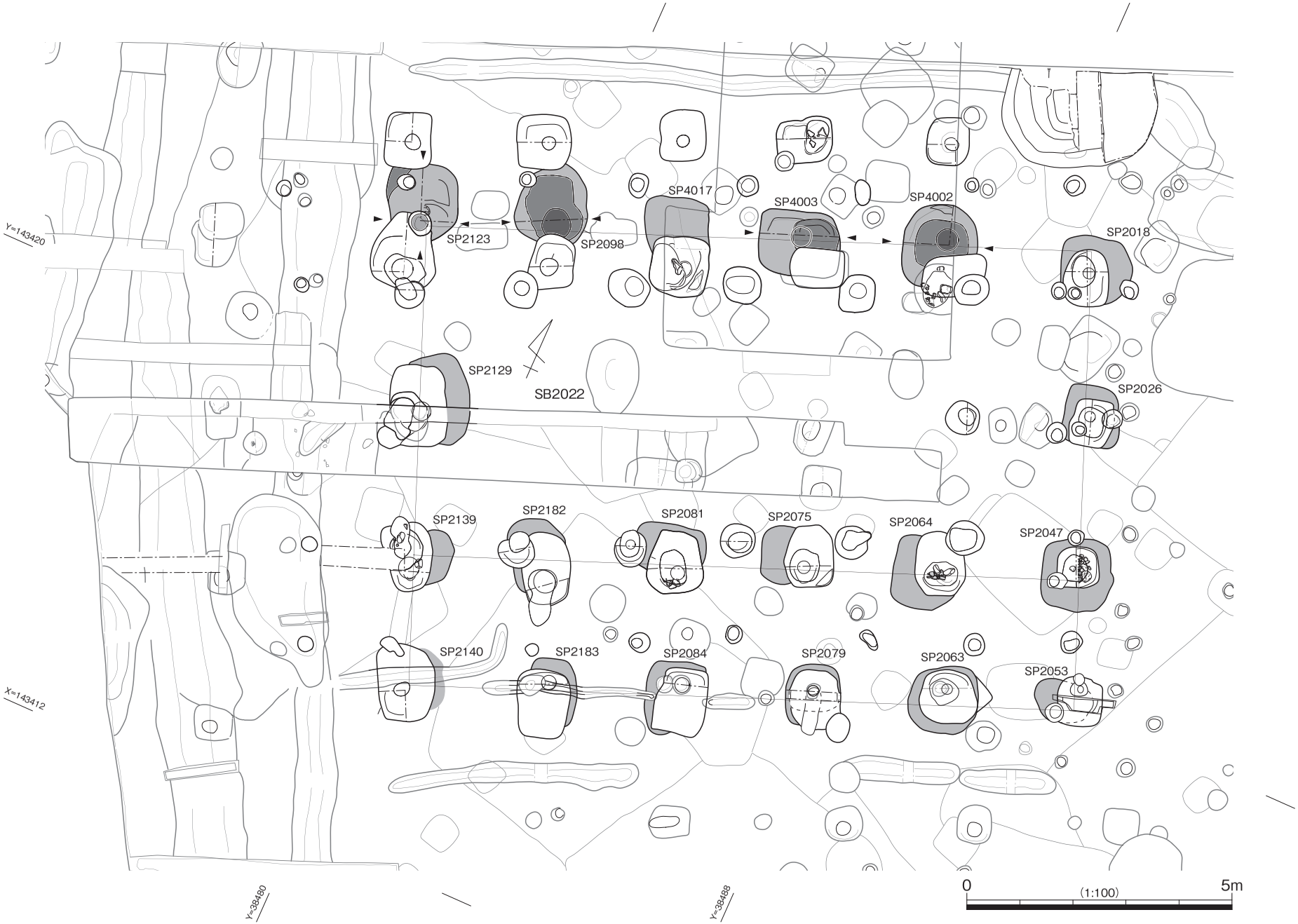
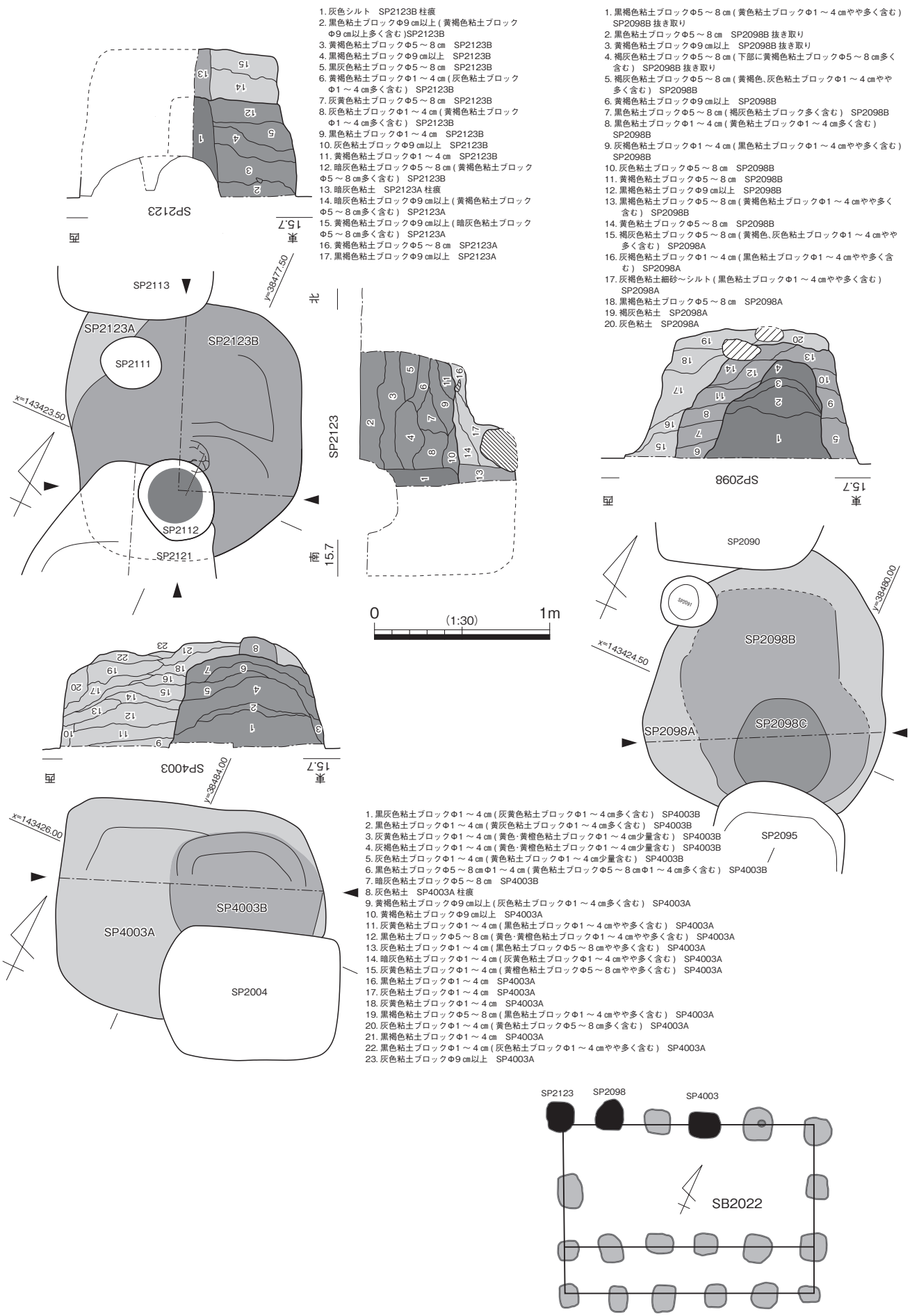


図 201　33-2Tr・SB2022 平面図



1. 灰色シルト　SP2123B 柱痕
2. 黒色粘土ブロックΦ9㎝以上 (黄褐色粘土ブロックΦ9㎝以上多く含む)SP2123B
3. 黄褐色粘土ブロックΦ5～8㎝　SP2123B
4. 黒褐色粘土ブロックΦ9㎝以上　SP2123B
5. 黒灰色粘土ブロックΦ5～8㎝　SP2123B
6. 黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝ (灰色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)　SP2123B
7. 灰黄色粘土ブロックΦ5～8㎝　SP2123B
8. 灰色粘土ブロックΦ1～4㎝ (黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)　SP2123B
9. 黒色粘土ブロックΦ1～4㎝　SP2123B
10. 灰色粘土ブロックΦ9㎝以上　SP2123B
11. 黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝　SP2123B
12. 暗灰色粘土ブロックΦ5～8㎝ (黄褐色粘土ブロックΦ5～8㎝多く含む)　SP2123B
13. 暗灰色粘土　SP2123A 柱痕
14. 暗灰色粘土ブロックΦ9㎝以上 (黄褐色粘土ブロックΦ5～8㎝多く含む)　SP2123A
15. 黄褐色粘土ブロックΦ9㎝以上 (暗灰色粘土ブロックΦ5～8㎝多く含む)　SP2123A
16. 黄褐色粘土ブロックΦ5～8㎝　SP2123A
17. 黒褐色粘土ブロックΦ9㎝以上　SP2123A

1. 黒褐色粘土ブロックΦ5～8㎝ (黄色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む)　SP2098B 抜き取り
2. 黒色粘土ブロックΦ5～8㎝　SP2098B 抜き取り
3. 黄褐色粘土ブロックΦ9㎝以上　SP2098B 抜き取り
4. 褐灰色粘土ブロックΦ5～8㎝ (下部に黄褐色粘土ブロックΦ5～8㎝多く含む)　SP2098B 抜き取り
5. 褐灰色粘土ブロックΦ5～8㎝ (黄褐色、灰色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む)　SP2098B
6. 黄褐色粘土ブロックΦ9㎝以上　SP2098B
7. 黒色粘土ブロックΦ5～8㎝ (褐灰色粘土ブロック多く含む)　SP2098B
8. 黒色粘土ブロックΦ1～4㎝ (黄色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)　SP2098B
9. 灰褐色粘土ブロックΦ1～4㎝ (黒色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む)　SP2098B
10. 灰色粘土ブロックΦ5～8㎝　SP2098B
11. 黄褐色粘土ブロックΦ5～8㎝　SP2098B
12. 黒褐色粘土ブロックΦ9㎝以上　SP2098B
13. 黒褐色粘土ブロックΦ5～8㎝ (黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む)　SP2098B
14. 黄色粘土ブロックΦ5～8㎝　SP2098B
15. 褐灰色粘土ブロックΦ5～8㎝ (黄褐色、灰色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む)　SP2098A
16. 灰褐色粘土ブロックΦ1～4㎝ (黒色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む)　SP2098A
17. 灰褐色粘土細砂～シルト (黒色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む)　SP2098A
18. 黒褐色粘土ブロックΦ5～8㎝　SP2098A
19. 褐灰色粘土　SP2098A
20. 灰色粘土　SP2098A

1. 黒灰色粘土ブロックΦ1～4㎝ (灰黄色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)　SP4003B
2. 黒色粘土ブロックΦ1～4㎝ (黄灰色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)　SP4003B
3. 灰黄色粘土ブロックΦ1～4㎝ (黄色･黄橙色粘土ブロックΦ1～4㎝少量含む)　SP4003B
4. 灰褐色粘土ブロックΦ1～4㎝ (黄色･黄橙色粘土ブロックΦ1～4㎝少量含む)　SP4003B
5. 灰色粘土ブロックΦ1～4㎝ (黄色粘土ブロックΦ1～4㎝少量含む)　SP4003B
6. 黒色粘土ブロックΦ5～8㎝Φ1～4㎝ (黄色粘土ブロックΦ5～8㎝Φ1～4㎝多く含む)　SP4003B
7. 暗灰色粘土ブロックΦ5～8㎝　SP4003B
8. 灰色粘土　SP4003A 柱痕
9. 黄褐色粘土ブロックΦ9㎝以上 (灰色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)　SP4003A
10. 黄褐色粘土ブロックΦ9㎝以上　SP4003A
11. 灰黄色粘土ブロックΦ1～4㎝ (黒色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む)　SP4003A
12. 黒色粘土ブロックΦ5～8㎝ (黄色･黄橙色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む)　SP4003A
13. 灰色粘土ブロックΦ1～4㎝ (黒色粘土ブロックΦ5～8㎝やや多く含む)　SP4003A
14. 暗灰色粘土ブロックΦ1～4㎝ (灰黄色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む)　SP4003A
15. 灰黄色粘土ブロックΦ1～4㎝ (黄橙色粘土ブロックΦ5～8㎝やや多く含む)　SP4003A
16. 黒色粘土ブロックΦ1～4㎝　SP4003A
17. 灰色粘土ブロックΦ1～4㎝　SP4003A
18. 灰黄色粘土ブロックΦ1～4㎝　SP4003A
19. 黒褐色粘土ブロックΦ5～8㎝ (黒色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む)　SP4003A
20. 灰色粘土ブロックΦ1～4㎝ (黄色粘土ブロックΦ5～8㎝多く含む)　SP4003A
21. 黒褐色粘土ブロックΦ1～4㎝　SP4003A
22. 黒色粘土ブロックΦ1～4㎝ (灰色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む)　SP4003A
23. 灰色粘土ブロックΦ9㎝以上　SP4003A

図 202　33-2Tr・SB2022 断面図

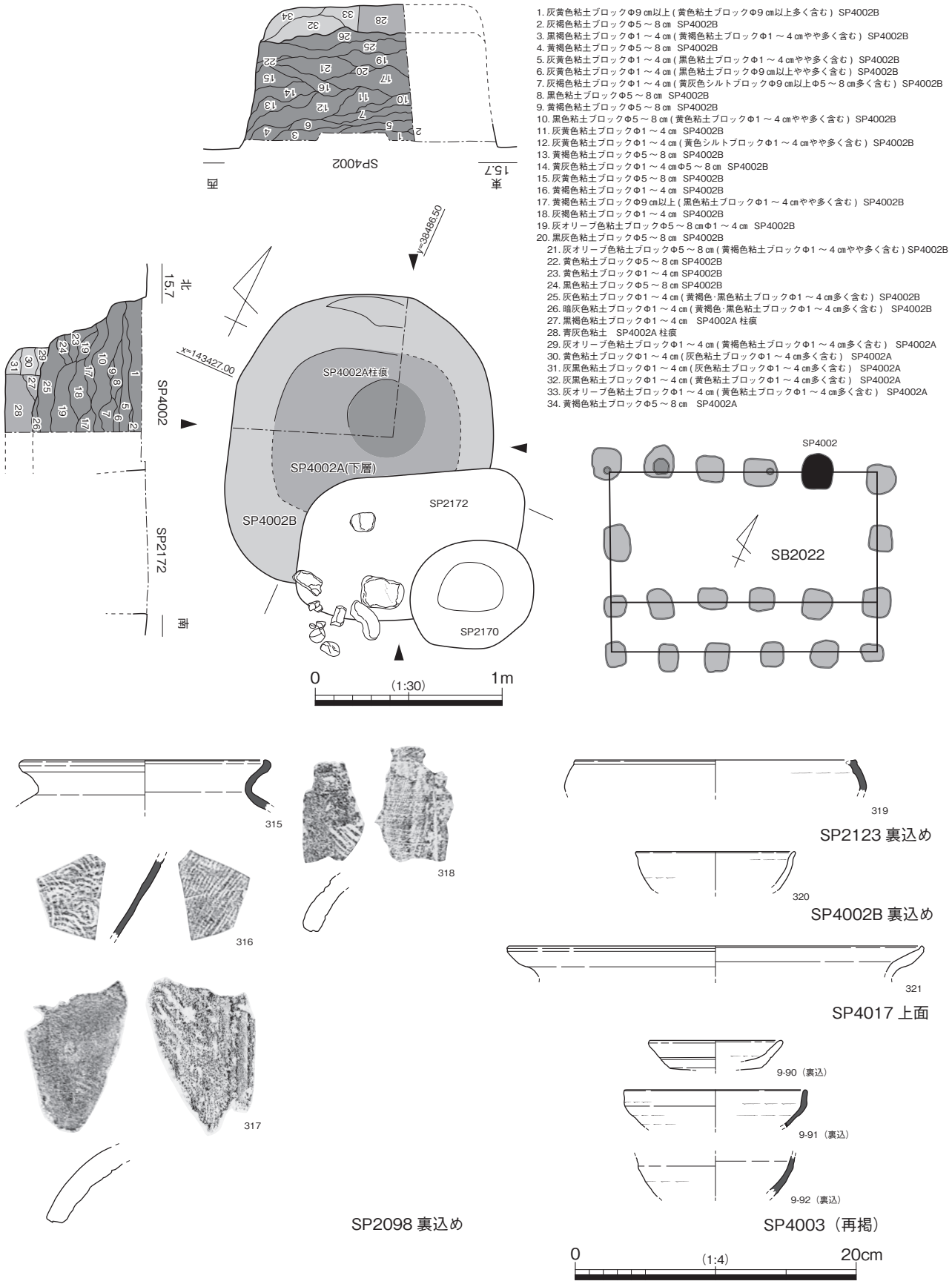


図 203　33-2Tr・SB2022 断面図及び出土遺物

これらの出土資料の年代観は、一部の混入品を除いて８世紀前半を下る資料はみられない。また、建物方位が条里地割に合致する点を考慮すると、８世紀初頭を上限とすると考えられる。

柱掘方以外の資料は、本建物敷地を区画する機能が想定される SD4001 において、埋め戻しに伴い比較的残存率の高い８世紀前葉の須恵器群（359 ～ 363）が一括廃棄されていることから、これらを上限年代として評価しておきたい。

一方で、改修後の段階（SB2022 ｂ）及び廃絶年代を示す資料の提示は困難であるが、重複関係からみて、空白期を挟まず SB2023 へ建て替えが行われたことは指摘できる。現状では、建物の耐用年数、改修が行われたことを踏まえて、９世紀前葉頃に SB2023 へ建替えられたと推定しておくことにとどめておきたい。なお、本建物の時期比定は、周辺の建物配置との関係で理解すべきである。

SB2023（図 204 ～ 210）

SB2022 の後身として建て替えられたと考えられる東西棟の二面廂建物である。身舎は梁行２間（5.8 ｍ）、桁行５間（12.9 ｍ）の柱配置に対して、南北平側の２面に廂をもつ。身舎床面積は 74.82 ㎡、廂を含めた場合には 136.74 ㎡を測り、建物主軸が座標北より 114゜西偏する。時期的に先行する SB2022 とかなりの箇所で重複するが、建物主軸が SB2022 と比べてやや西へ振れることにより、北側の入側柱の柱穴は外れた位置に設けられている。東梁行の柱穴掘方は SB2022 の位置とほぼ一致するため、東梁行を建て替えに当たっての基準とした可能性が高い。

身舎の柱掘方の平面規模は、長軸 0.8 ～ 1.2 ｍ、短軸 0.8 ～ 1.1 ｍの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは 0.5 ～ 0.7 ｍである。東側梁行の SP2043 の底面には、砂岩礫・瓦片を敷き詰めて入念な基礎固めを行っている。廂の柱掘方の平面規模は長軸 0.9 ～ 1.2 ｍ、短軸 0.9 ～ 1.1 ｍの隅丸長方形ないし隅丸方形を呈し、検出面からの深さ 0.4 ～ 0.5 ｍを測る。廂柱掘方は、身舎に比べてやや小規模となっている。柱掘方の埋土は、細かな単位で込められているが、西側梁行の SP2125 では白色粘土の偽礫が多くみられた。

断ち割り調査を多くの柱穴で行った結果、径 0.2 ～ 0.25 ｍの柱痕跡が確認され、身舎と廂での規模的な差違はみられない。これらの柱痕跡を基にした柱間は、身舎梁行で 2.9 ｍ、同桁行で 2.7 ｍとなる。入側柱から廂の出は、南の平側で 2.1 ｍ、北の平側は 2.4 ｍとやや長い。

多くの柱穴で柱抜取痕跡が確認されているが、中には SP2057、2069、2125、2121、4004 を典型として、通常の抜き取りとは異なる入念な埋め戻しを行っているものがみられる。SP2069 では、当初の柱抜取内に柱痕跡が確認されていることを踏まえると、最低１回の改修が行われたと考えられる。この状況を踏まえて、本建物のうち、当初の段階を SB2023 ａ、改修後を SB2023 ｂとして区別しておきたい。なお、各柱穴の土層注記においても ａ． ｂの記号を付すことで、諸段階を区分する。

322 ～ 341、9-93 ～ 9-110（再掲）は本建物からの出土遺物である。須恵器杯（322）は北東隅入側柱 SP2016 の抜き取りから出土し、９世紀末から 10 世紀初頭の年代が想定される。須恵器転用硯（323）は蓋に内面を利用するもので、SP2016 上層の出土。須恵器高杯脚（332）は、SP4004 の上層から出土しもので、７世紀代に遡る。平瓦（324）は SP2057 ｂに伴うものである。土師器杯（325）は SP2095 の柱痕跡から出土したもので、７世紀中葉と考えられる。326 は土師器甕の口縁で、SP2095 の裏込土からの資料。須恵器甕（327）、丸瓦（328）は SP2113 裏込土から出土した。須恵器杯（329）は SP2146 抜取、土師器甕（330）は同裏込土から出土した。土師器杯（331）は７世紀代の資料とみられ、SP2090 の裏込から出土している。軒丸瓦（333）は瓦当部の小片で SP2128 の裏込土から出土し、型式不明とせざるを得ない。土師器杯（334）は SP2128 の裏込土から出土したもので、７世紀代の資料と考えられる。

平瓦（335 ～ 337）、丸瓦（338）は SP2090 の上層から出土した。丸瓦（339）、不明鉄器片（340）は SP2121 ｂ、不明鉄器片（341）は SP2121 ａ裏込土から出土した。

9-93 ～ 9-98 は、SP4004 ｂに伴う資料である。土師質土器杯（9-93. 9-94）は小片ながら９世紀末から 10 世紀初頭の資料と考えられる。須恵器杯（9-95 ～ 9-97）は９世紀後葉から 10 世紀初頭の時間幅の中で捉えられる。

9-99 は SP4004 ａに伴う土師器高杯脚であり、６世紀後葉から７世紀前葉の古相を示す資料である。9-100 ～ 9-104 は SP4013 の上層から出土しているが、帰属する層位を確定できない。9-105 は SP4014 の柱痕跡、9-106. 9-107 は同柱穴の上層から出土した。須恵器杯（9-108）土師質土器杯（9-109）は SP4018 上面の石材群に伴って出土した資料

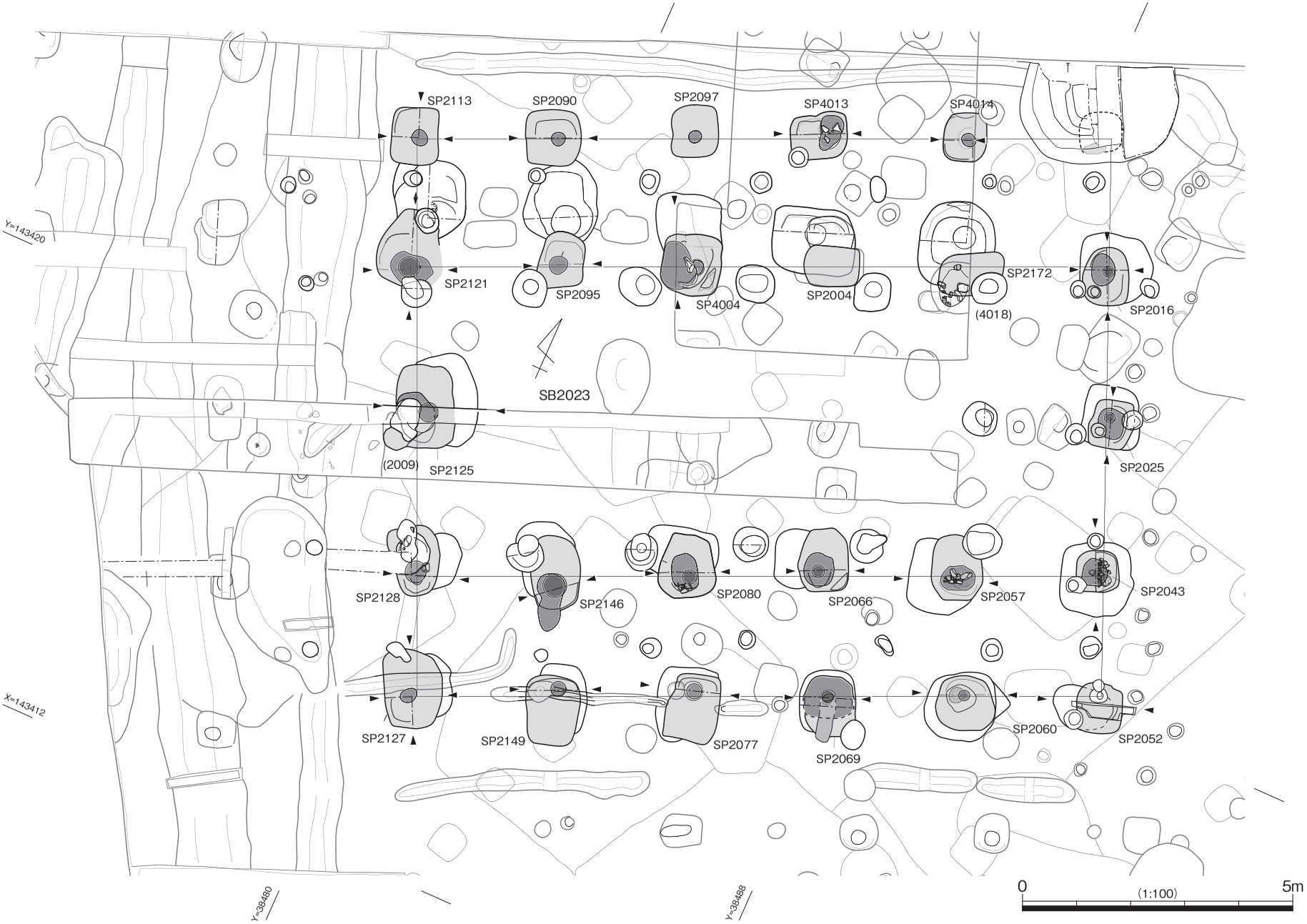


図 204　33-2Tr・SB2023 平面図

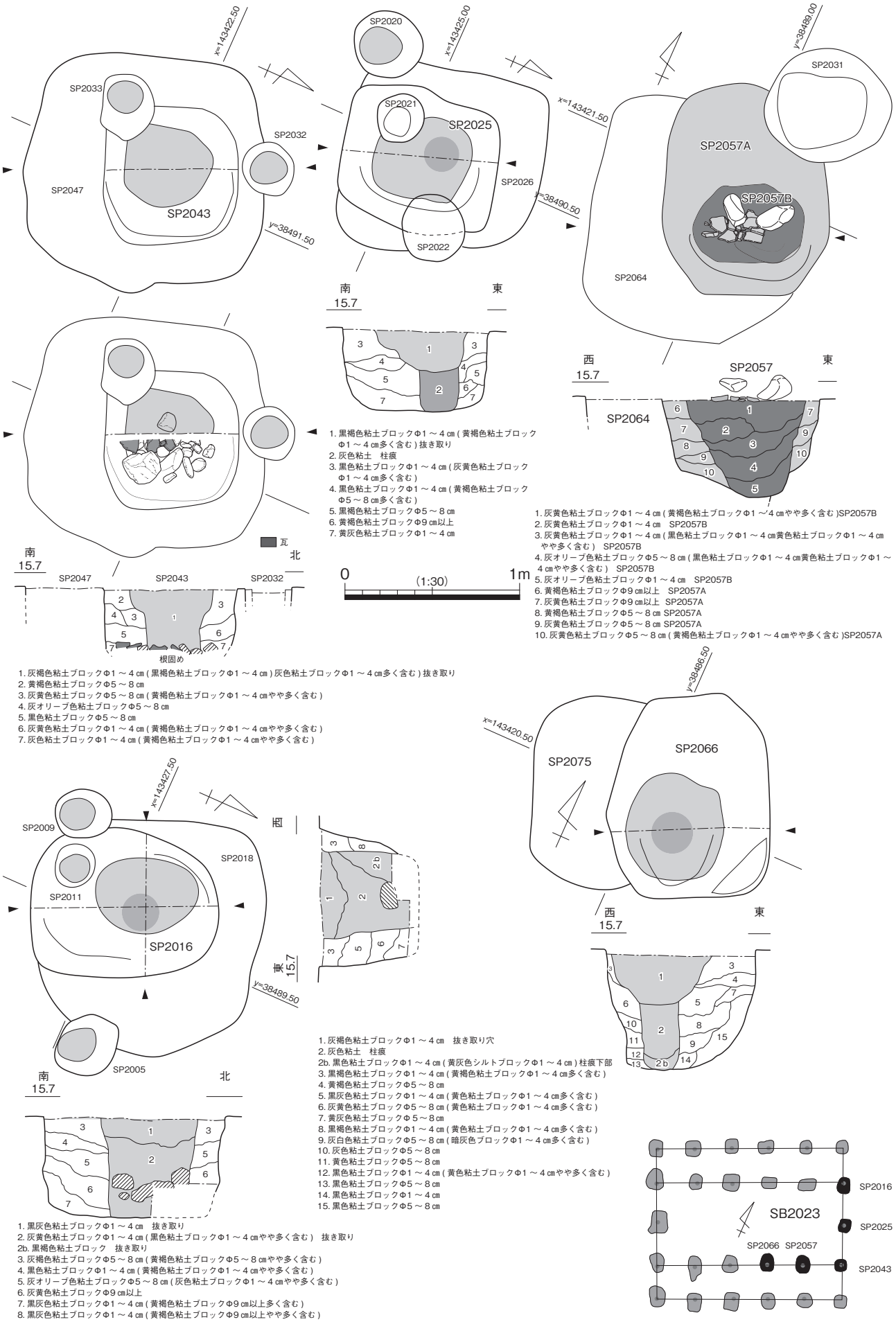
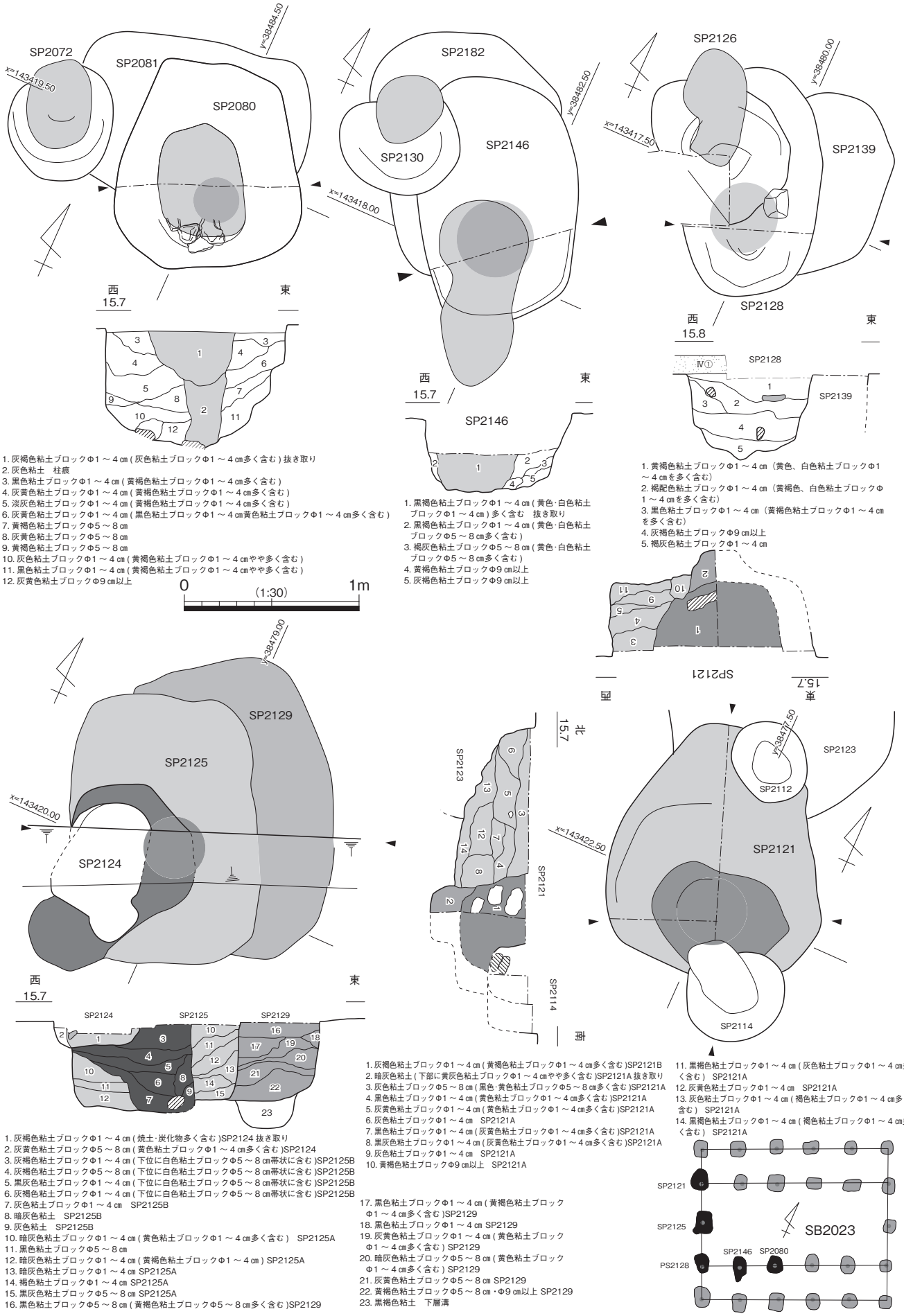


図 205　33-2Tr・SB2023 断面図 1



1. 灰褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む) 抜き取り
2. 灰色粘土　柱痕
3. 黒色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む)
4. 灰黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む)
5. 淡灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む)
6. 灰黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黒色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む)
7. 黄褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝
8. 灰黄色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝
9. 黄褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝
10. 灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝やや多く含む)
11. 黒色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝やや多く含む)
12. 灰黄色粘土ブロックΦ9 ㎝以上

1. 黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄色･白色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝) 多く含む　抜き取り
2. 黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄色･白色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝多く含む)
3. 褐灰色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝ (黄色･白色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝多く含む)
4. 黄褐色粘土ブロックΦ9 ㎝以上
5. 灰褐色粘土ブロックΦ9 ㎝以上

1. 黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（黄色、白色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝を多く含む）
2. 褐配色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（黄褐色、白色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝を多く含む）
3. 黒色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝（黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝を多く含む）
4. 灰褐色粘土ブロックΦ9 ㎝以上
5. 褐灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝

1. 灰褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (焼土･炭化物多く含む)SP2124 抜き取り
2. 灰黄色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝ (黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む)SP2124
3. 灰褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (下位に白色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝帯状に含む)SP2125B
4. 灰褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝ (下位に白色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝帯状に含む)SP2125B
5. 黒灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (下位に白色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝帯状に含む)SP2125B
6. 灰褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (下位に白色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝帯状に含む)SP2125B
7. 灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　SP2125B
8. 暗灰色粘土　SP2125B
9. 灰色粘土　SP2125B
10. 暗灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む)　SP2125A
11. 黒色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝
12. 暗灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝) SP2125A
13. 暗灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ SP2125A
14. 褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ SP2125A
15. 黒灰色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝ SP2125A
16. 黒色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝ (黄褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝多く含む)SP2129

1. 灰褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む)SP2121B
2. 暗灰色粘土 (下部に黄灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝やや多く含む)SP2121A 抜き取り
3. 灰色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝ (黒色･黄色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝多く含む)SP2121A
4. 黒色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む)SP2121A
5. 灰黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む)SP2121A
6. 灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　SP2121A
7. 黒色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (灰黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む)SP2121A
8. 黒灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (灰黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む)SP2121A
9. 灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　SP2121A
10. 黄褐色粘土ブロックΦ9 ㎝以上　SP2121A

11. 黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む)　SP2121A
12. 灰黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝　SP2121A
13. 灰色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む)　SP2121A
14. 黒褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む)　SP2121A

17. 黒色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄褐色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む)SP2129
18. 黒色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ SP2129
19. 灰黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝ (黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む) SP2129
20. 暗灰色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝ (黄色粘土ブロックΦ1 ～ 4 ㎝多く含む) SP2129
21. 灰黄色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝ SP2129
22. 黄褐色粘土ブロックΦ5 ～ 8 ㎝・Φ9 ㎝以上 SP2129
23. 黒褐色粘土　下層溝

図 206　33-2Tr・SB2023 断面図 2

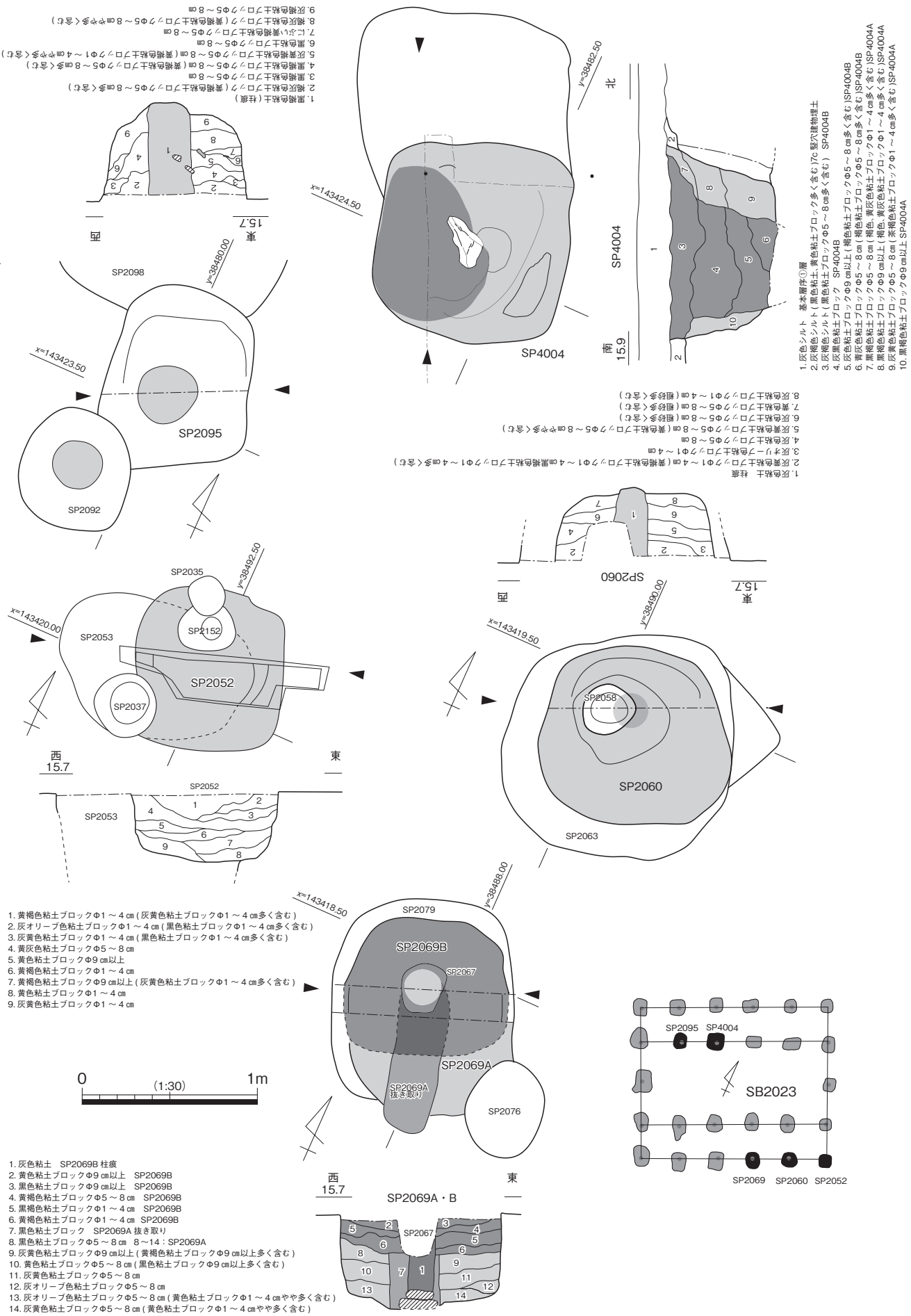
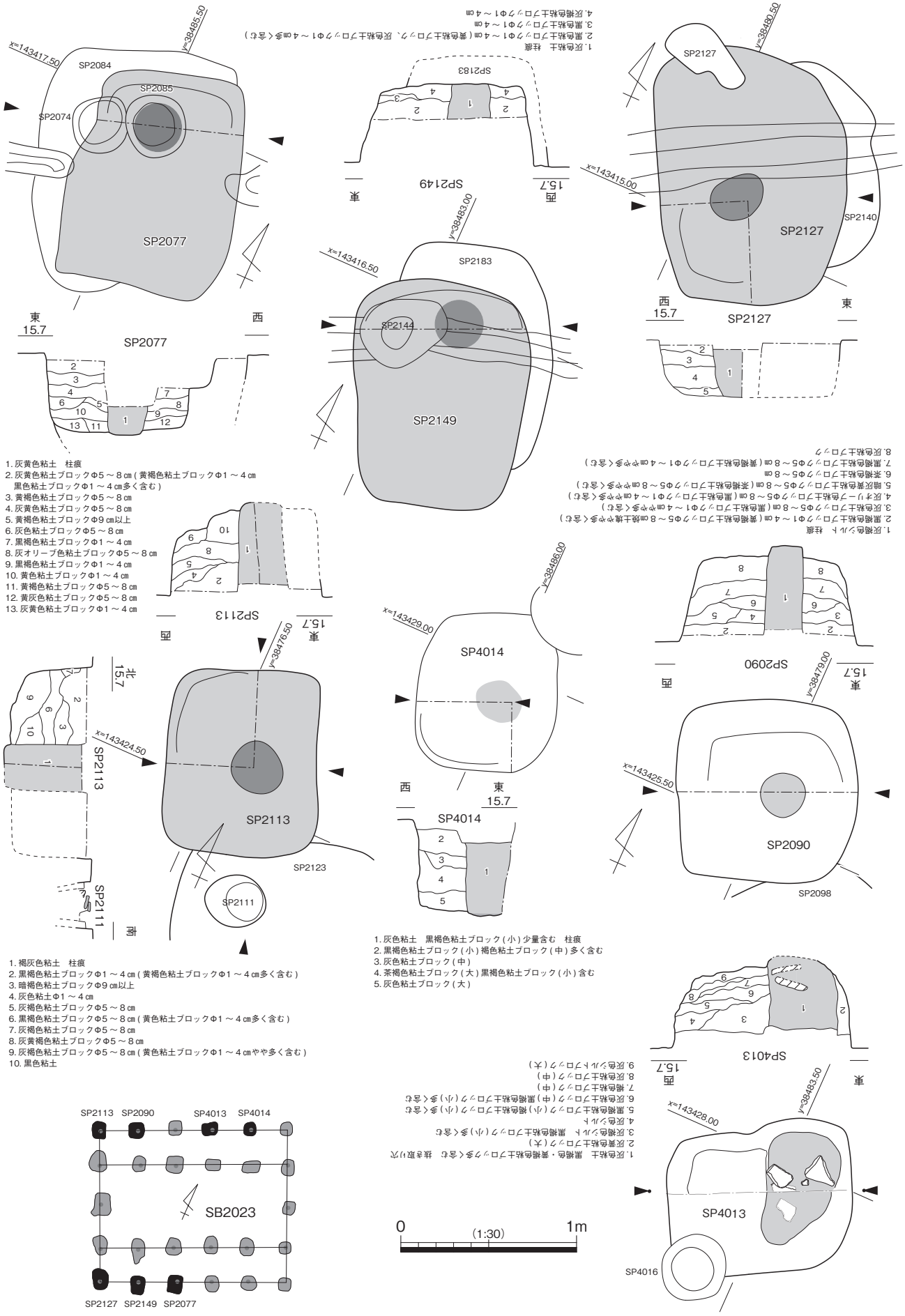


図 207　33-2Tr・SB2023 断面図 3



1. 灰色粘土　柱痕
2. 黒褐色粘土ブロック(小)褐色粘土ブロック(中)多く含む
3. 灰色粘土ブロック(中)
4. 茶褐色粘土ブロック(大)黒褐色粘土ブロック(小)含む
5. 灰色粘土ブロック(大)

1. 灰色粘土　黒褐色・黄褐色粘土ブロック多く含む　抜き取り穴
2. 灰黄色粘土ブロック(大)
3. 灰色シルト　黒褐色粘土ブロック(小)多く含む
4. 灰色シルト
5. 黒褐色粘土ブロック(小)褐色粘土ブロック(小)多く含む
6. 灰色粘土ブロック(中)黒褐色粘土ブロック(小)多く含む
7. 褐色粘土ブロック(中)
8. 灰色粘土ブロック(中)
9. 灰色シルトブロック(大)

1. 灰色粘土　柱痕
2. 黒褐色粘土ブロックΦ1～4㎝(黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)
3. 暗褐色粘土ブロックΦ9㎝以上
4. 灰色粘土Φ1～4㎝
5. 灰褐色粘土ブロックΦ5～8㎝
6. 黒褐色粘土ブロックΦ5～8㎝(黄色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)
7. 灰褐色粘土ブロックΦ5～8㎝
8. 灰黄褐色粘土ブロックΦ5～8㎝
9. 灰褐色粘土ブロックΦ5～8㎝(黄色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む)
10. 黒色粘土

1. 灰黄色粘土　柱痕
2. 灰黄色粘土ブロックΦ5～8㎝(黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝
黒色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)
3. 黄褐色粘土ブロックΦ5～8㎝
4. 灰黄色粘土ブロックΦ5～8㎝
5. 黄褐色粘土ブロックΦ9㎝以上
6. 灰色粘土ブロックΦ5～8㎝
7. 黒褐色粘土ブロックΦ1～4㎝
8. 灰オリーブ色粘土ブロックΦ5～8㎝
9. 黒褐色粘土ブロックΦ1～4㎝
10. 黄色粘土ブロックΦ1～4㎝
11. 黄褐色粘土ブロックΦ5～8㎝
12. 黄灰色粘土ブロックΦ5～8㎝
13. 灰黄色粘土ブロックΦ1～4㎝

1. 灰色シルト　柱痕
2. 黒褐色粘土ブロックΦ1～4㎝(黄褐色粘土ブロックΦ5～8㎝混土塊やや多く含む)
3. 灰色粘土ブロックΦ5～8㎝(黒色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む)
4. 灰オリーブ色粘土ブロックΦ5～8㎝(黒色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む)
5. 暗灰黄色粘土ブロックΦ5～8㎝(茶褐色粘土ブロックΦ5～8㎝やや多く含む)
6. 茶褐色粘土ブロックΦ5～8㎝
7. 黒褐色粘土ブロックΦ1～4㎝(黄褐色粘土ブロックΦ5～8㎝含む)
8. 灰色粘土ブロック

1. 灰色粘土　柱痕
2. 黒褐色粘土ブロックΦ1～4㎝(黄褐色粘土ブロックΦ5～8㎝多く含む)
3. 灰色粘土ブロックΦ5～8㎝(黒色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)
4. 灰色粘土ブロックΦ1～4㎝(黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)

図 208　33-2Tr・SB2023 断面図 4

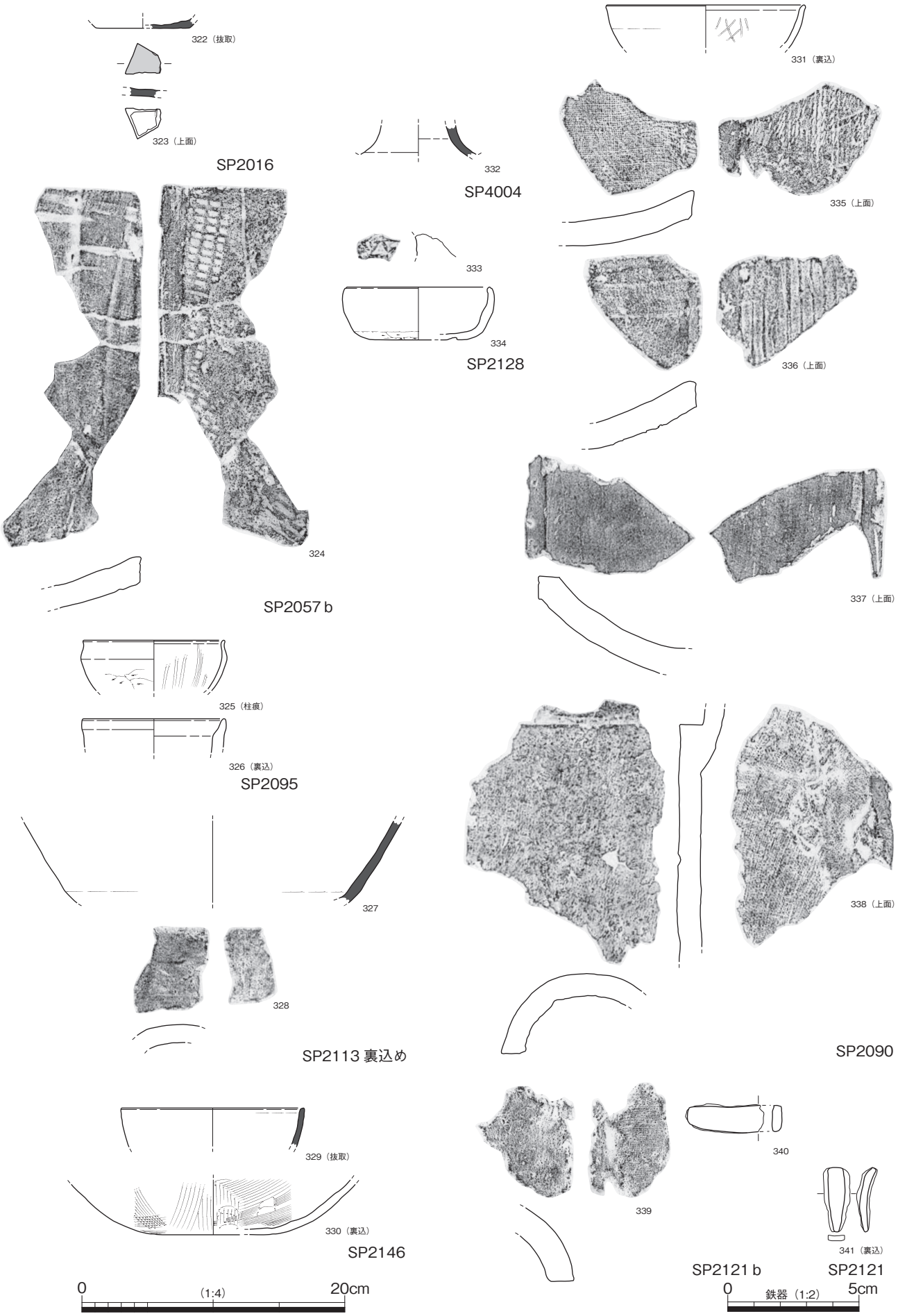


図 209　33-2Tr・SB2023 出土遺物 1

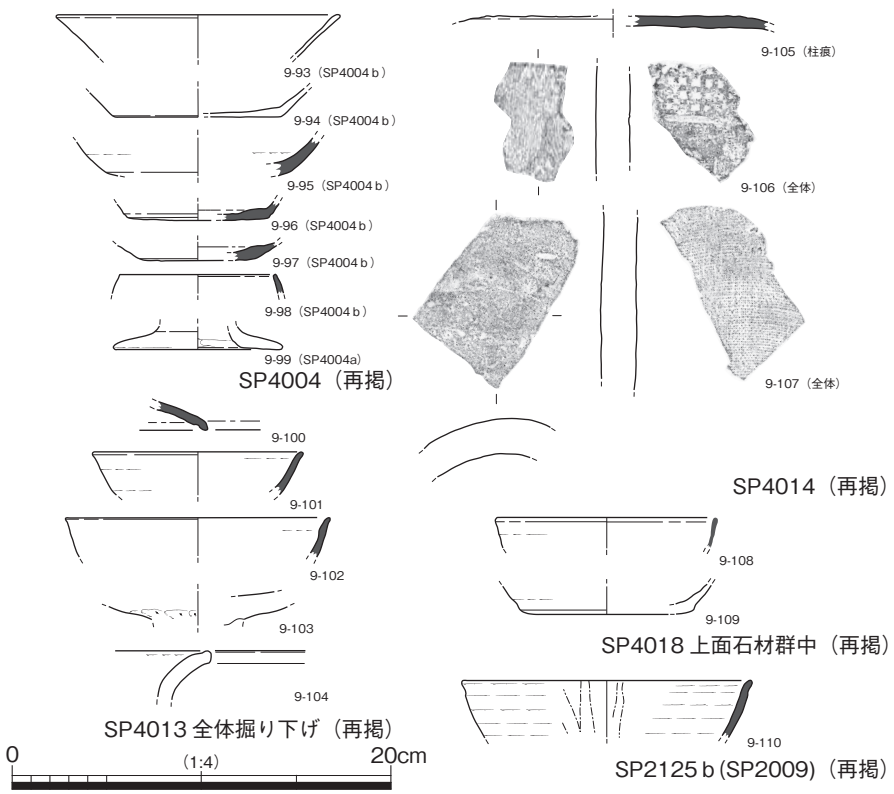


図 210　33-2Tr・SB2023 出土遺物 2

である。土師質土器杯（9-109）は 10 世紀後葉以降に下がる可能性があるが、柱掘方内の資料ではないことを留意する必要がある。須恵器杯（9-110）は SP2125 b に伴う資料であり、9 世紀末から 10 世紀初頭に帰属したものと考える。

以上の出土遺物のうち、時期決定に有効な資料は北東隅入側柱 SP2016 抜取の須恵器杯（322）、SP4004 b に伴う土師質土器杯（9-93. 9-94）須恵器杯（9-95 ～ 9-97）、SP2125 b の須恵器杯（9-110）である。これらの資料は 9 世紀後葉から 10 世紀初頭の時間幅に納まり、最も後出する資料を取り上げると、建て替え又は改修と抜き取りによる廃絶の時間差を抽出が困難な状況にある。

しかし、資料の層位的な取り上げが不十分であったことは否めないため、ここでは SB2023 b とした改修が 9 世紀後葉に行われ、その後の 9 世紀末から 10 世紀初頭に廃絶したと考えておきたい。

一方で、SB2022 の廃絶年代と同様に、本建物の造営の年代を示す資料として適当なものはみられない。また、先行建物である SB2022 との重複関係からみて、空白期を挟むことは想定できない。

ここでは、SB2022 の建て替えとして 9 世紀前葉に造営された後、9 世紀後葉の改修を経て、9 世紀末から 10 世紀前葉に廃絶したと考えておくが、詳細な時期比定は周辺の建物配置との関係で理解すべきである。

SB2024（図 211 ～ 213）

SB2023 の後身となる東西棟の四面廂建物である。SB2022. 2023 を切り、SK2103 に切られる。身舎は梁行 2 間（4. 8 m）、桁行 5 間（15 m）の柱配置に対して、四面廂をもつ。SB2023 との位置関係は、東妻側の廂の出を SB2023 の梁行に、身舎西側梁行を SB2023 の西側梁行に重複させている。四面廂を採用したために、西妻側の廂の出は、SB2023 の梁行よりも西側へ延びる。建物主軸は座標北より 114° 西偏し、身舎の床面積は 72 ㎡、廂を含めた場合は 127. 02 ㎡を測る。建物西半分の柱掘方は、整地土とみられる淡灰色・灰白色シルト（北壁 3 層・西壁 10 層、南壁 4 層）上面において検出され、先行建物である SB2022. 2023 の柱掘方と掘り込み面が異なっている。柱掘方の平面規模は、身舎で長軸 0. 6 ～ 0. 8 m、短軸 0. 4 ～ 0. 6 mの円形乃至楕円形を基本とし、検出面からの深さは 0. 3 ～ 0. 4 mを測る。廂柱掘方の規模は、径 0. 2 ～ 0. 3 mの円形を呈する。身舎と比べて小規模なものとなるが、基本的に身舎柱にそろえた位置に配置されている。廂柱穴掘方の平面規模は、身舎の屋根と非一体的な廂の屋根構造を反映したものと考えられる。

柱掘方の埋土は、灰褐色粘土の偽礫を中心とするが、やや粗い単位で込められている。身舎を中心にして、多くの柱掘方で抜き取りが行われているが、南入側柱 SP2072 では径 0. 15 mの柱痕跡が検出され、北西隅柱の SP2114 抜き取り下位の底面では、拳大の砂岩礫を敷き詰めた基礎固めが確認された。抜き取りを含めた現況から推定される柱間は、梁行 2. 4 m、桁行 2. 1 mを測る。廂の出は、南平側で 1. 9 m、北平側で 2 m、両妻側で 2 mである。

342 ～ 358、9-111 ～ 9-114（再掲）は出土遺物である。土師質土器（342）は、SP2059 の抜き取りからの出土。

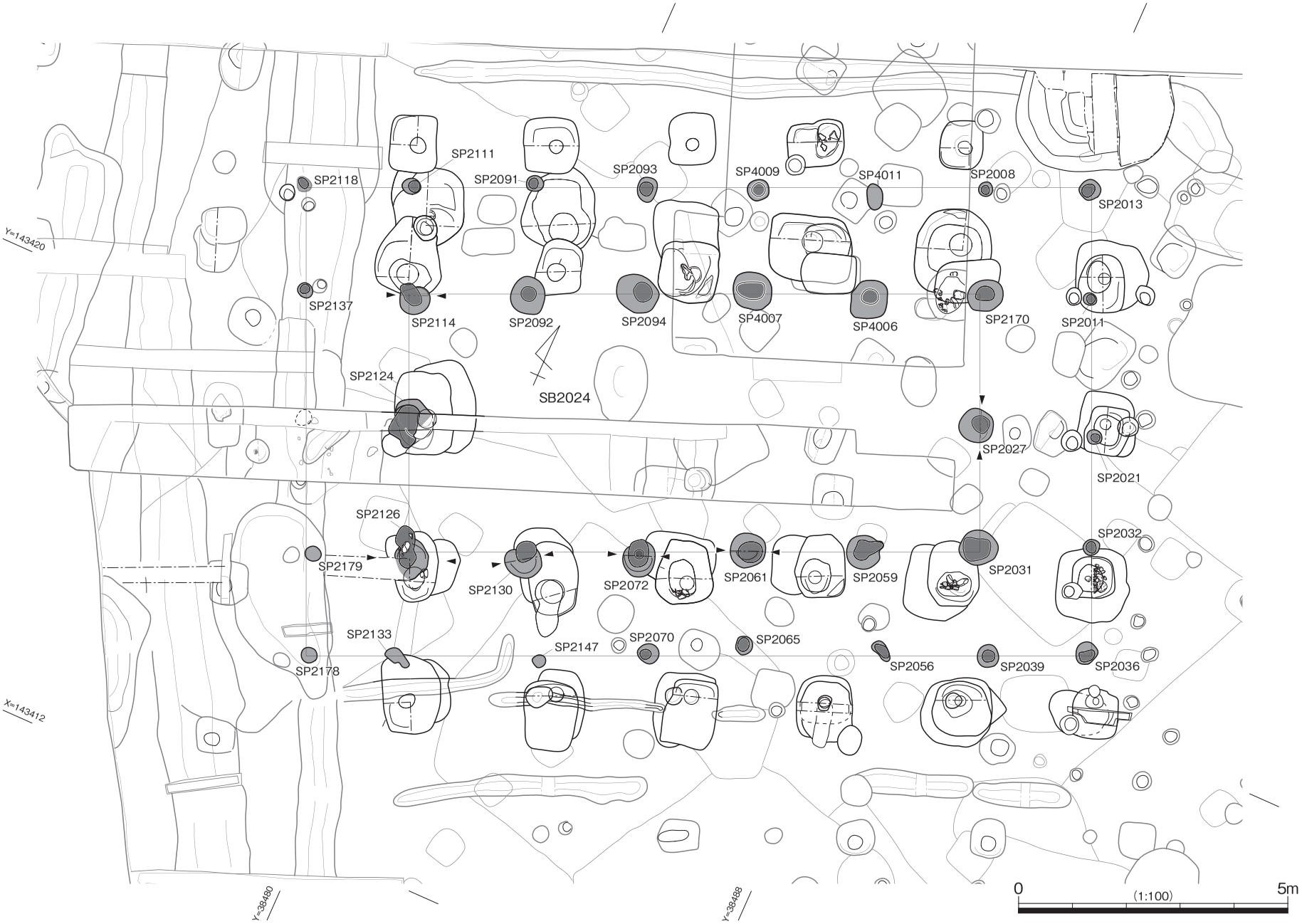


図 211　33-2Tr・SB2024 平面図

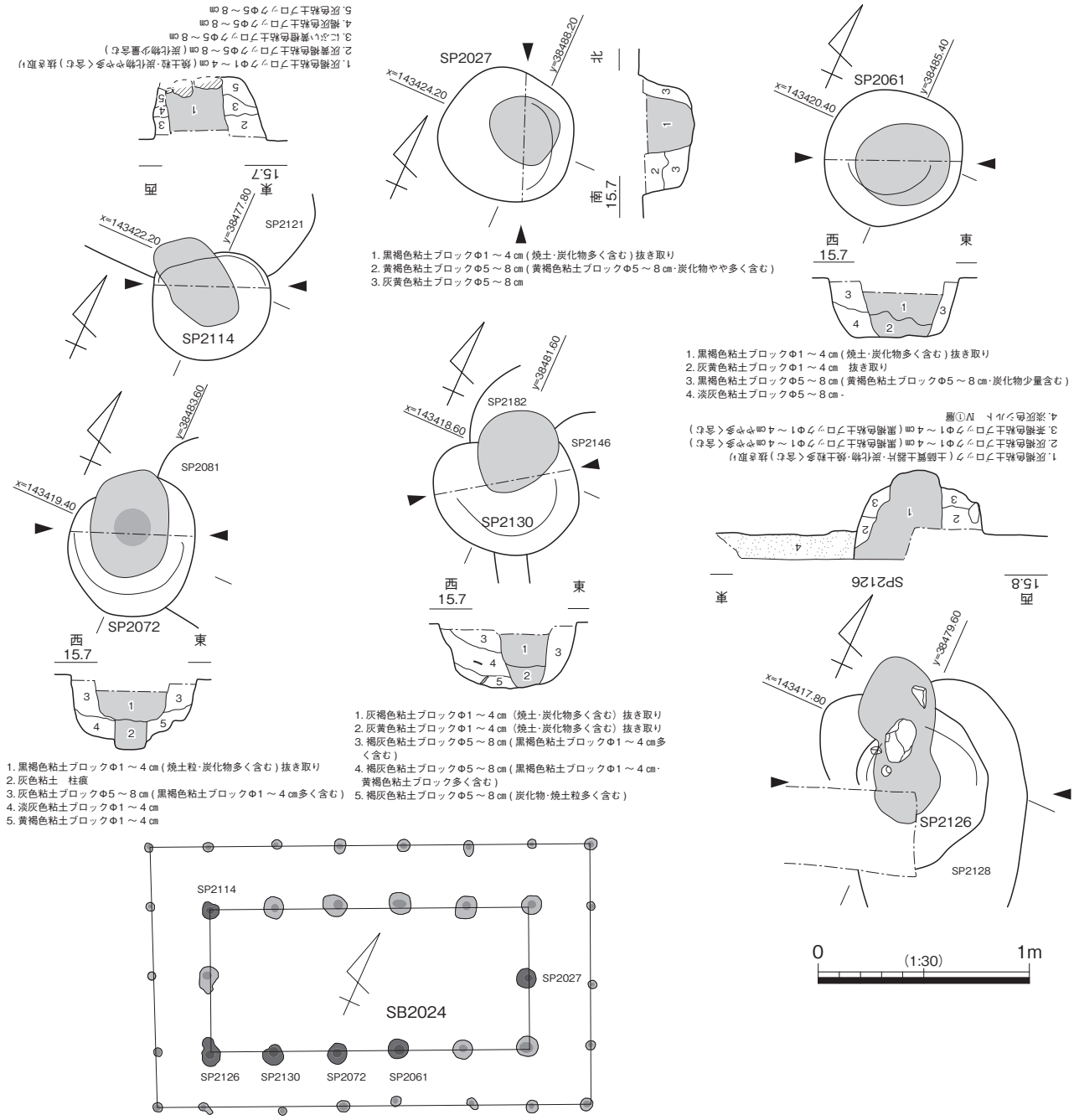


図 212　33-2Tr・SB2024 断面図

344. 345 は大型の鉄釘とみられる。SP2072 の 353、SP2126 からの 356 ～ 358 をはじめとして、抜き取りからの大型鉄釘の出土が目立つ。SP2146 の抜き取りから出土した土師質土器杯（346）、土師質土器台付皿（347）は 11 世紀前葉の資料と考えられる。SP2130 の土師質土器杯（349）は 10 世紀前葉の資料であるが、帰属する層位は確定できない。土師質土器(350)は SP2072 の裏込土からの出土であり、10 世紀前葉から中葉の時間幅で捉えられる。土師質土器杯(351)は SP2072 の抜き取りからの資料であり、11 世紀後葉に比定される。土師質土器皿（9-111）は SP4009 の上層出土であり、11 世紀後葉の資料とみられる。SP4007 抜き取りの土師質土器杯（9-112）、SP4011 上層の土師質土器台付皿（9-114）についても、11 世紀後葉に比定されるものである。

以上の出土遺物の帰属時期や整地土である淡灰色・灰白色シルト（北壁３層・西壁 10 層、南壁４層）の年代観より、本建物は 10 世紀前葉に造営され、11 世紀後葉に廃絶したものと考えておく。先行建物の SB2022. 2023 と比較して改修痕跡が認められないにも関わらず、長期の継続期間を想定することになるが、現状では層位・出土遺物の時期比定に基づき所見を提示しておきたい。

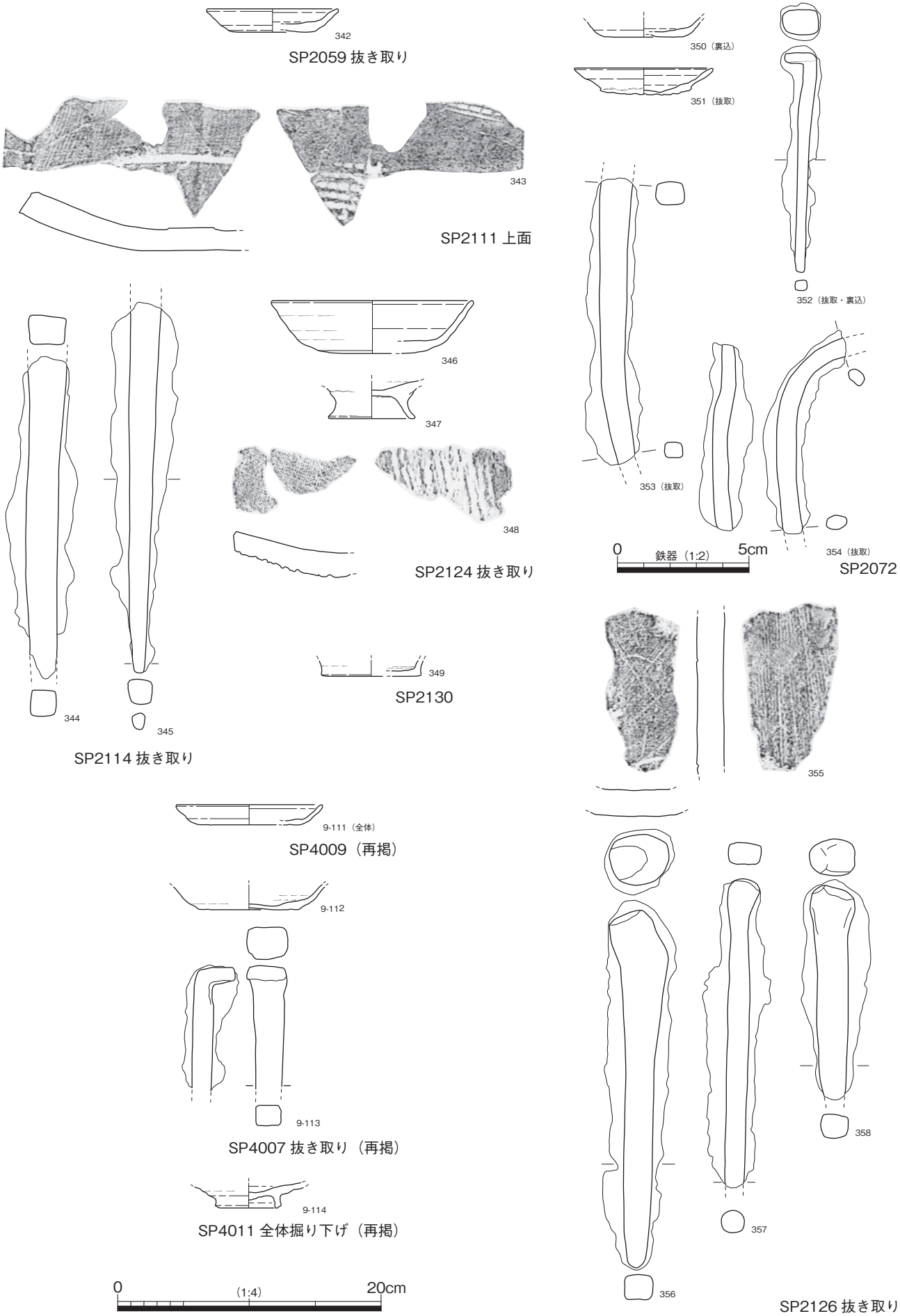


図 213　33-2Tr・SB2024 出土遺物

SD4001.2148.2167（図 214.215）

SB2022.2023.2024 の南北に位置する東西溝であり、SD4001 及び SD2148 の西端は、SB2022.2023 の西妻の柱筋に一致し、SD4001 は SE2003 に切られるものの SB2022.2023 の東妻を越えず、SD2167 も同様に収束するなど、平面位置からみてこれらの建物との関係性を指摘できる。埋土の状況から、基壇外装に伴う据付とは考えられないため、SB2022 の造営開始時に建物敷地を区画・明示するために掘開されたと考えられる。一方、その後の SB2022 から SB2023、2024 への建て替えにおいても、建物敷地が区画範囲を越えるものではないことからみて、埋め戻された溝上面において基壇以外の何らかの区画表示施設が存在していた可能性がある。

SD4001 は、SB2022.2023.2024 の北側に位置し、上面幅 0.35 m、深さ 0.15 mを測り、U字形の断面をもつ。埋土は褐灰色シルトの偽礫の単層である。底面に流入等に起因する機能時堆積層がみられないため、掘開後の早期に埋め戻されていると考えられる。基壇外装の据付痕跡は確認できない。西端付近では、須恵器・平瓦・砂岩礫がまとまって廃棄されていた。須恵器は比較的残存率の高いものであり、埋め戻しの年代を示す良好な資料となる。

359 ～ 365 は出土遺物である。須恵器蓋（361）の内面には「女」の墨書が確認できる。平瓦（364. 365）は、接合関係はみられないが同一個体とみられる。須恵器の年代観は８世紀前葉にまとまっている。

SD2148.2167 は SB2022.2023.2024 の南側に位置し、上面幅 0.35 m、深さ 0.1 mを測り、緩やかに落ち込んだ断面をもつ。埋土は灰褐色シルトの偽礫からなる単層である。両者は接続していないが、残存深度からみて、元来は同一溝であった可能性が高い。調査範囲内で出土遺物は確認できなかった。

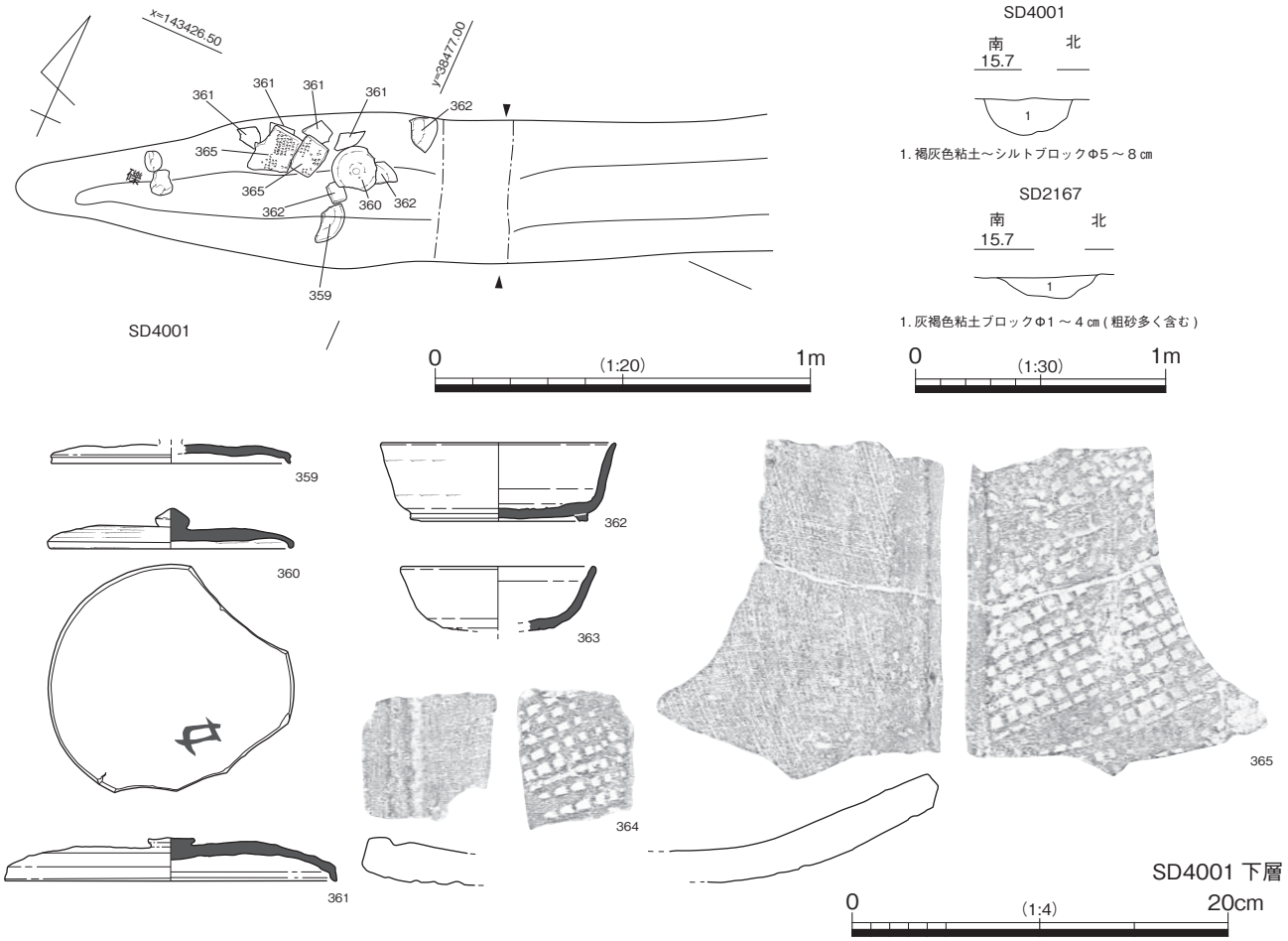


図 215　33-2Tr・SD4001 西端遺物出土状況、断面図及び出土遺物

SA2006（図 216.217）

33-2 トレンチ西部で検出した南北方位の柵である。整地土とみられる淡灰色･灰白色シルト（北壁３層･西壁 10 層、南壁４層）下面で検出し、SD2187 を切り、SD2106 に切られる。北から、SP2108.2109.2008.2134.2141 が、座標北から 22゜西偏する方位をもち、柱間 1.5 mで南北方位に並ぶ。SP2109.2008.2134 は SB2022.2023 の梁間の柱筋に一致しているため、これら建物と同時併存する柵と考えられる。

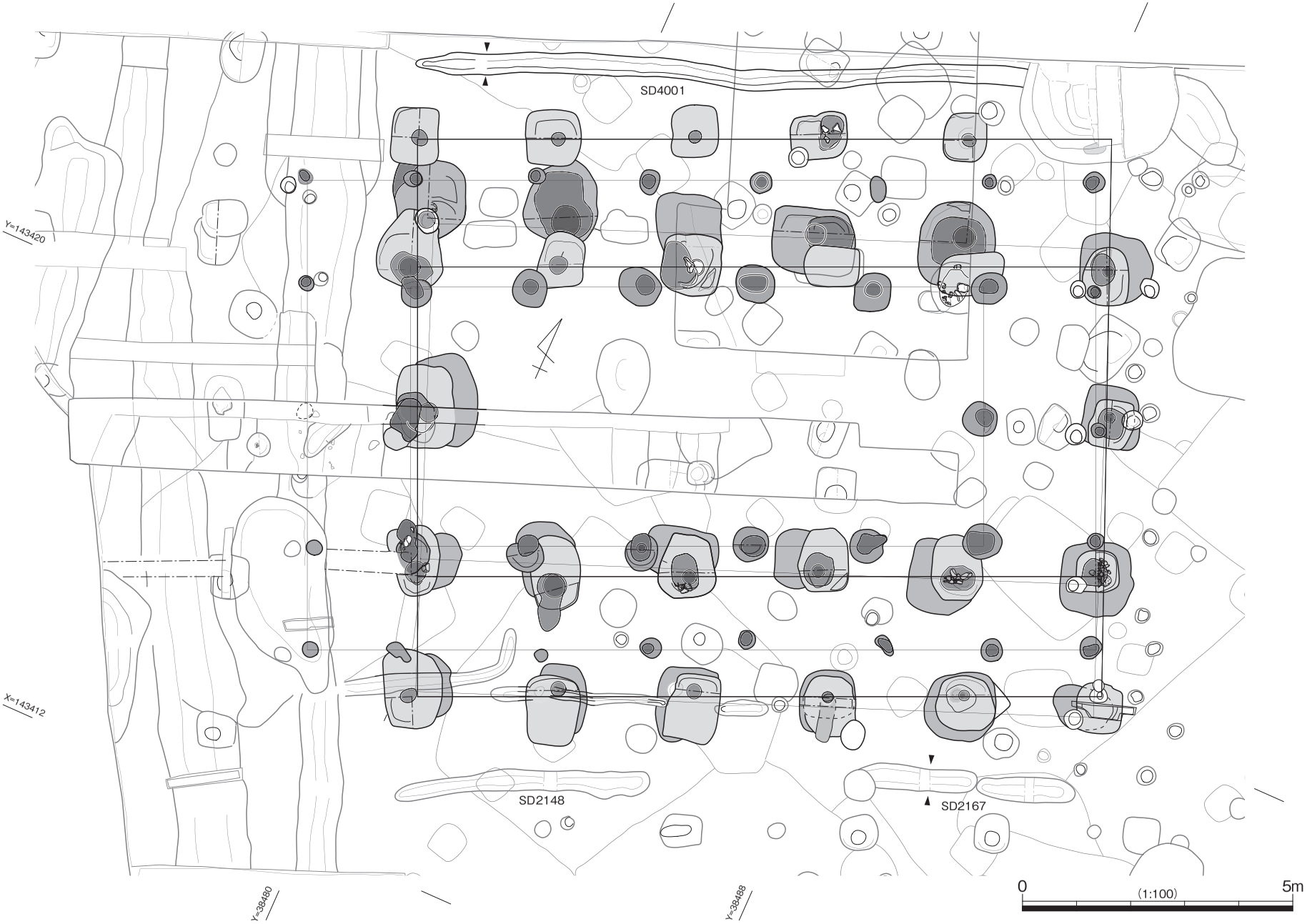
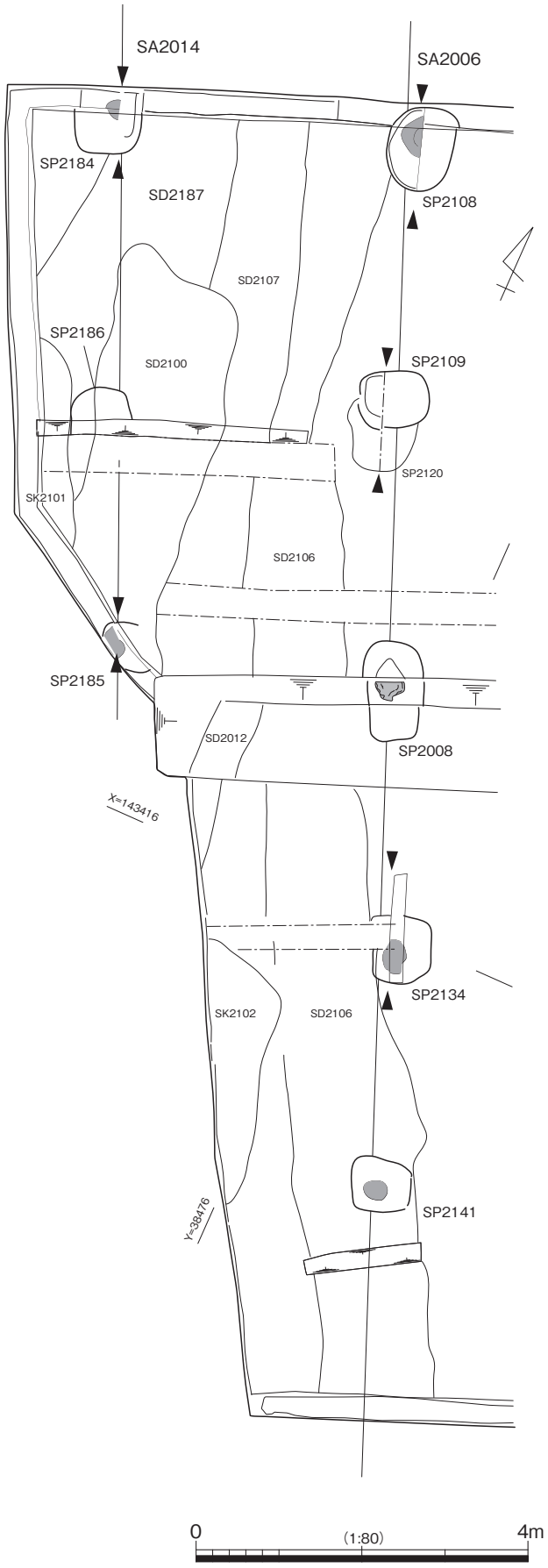
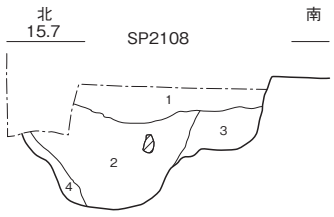
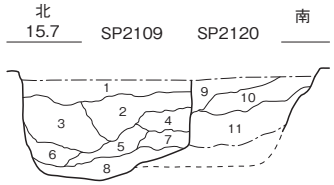


図 214　33-2Tr・SD2167.4001 平面図

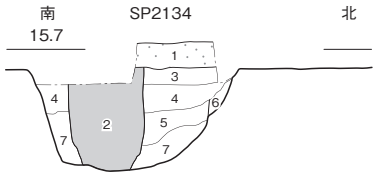




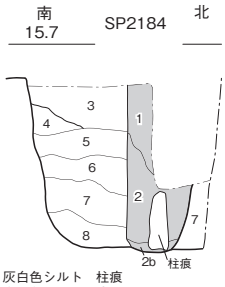
1. 灰褐色粘土ブロックΦ1～4㎝(黒褐色･黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)
2. 暗灰色粘土ブロックΦ9㎝以上
3. 灰色粘土ブロックΦ5～8㎝(黒褐色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む)
4. 灰黄色粘土ブロックΦ1～4㎝(黒色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)



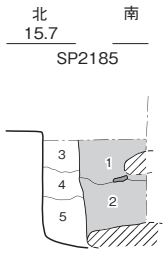
1. 灰褐色シルトブロックΦ5～8㎝(黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)
2. 茶褐色粘土ブロックΦ5～8㎝(黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む)
3. 黒褐色粘土ブロックΦ5～8㎝(黄褐色粘土ブロックΦ5～8㎝やや多く含む)
4. 灰褐色シルトブロックΦ5～8㎝(黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)
5. 灰黄色粘土ブロックΦ5～8㎝(黒褐色粘土ブロック･黄褐色粘土ブロックΦ9㎝以上多く含む)
6. 黒褐色粘土ブロックΦ5～8㎝(黄褐色粘土ブロックΦ9㎝以上多く含む)
7. 灰褐色粘土ブロックΦ5～8㎝(黄褐色粘土ブロックΦ9㎝以上多く含む)
8. 黒褐色粘土ブロックΦ5～8㎝(黄褐色粘土ブロックΦ9㎝以上多く含む)
9. 灰褐色シルトブロックΦ5～8㎝(黄褐色粘土ブロックΦ5～8㎝多く含む)
10. 灰色粘土ブロックΦ5～8㎝(黒色粘土ブロック･黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む)
11. 灰黄色粘土ブロックΦ5～8㎝(黒色粘土ブロック･黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝やや多く含む)



1. 淡灰色シルト(Ⅳ①層)
2. 黒褐色粘土ブロックΦ1～4㎝(黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)抜き取り
3. 黒色粘土ブロックΦ1～4㎝
4. 黒色粘土ブロックΦ1～4㎝
5. 淡灰色粘土ブロックΦ1～4㎝(黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)
6. 黄灰色シルトブロックΦ1～4㎝(黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)
7. 黒褐色粘土ブロックΦ1～4㎝(黄褐色粘土ブロックΦ5～8㎝やや多く含む)



1. 灰白色シルト　柱痕
2. 青灰色粘土　柱痕
2b. 灰色粘土　柱痕
3. 茶褐色粘土ブロックΦ1～4㎝(黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)
4. 暗灰色粘土ブロックΦ9㎝以上
5. 暗灰色粘土ブロックΦ5～8㎝
6. 灰色粘土ブロックΦ5～8㎝
7. 灰黒色粘土ブロックΦ5～8㎝
8. 灰黒色粘土ブロックΦ5～8㎝(黄褐色粘土ブロックΦ1～4㎝多く含む)



1. 灰色粘土ブロックΦ1～4㎝(黄褐色粘土ブロックΦ5～8㎝やや多く含む)抜き取り
2. 暗灰色粘土　抜き取り
3. 茶褐色粘土ブロックΦ1～4㎝(黄褐色粘土ブロックΦ5～8㎝多く含む)
4. 暗灰色粘土ブロックΦ5～8㎝
5. 黒灰色粘土ブロックΦ5～8㎝

0 (1:30) 1m

図 216　33-2Tr・SA2006.2014 平断面図

SP2185は、柱掘方の平面規模は長軸1.2ｍ、短軸0.6ｍの隅丸方形を呈し、底面には厚さ0.2ｍの安山岩製の礎板石が据え付けられている。

須恵器鉢（366）はSP2134の断ち割りより出土したもので、柱掘方内の層位を確定できないが、８世紀代の資料と考えられる。SB2022.2023の梁間の柱筋に一致していることを踏まえると、８世紀前葉から10世紀前葉に属すると考えられるが、須恵器鉢（366）の年代観やSD2106との層位関係を踏まえると、SB2022が機能した８世紀前葉から９世紀前葉に帰属する柵と考える。

SA2014（図216.217）

33-2トレンチ北西部で検出した柱列である。SD2187を切り、SD2100・SK2101に切られる。SA2006と同じ座標北22°西偏する方位で、北よりSP2184.2186.2185が並ぶ。柱間はSP2184･2186間では約3.6ｍ、SP2186･2185間では約2.4ｍと一定ではないが、SP2184.2185とSA2006の柱筋が一致することを重視し、柱列として提示しておく。現状で建物と柵の判断はできない。

SP2108は、柱掘方の平面規模が長軸１ｍ、短軸0.5ｍの隅丸方形を呈する。柱掘方は、残存深度0.65ｍを測り、径0.25ｍの柱痕跡の下部には柱根（369）が遺存しているため、廃絶に際しては柱材が切断されたと考えられる。SP2185の底面には安山岩製の礎板石の据付を行っている。

須恵器横瓶（368）はカキ目を失った７世紀後葉から８世紀初頭の資料と考えられるため、SD2187からの混入品と考えられる。時期決定可能な出土遺物はみられないが、東側のSA2006と方位・柱筋が一致することから判断して、８世紀前葉から９世紀前葉に帰属するものと考える。

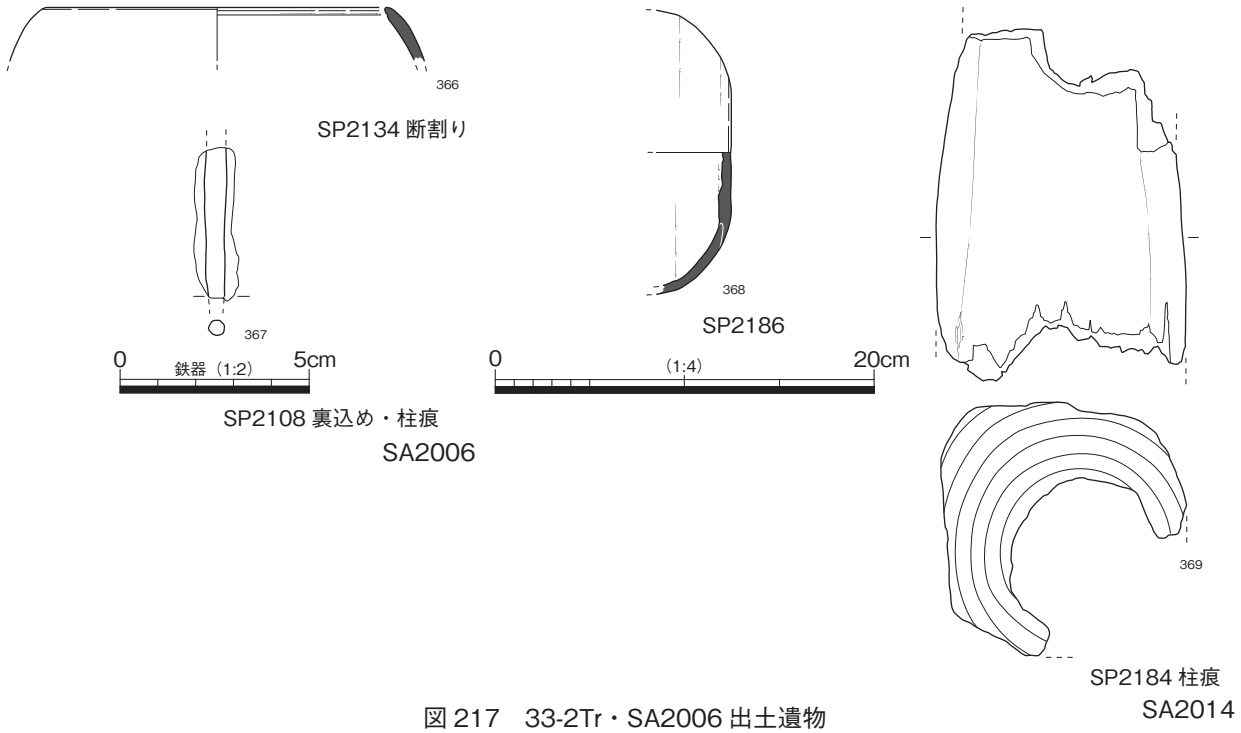


図217　33-2Tr・SA2006出土遺物

SB2020（図218.219）

33-2トレンチ北部で検出した掘立柱建物である。SB2022.2023、SD4001に切られる。31次調査31-4トレンチの成果と合わせて建物復元を行った。梁行２間（3.1ｍ）、桁行３間（4.5ｍ）の柱配置をもち、建物主軸は座標北から73°西偏する東西棟である。

柱掘方の平面規模は、長軸0.8～１ｍ、短軸0.7～0.8ｍを測る隅丸長方形、隅丸方形を呈する。断ち割りを行ったSP4038では径0.2ｍの柱痕跡を確認し、SP4019.4024では抜き取り痕を検出している。これらからみた柱間は、梁行、桁行ともに1.8ｍと推定できる。

SP4038の裏込土から土師器甕の胴部片が出土しているが、詳細な時期決定には至らない。真北を指向した建物方位からの推定により、７世紀後葉から８世紀初頭に属する建物と考えたおきたい。

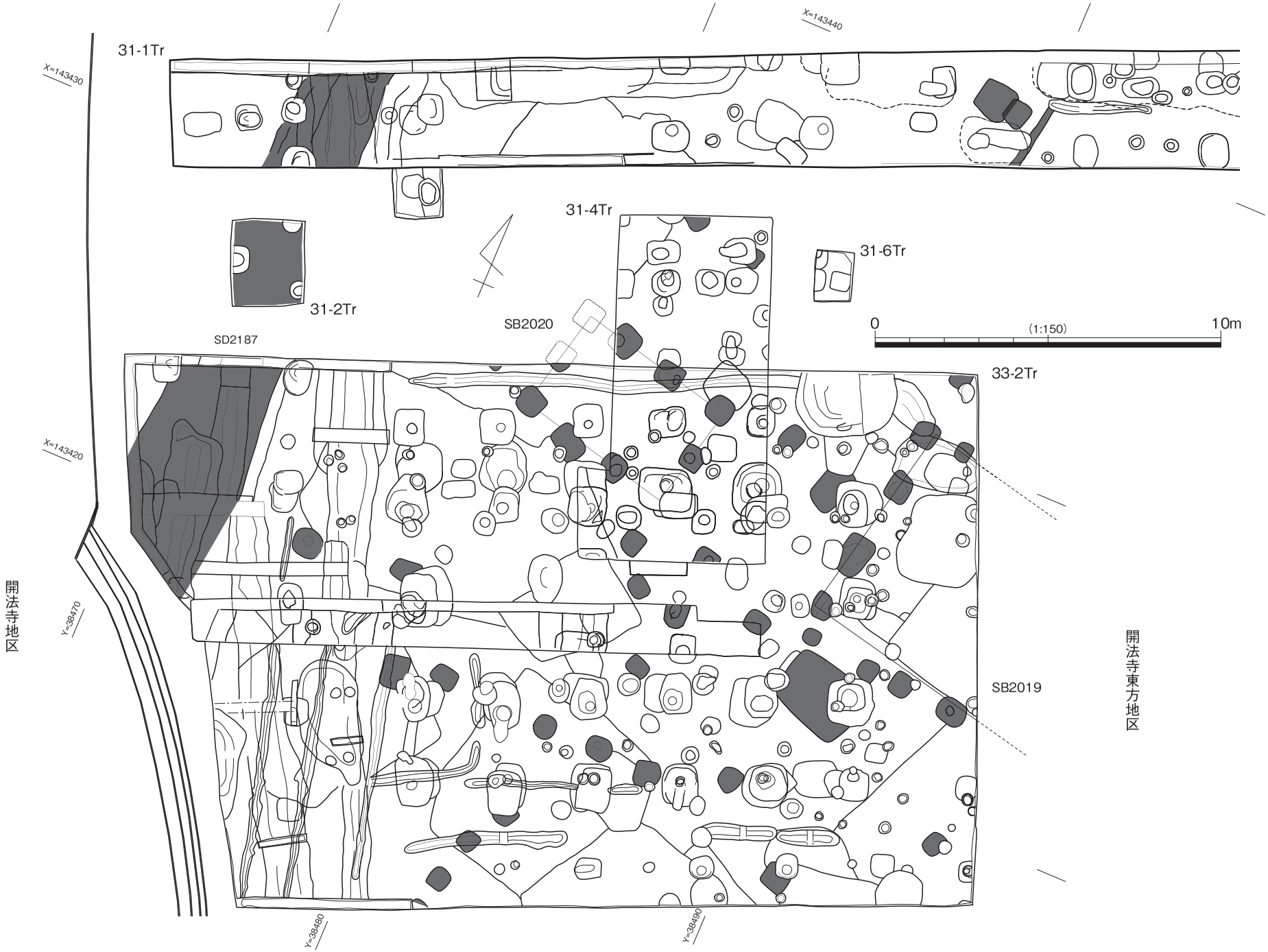


図 218　33-1Tr 正方位主軸建物 . 柱穴等分布図

真北を指向する 33-1 トレンチのその他建物・柱穴（図 218）

33-2 トレンチでは、SB2020 以外にも真北を指向する建物・柱列が検出されている。平面検出のみにとどまるものが多いが、これらは７世紀中葉とみられる竪穴建物を切り、８世紀前葉以降の諸遺構に切られるという層位関係を有している。切り合いによる欠落部が多く、復元に至らなかったものが多いが、７世紀後葉から８世紀前葉の遺構形成の状況をしる上で重要と考えられるため、図 218（仮 11-37）に分布図を掲げて概況を説明しておきたい。

SB2206 は、SB4053 東側に位置する３間（６ｍ）×３間以上（4.8 ｍ）の柱配置をもち、建物主軸は座標北から 72゜西偏するもので、東西棟となる可能性が高い。

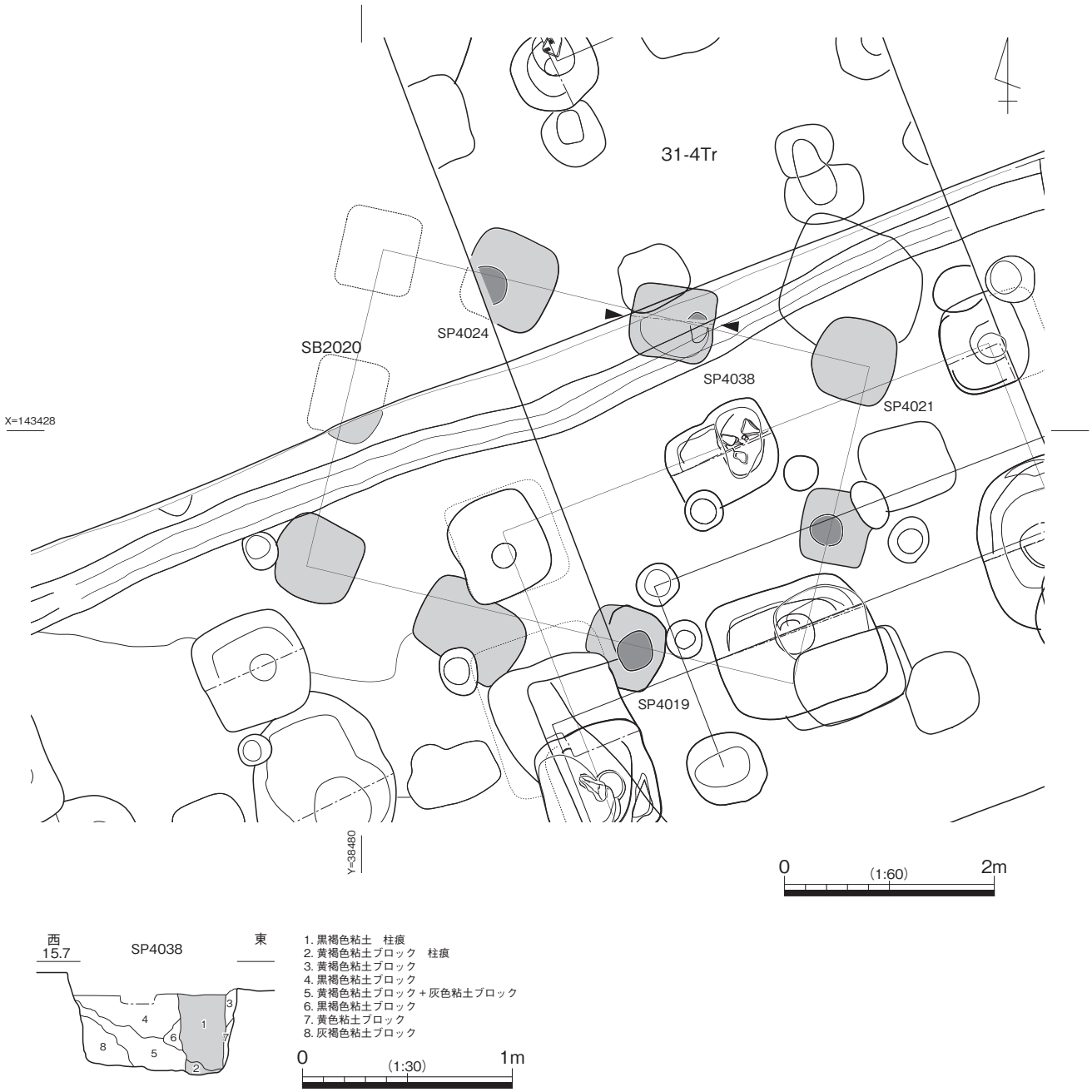


図 219　33-2Tr・SB2020 平断面図

SB2025.2026（図 221）

33-2 トレンチ東部、南部で検出した掘立柱建物である。SB2025 は、梁行２間（４m）、桁行３間（８m）の柱配置をもち、建物主軸は座標北から 22°西偏した南北棟である。柱掘方は径 0.3 ～ 0.4 mの円形を呈し、径 0.1 mの柱痕跡が確認できる。柱掘方の断ち割りは行っていないが、上層より 370 ～ 374 の出土遺物がみられ、12 世紀に帰属する建物と考える。

SB2026 は、梁間２間(2.4 m)以上、桁行４間(10.2 m)の柱配置をもち、建物主軸は座標北から 113°西偏するもので、南側桁行は調査区外となる。柱掘方は径 0.2 ～ 0.3 mの円形を呈し、径 0.1 mの柱痕跡を確認できる。SP2144 の柱痕跡より土師質土器皿(375)、SP2058 の柱痕跡より土師質土器杯(376)が出土しており、12 世紀に廃絶した建物と考える。

SB2021(図 220)

33-2 トレンチ南東部で検出した東西方向の柱列である。東より SP2162.2159.2181.2160 が座標北より 113°西偏した方位で並ぶ。SP2162.2159.2160 では径 0.2 mの柱痕跡が確認されており、2.5 mの柱間を推定できる。現状で、建物と柵を判別する材料はない。

調査範囲内で時期決定可能な出土遺物はみられなかったが、埋土の特徴からみて、８世紀前葉から中葉に帰属する遺構と考えておきたい。

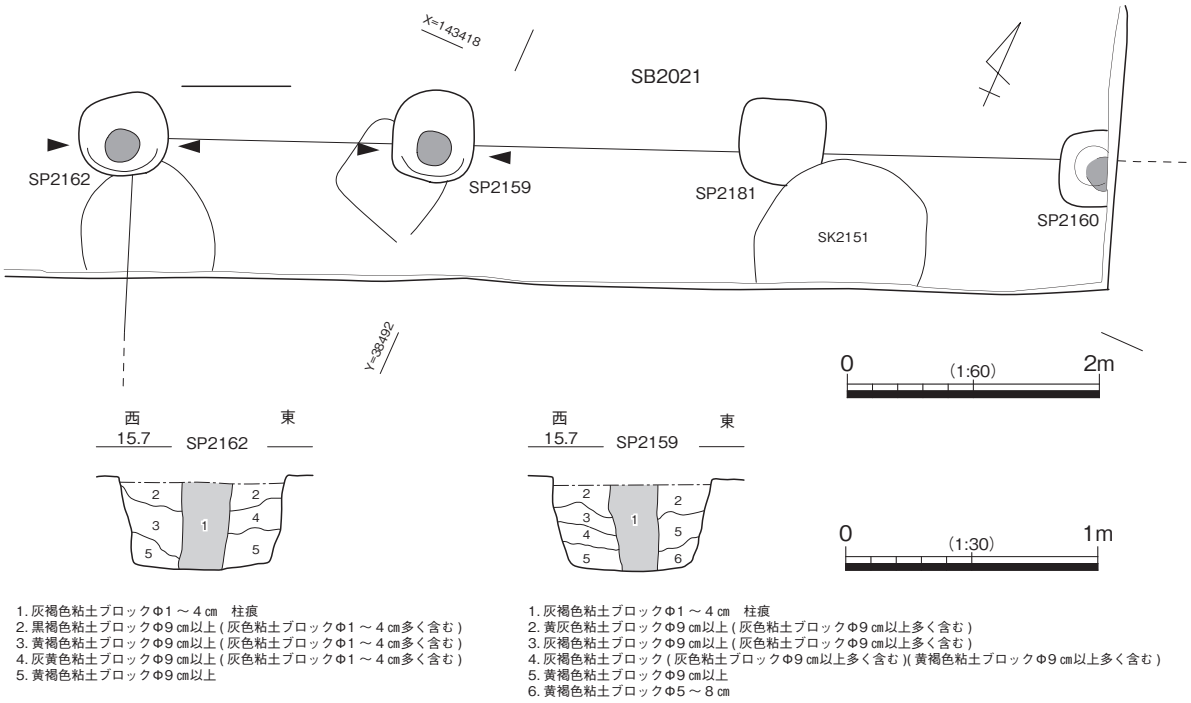


図 220　33-2Tr・SB2021 平断面図

竪穴建物群（図 222）

33-2 トレンチの西部及び南東部を中心に竪穴建物を検出している。竪穴建物は、顕著な重複が認められるが、真北を意識した主軸方位に共通性をもっている。31 次調査 31-2 トレンチの壁面の観察では約 0.25 mの深さを有し、層厚 0.1 mの貼床を敷設している。検出面上においては竈の付設を確認していない。

調査範囲内で時期決定に耐え得る出土遺物がみられないが、７世紀後葉以降の全ての遺構に切られていることや、周辺の調査成果からみて、７世紀中葉の遺構群と考える。

その他の柱穴・土坑出土遺物（図 223）

図 223 には、33-2 トレンチで検出された柱穴・土坑よりの出土遺物のうち、建物復元や詳細な報告に至らなかった資料をまとめて掲載している。本調査区の遺構形成時期を示す資料として提示しておきたい。

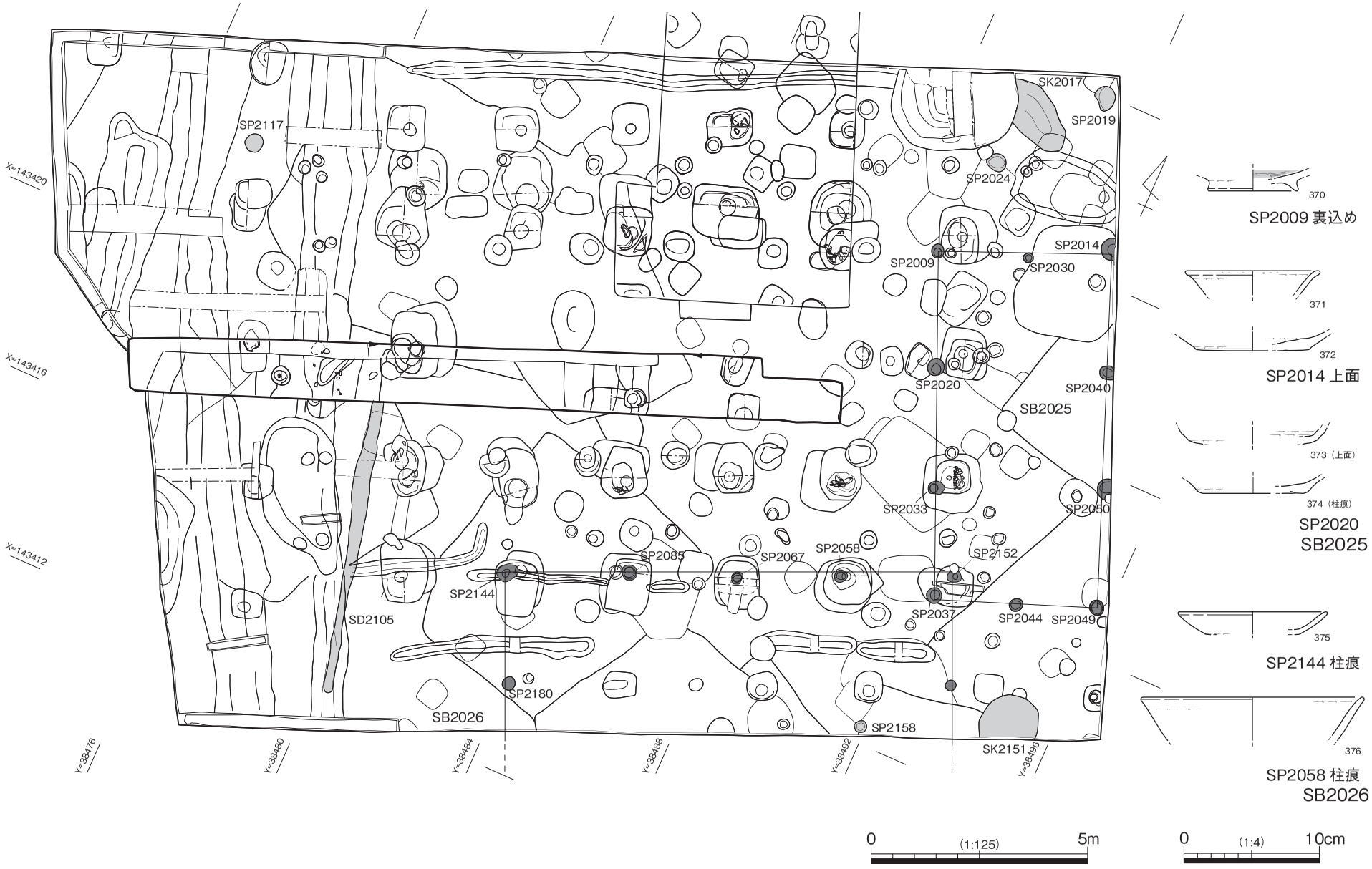


図 221　33-2Tr・SB2025.2026 平面図及び出土遺物

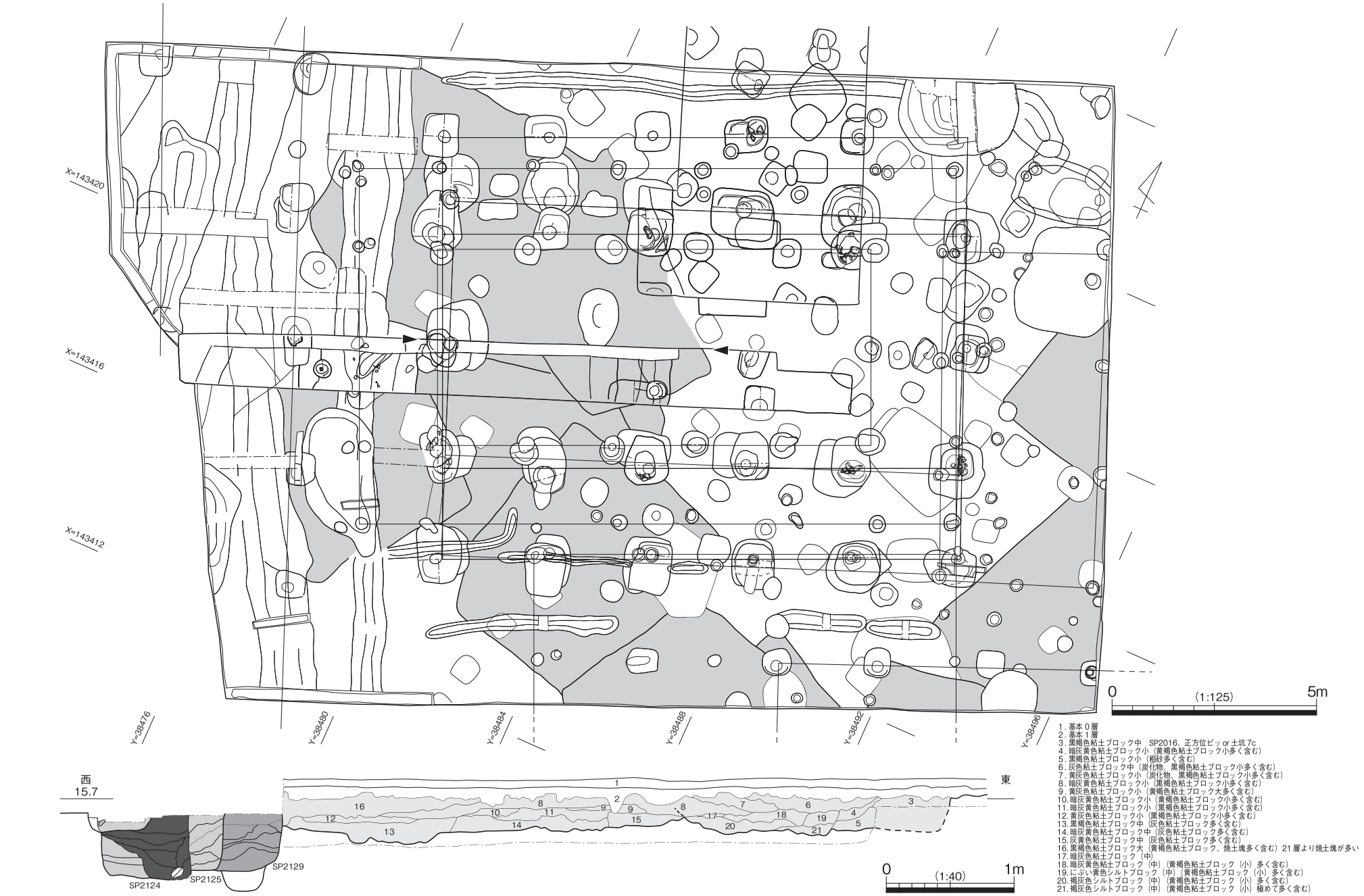


図 222　33-2Tr 竪穴建物平断面図

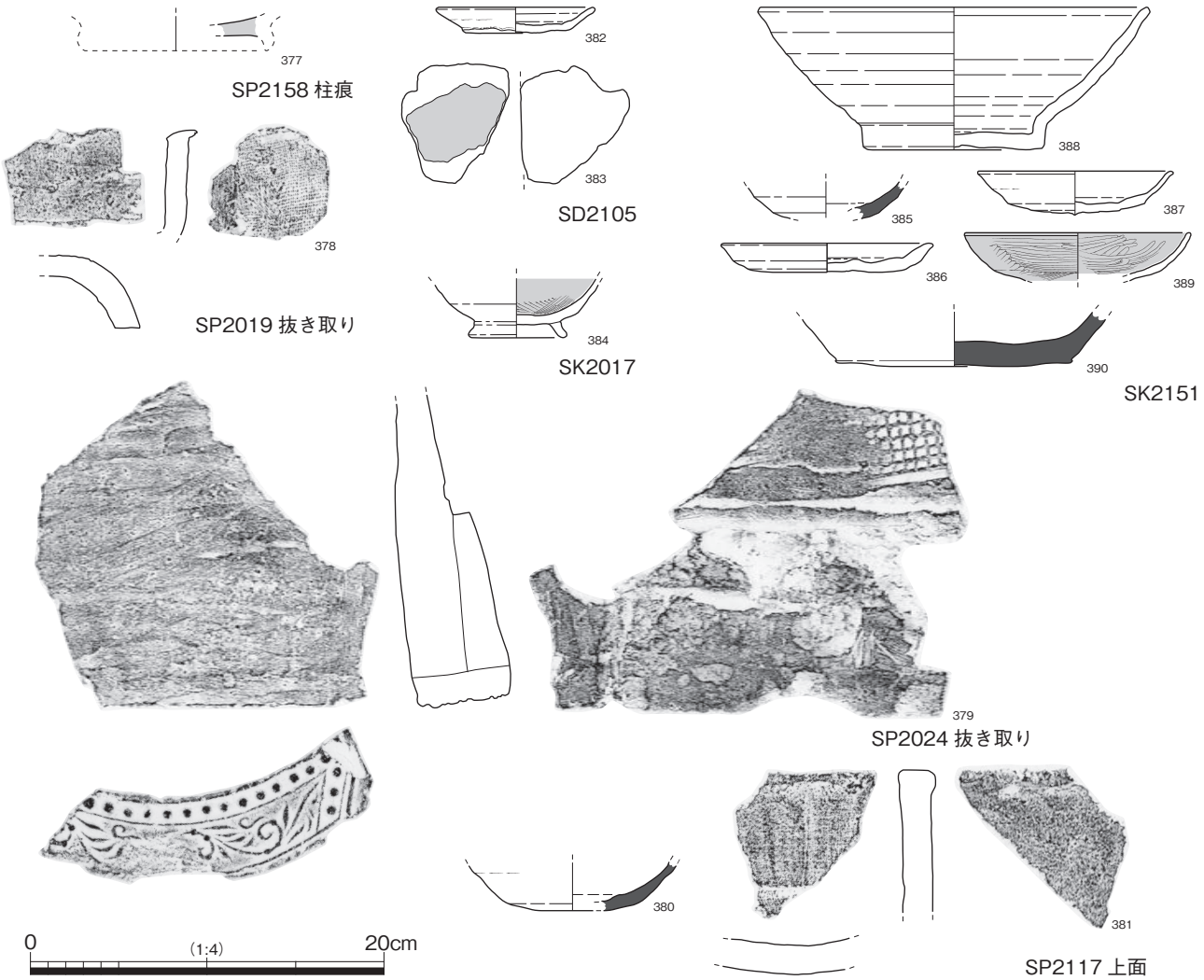


図 223　33-2Tr 柱穴ほか出土遺物

SD2104（図 224 ～ 226）

33-2 トレンチ西部で検出した南北溝である。整地土とみられる淡灰色・灰白色シルト（北壁３層・西壁 10 層、南壁４層）上面で検出し、SD2115、SB2024 を切り、SK2103 に切られる。上面幅 0.8 m、深さ 0.15 mの規模を測り、断面形は緩いU字形を呈する。SD2107、2115 等の本調査区西部に集中する南北溝のうち、層位・出土遺物からみて最も後出するものである。

土師質土器台付皿（391）は 12 世紀代の資料と考えられる。393 は中空の円環状の不明青銅器片で、表面は銅地のままである。

SD2106（図 224 ～ 226）

33-2 トレンチ西端で検出した南北方向の溝である。SD2187. 2107、SA2206 を切り、SK2102 に切られる。上面幅 1.2 ～ 1.5 m、深さ 0.1 ～ 0.15 mを測り、緩やかに落ち込む断面形をもつ。前述のとおり、灰色シルトの偽礫や小礫をやや多く含み整地土とみられる淡灰色・灰白色シルト（北壁３層・西壁 10 層、南壁４層）下面で検出したが、同層により埋没している。SD2107、2115 等と同様に、微高地上を南北に区画する機能が考えられる。

394 ～ 408 は出土遺物である。これらのうち、399 ～ 408 については本溝埋没と同時に敷設された淡灰色・灰白色シルトからの出土遺物である。

埋土からの出土遺物は、行基式丸瓦（394. 395）、平瓦（396 ～ 398）以外に、図化可能な土器片はみられない。

淡灰色･灰白色シルトからの出土遺物（399 ～ 408）のうち、須恵器蓋（399）、同杯（400）、同皿（401）については、９世紀前葉から後葉の資料と考えられる。畿内系土師器杯（402）は７世紀末から８世紀初頭、同皿（405）は８世紀

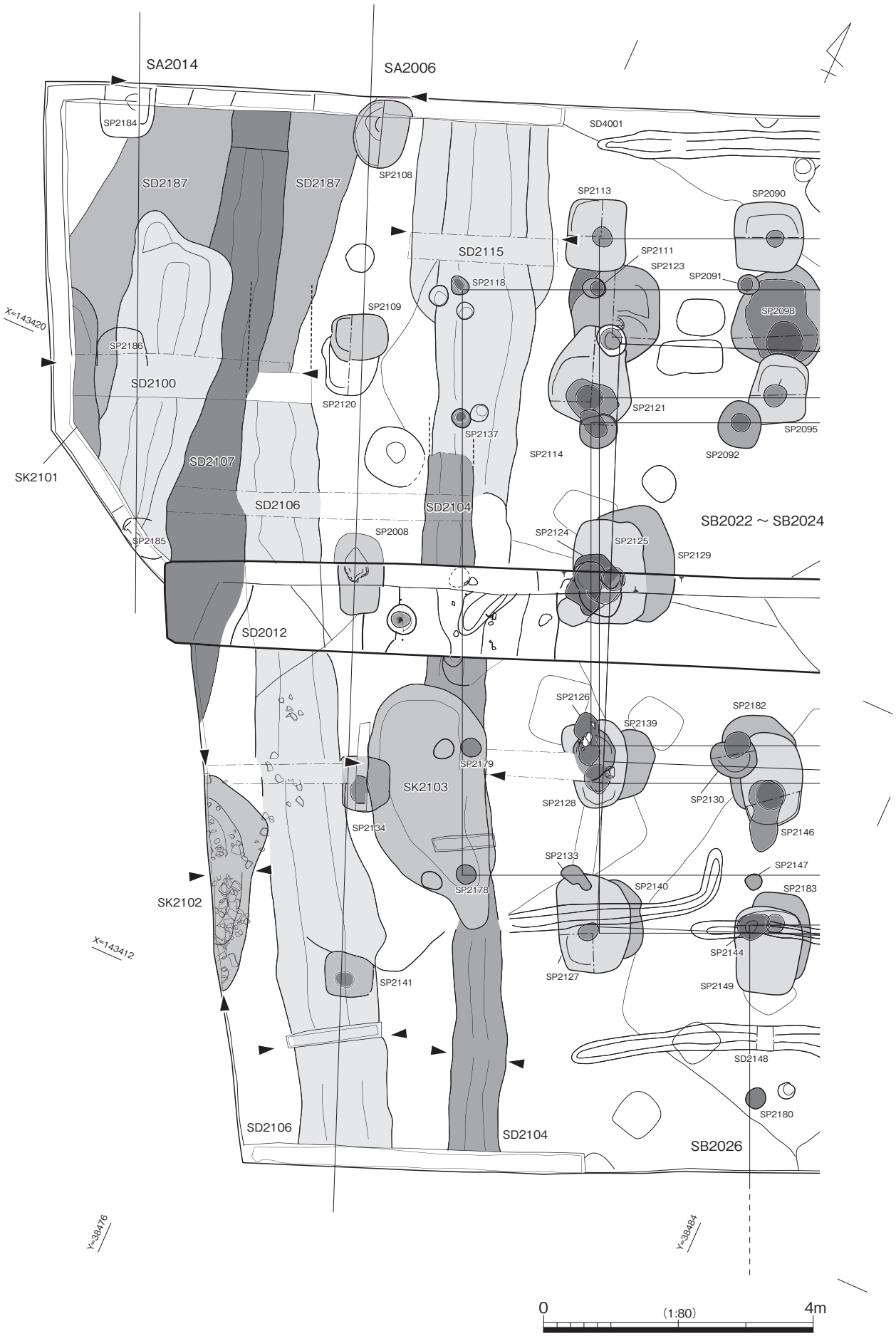


図 224　33-2Tr 西端部溝群平面図

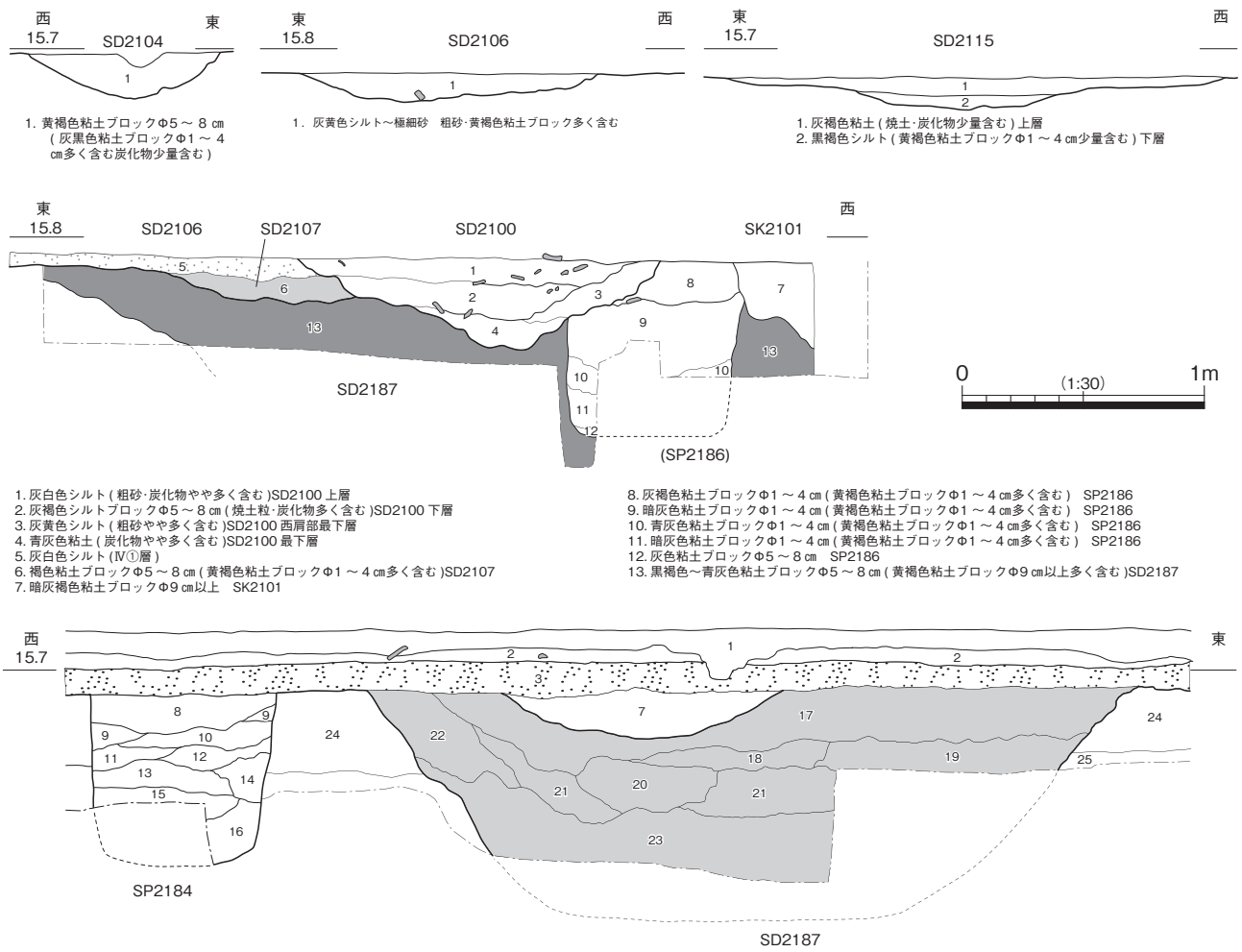


図 225　33-2Tr 西端部溝群断面図

中葉とみられる。土師質土器杯（403.404）は 10 世紀前葉と考えられる。

淡灰色・灰白色シルトからの出土遺物の年代観より、本溝は 10 世紀前半に埋め戻されたと考えられる。東側に位置する大型建物（SB2022.2023.2024）との時間的な関係は、SB2023 の一時期と同時併存し、本溝埋没と整地土（淡灰色・灰白色シルト）付設後に SB2024 が造営されたと考えられる。

SD2107（図 224 ～ 226）

33-2 トレンチ西部の南北溝である。整地土とみられる淡灰色・灰白色シルト（北壁３層・西壁 10 層、南壁４層）下面で検出し、SD2187、SA2207 を切り、SD2106.2100 に切られる。SD2106.2115 等とともに、微高地１の開法寺伽藍東側を南北に区画する溝群の一つである。上面幅１～ 1.2 m、深さ 0.1 ～ 0.15 mの規模を測り、埋土に褐色・黄褐色粘土の偽礫を多く含む。

409.410 は出土遺物である。須恵器杯（409）は８～９世紀の資料とみられるが詳細な時期決定に耐えられるものではない。

ここでは SA2014・SD2106 との切り合い関係から推定して、本溝は９世紀代に機能したものと考えておく。東側に位置する大型建物（SB2022.2023.2024）との時間的な関係は、SB2022・2023 の一時期と同時併存し、本溝埋没に SD2106 が掘開され機能が引き継がれたと考える。

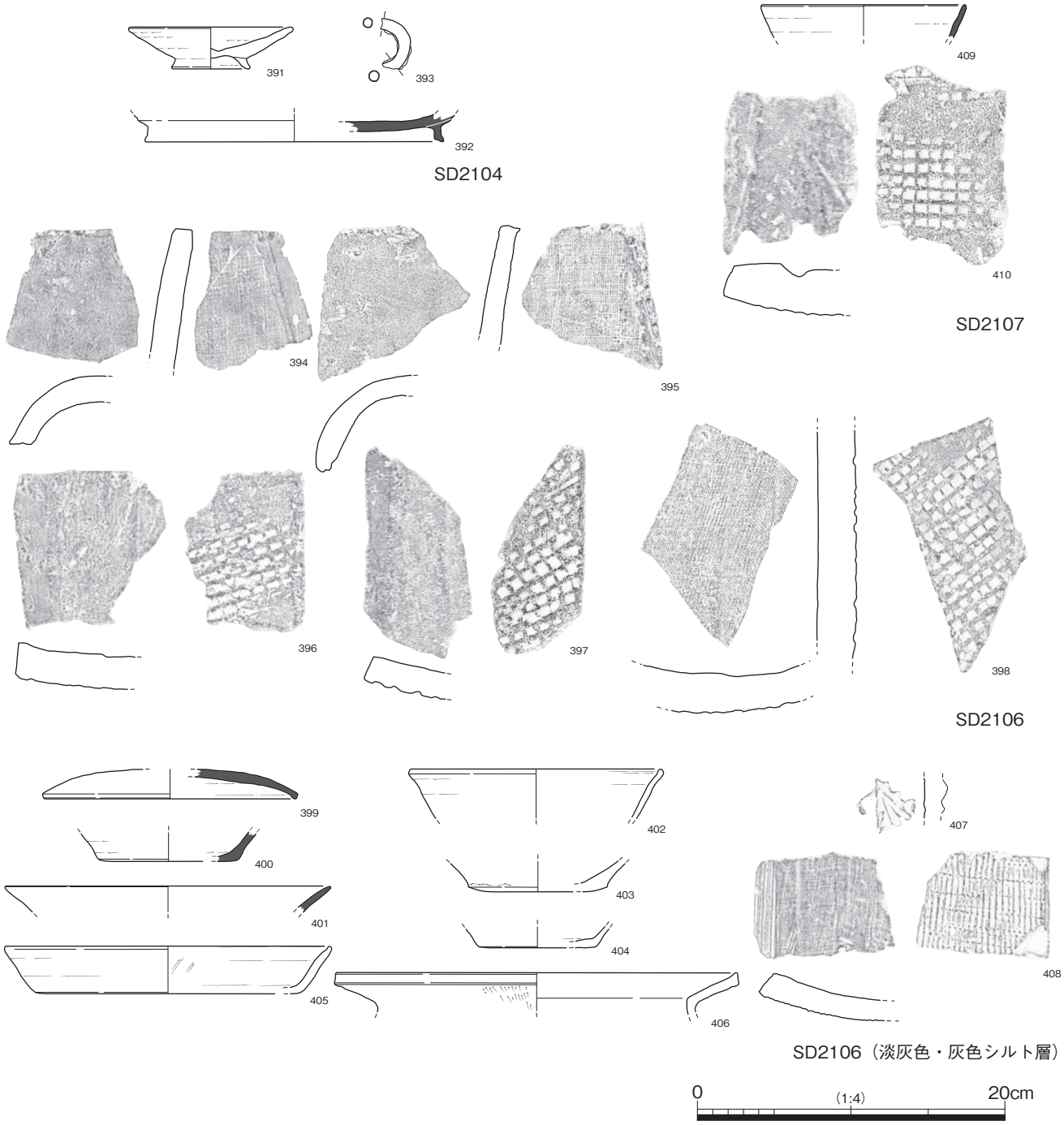


図 226　33-2Tr・SD2104.2106 ほか出土遺物

SD2100（図 224.227.228）

33-2 トレンチ西部で検出した南北溝である。整地土とみられる淡灰色・灰白色シルト（北壁３層・西壁 10 層、南壁４層）上面で検出し、SD2187. 2107、SA2014 を切り、SK2101 に切られる。上面幅 1. 5 m、深さ 0. 35 mを測り、立ち上がりに小規模なテラス面をもっている。埋土は概ね４単位に細分されるが、いずれも灰色系の偽礫や焼土・炭化物を含むことで共通しており、一括して埋め戻されたと考えられる。

埋土には、全体的に土師質土器を中心とした遺物が含まれている。遺物は上・下・最下層に区分して取り上げたが、前述した埋没状況を踏まえると、これらは一括廃棄されたものと考えられる。

411 ～ 444 は下層として取り上げた一群である。土師質土器杯（424）の見込みには、タール状の物質が付着しており、灯明皿として転用されたものと考えられる。434 は須恵器蓋の内面を利用した転用硯である。軒平瓦（438）は型式不明。

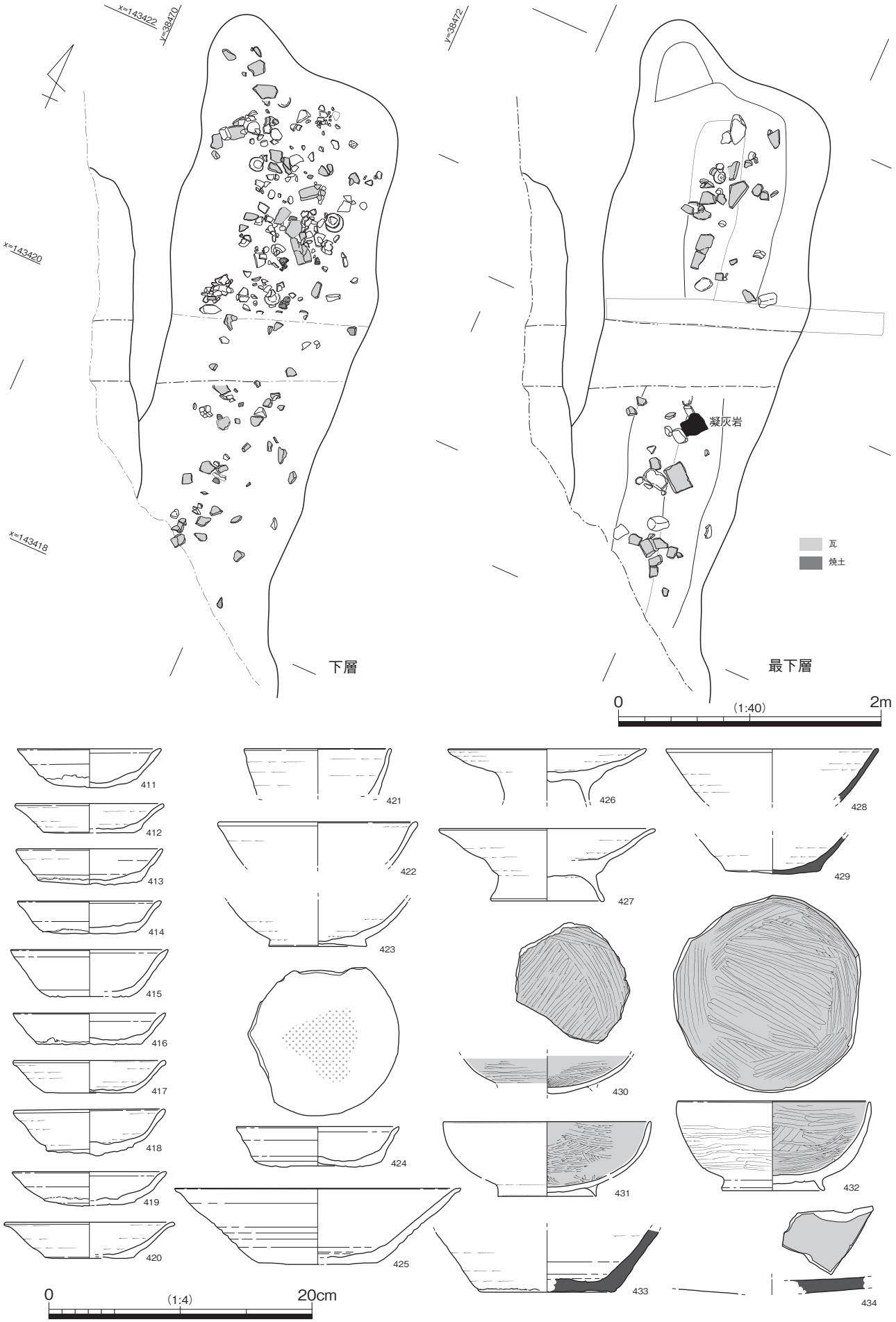


図 227　33-2Tr・SD2100 遺物出土状況及び下層出土遺物 1

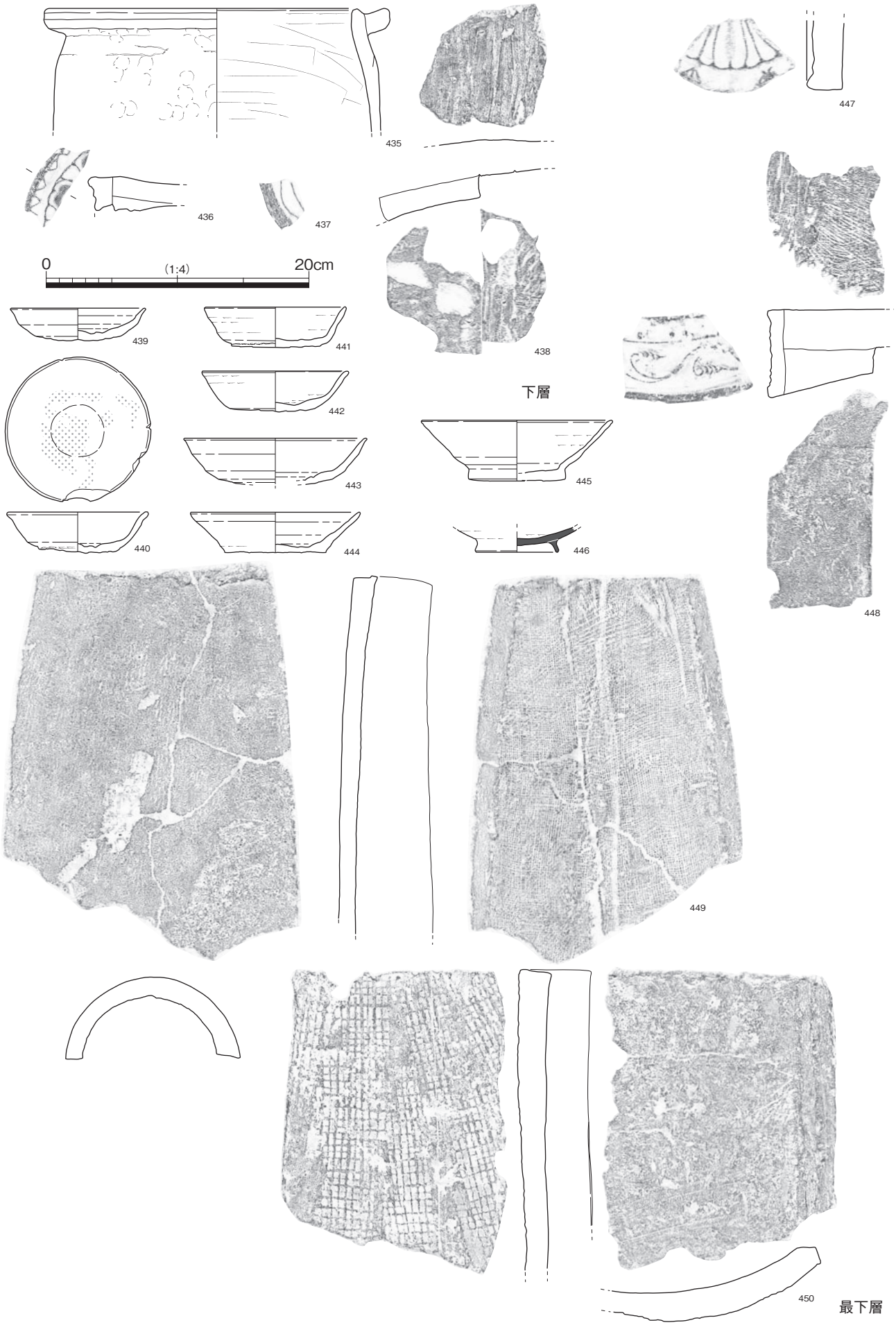


図 228　33-2Tr・SD2100 下層出土遺物 2. 最下層出土遺物

445 ～ 450 は最下層として取り上げた一群である。軒丸瓦（447）は弁区文様が KH106 型式に似るが、周縁の鋸歯文が異なるため、型式不明となる。軒平瓦（448）は KH203 型式であり、開法寺で確認されているものである。本遺構の瓦出土量は破片数 113 点（丸瓦 44 点（39%）、平瓦 69 点（61%））、総重量 34,156 g（丸瓦 11,433 g（33%）、平瓦 22,723 g（67%））を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと縄叩きの比率は破片数では 42%：58%、重量比では 53%：46%となる。

これら出土遺物の年代観より、本溝は 11 世紀前葉に廃絶（埋め戻し）したと考えておきたい。

SD2115（図 224.225）

33-2 トレンチ西部で検出した南北溝である。整地土とみられる淡灰色・灰白色シルト（北壁３層・西壁 10 層、南壁４層）下面で検出し、７世紀中葉の竪穴建物を切り、SB2024、SD2104 に切られる。上面幅 1.2 ～２m、深さ 0.1 ～ 0.15 mを測り、断面は緩やかに２段に落ち込む。33-2 トレンチ中央から条里地割の方位で北に延び、31 次調査 31-1 トレンチの SD1001 に接続すると考えられる。時期決定可能な出土遺物はみられなかったが、層位関係や 31 次調査の所見からみて、８世紀初頭までに開削され、８世紀中葉まで継続したと考えられ、本調査区西部の条里方位の南北溝群の中では最も古く位置付けられる。

東側に位置する大型建物（SB2022. 2023. 2024）との時間的な関係は、SB2022 の一時期と同時併存すると考えるが、西側に並走する SA2206 との詳細関係は不明とせざるを得ない。東側に位置する大型建物（SB2022. 2023. 2024）との時間的な関係は、SB2024 と同時併存するものと考える。

SK2001（図 229 ～ 234）

33-2 トレンチ東端で検出した大型土坑である。平面規模は、長軸 2.6 m、短軸 2.2 mの不定形を呈し、検出面からの深さは 0.25 mを測る。埋土は褐灰色粘土の単一層であり、灰褐色シルトの偽礫、焼土・炭化物、土器・瓦を多く含んでいる。

遺物は上・下層に区分して取り上げているが、埋土の状況からみて層位的には区分することはできず、一括廃棄された資料であることには相違ない。

451 ～ 461 は上層として取り上げた一群である。丸瓦（461）は側縁に焼成前の湾曲する切り落としがみられ、面戸瓦の可能性がある。

462 ～ 476 は下層出土遺物である。平瓦（473 ～ 476）は、打ち欠きが目立つもので、隅切瓦の可能性がある。本遺構の瓦出土量は破片数 53 点（丸瓦 21 点（40%）、平瓦 32 点（60%））、総重量 33,274 g（丸瓦 10,237 g（31%）、平瓦 23,037 g（69%））を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと縄叩きの比率は破片数では 14%：86%、重量比では 17%：83%となる。

これら出土遺物の年代観から、本土坑は 10 世紀中葉～後葉に形成されたと考えられる。要因については、焼土・炭化物が多く含まれることからみて、火災等の塵芥処理に伴い形成されたと考えられる。

SK2002（図 235）

33-2 トレンチ北東隅で検出した土坑である。平面規模は、長軸 2.4 m以上、短軸 1.5 mの楕円形を呈し、残存深度は 0.2 mを測る。埋土は黒灰色粘土の単層であり、黄褐色シルトの偽礫及び焼土・炭化物を少量含んでいる。

477 ～ 483 は出土遺物である。須恵器杯（477）、同皿（478）は８世紀初頭から前葉の資料と考えられる。須恵器把手（479）の外面には、ヘラ描きによる文様が認められる。硯等の部品の可能性がある。軒丸瓦（480）は KH106 型式。鉄器（483）は鉸具の可能性がある。481. 482 は白色凝灰岩片である。

出土遺物のうち、時期比定に有意な須恵器は８世紀初頭から前葉の年代を示しているが、埋土が隣接する SK2001 とよく似るため、本土坑は 10 世紀中葉～後葉に形成されたものと考えておく。

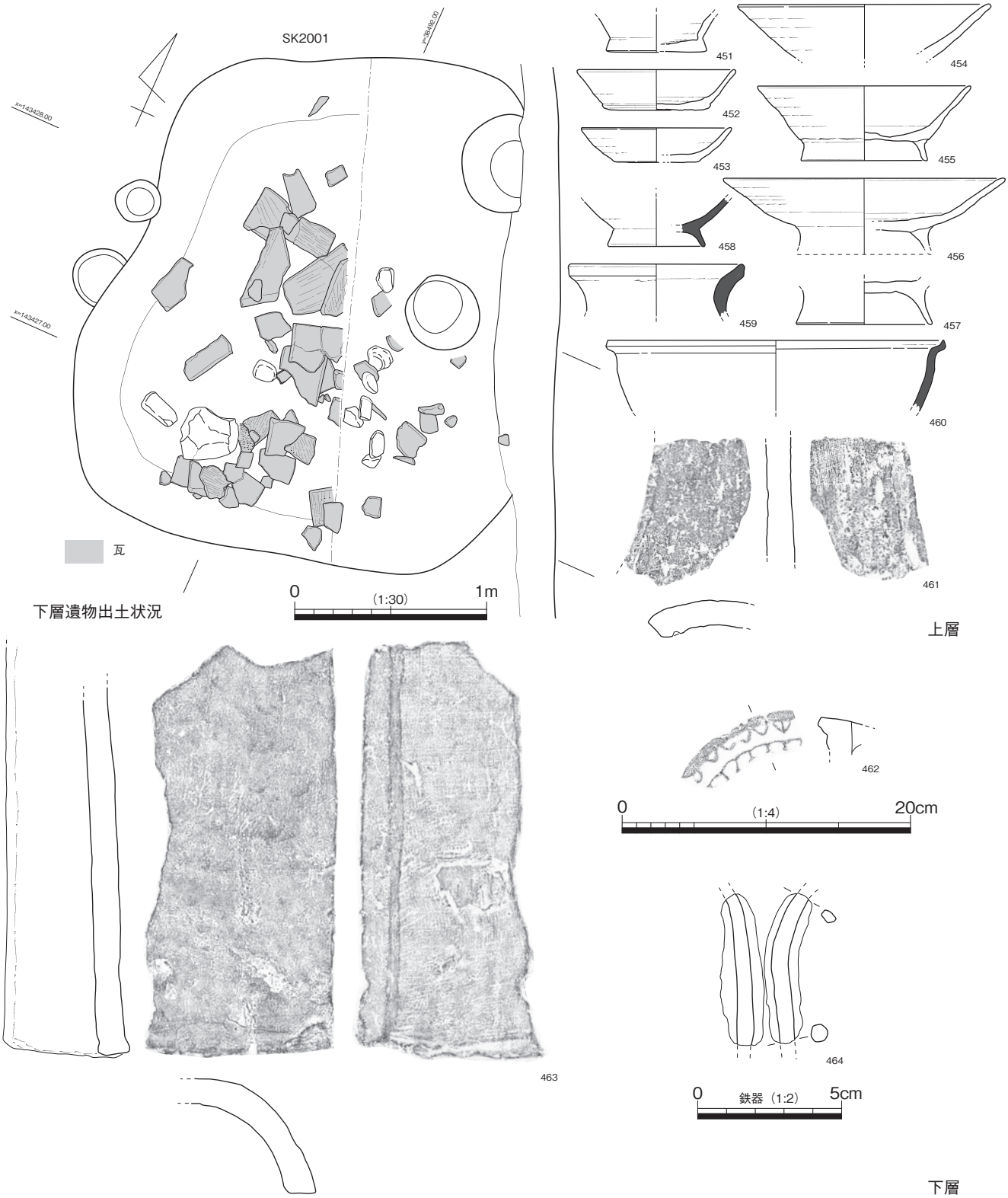


図 229　33-2Tr・SK2001 下層遺物出土状況及び上層 . 下層出土遺物 1

SK2102（図 224.236）

33-2 トレンチ西端で検出された遺構である。整地土とみられる淡灰色・灰白色シルト（北壁 3 層・西壁 10 層、南壁 4 層）上面で検出し、SD2106 を切る。平面規模は、長軸 3.2 m、短軸 0.9 m以上を測る。緩やかに落ち込む断面形をもち、大半が調査区外となるため溝である可能性も考えられる。

埋土は、黒褐色粘土を主体としており、層内に瓦を中心とした遺物が多く含まれる。出土遺物のうち、時期決定に有効な土師質土器を中心に図化した。土師質土器台付杯（484. 485）の年代観より、本遺構は 11 世紀前葉に埋没したと考える。

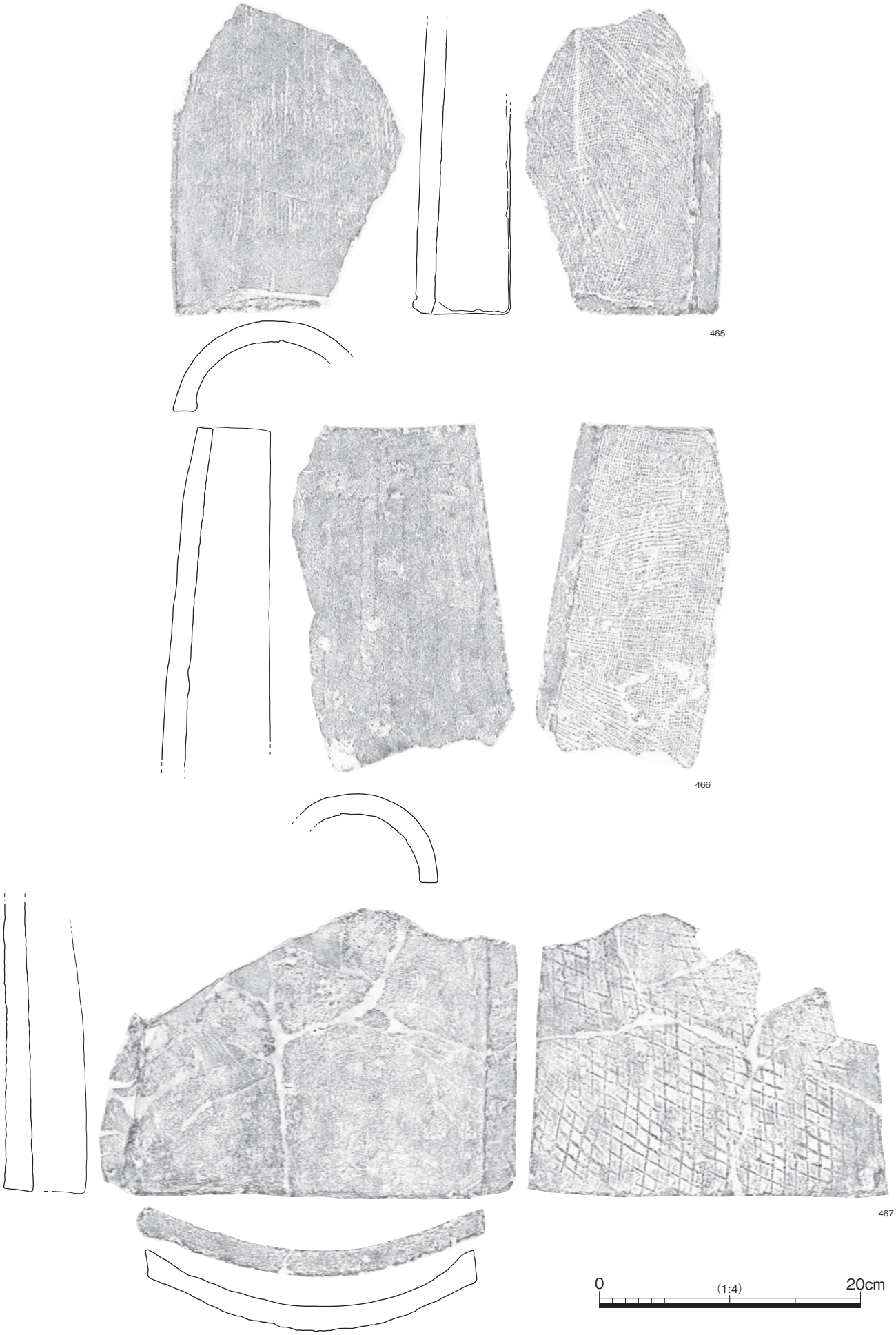


図 230　33-2Tr・SK2001 下層出土遺物 2

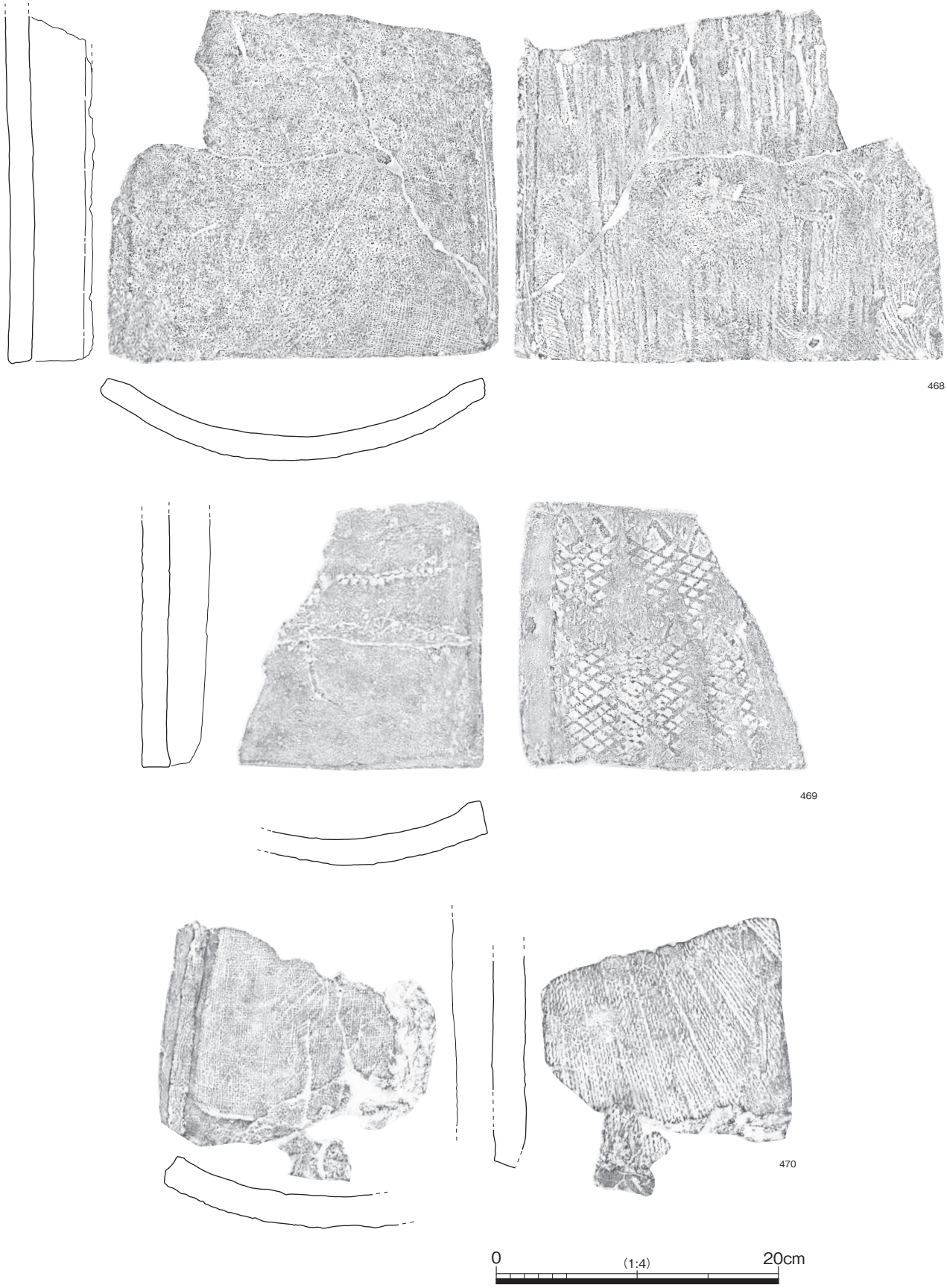
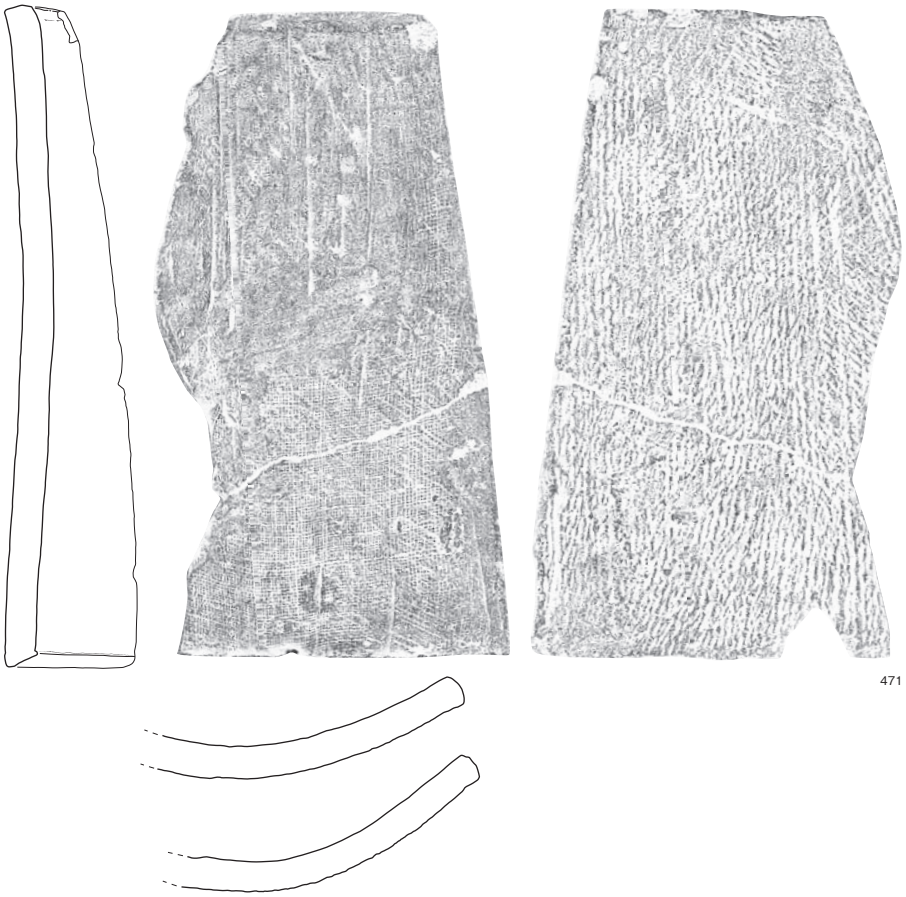
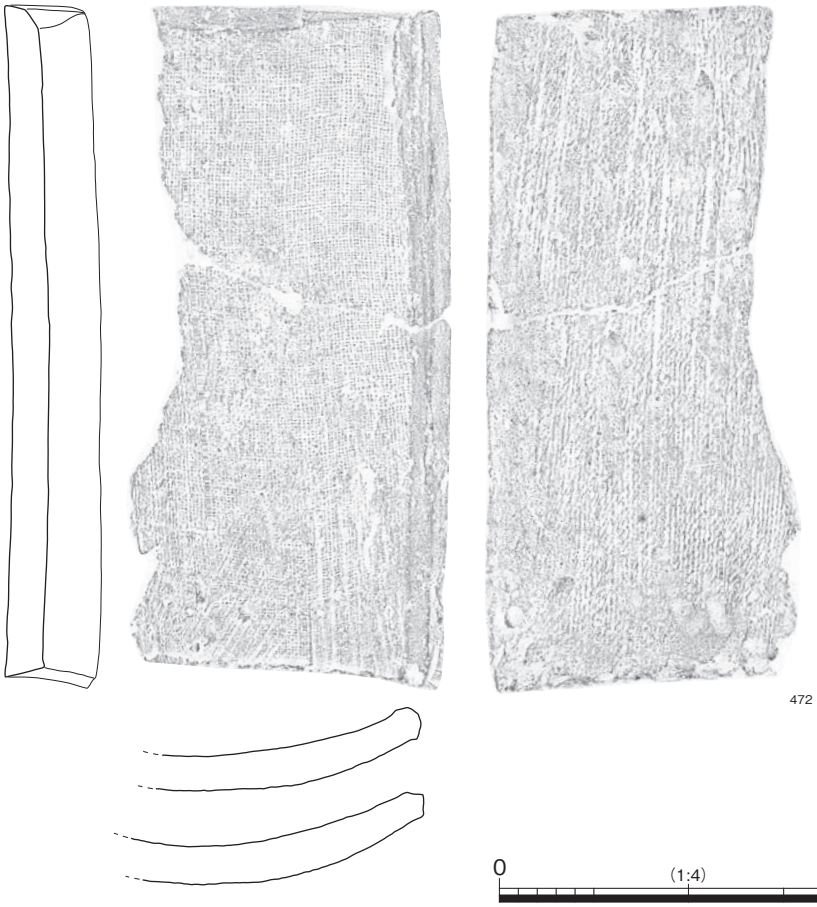


図 231　33-2Tr・SK2001 下層出土遺物 3





0 (1:4) 20cm

図 232　33-2Tr・SK2001 下層出土遺物 4

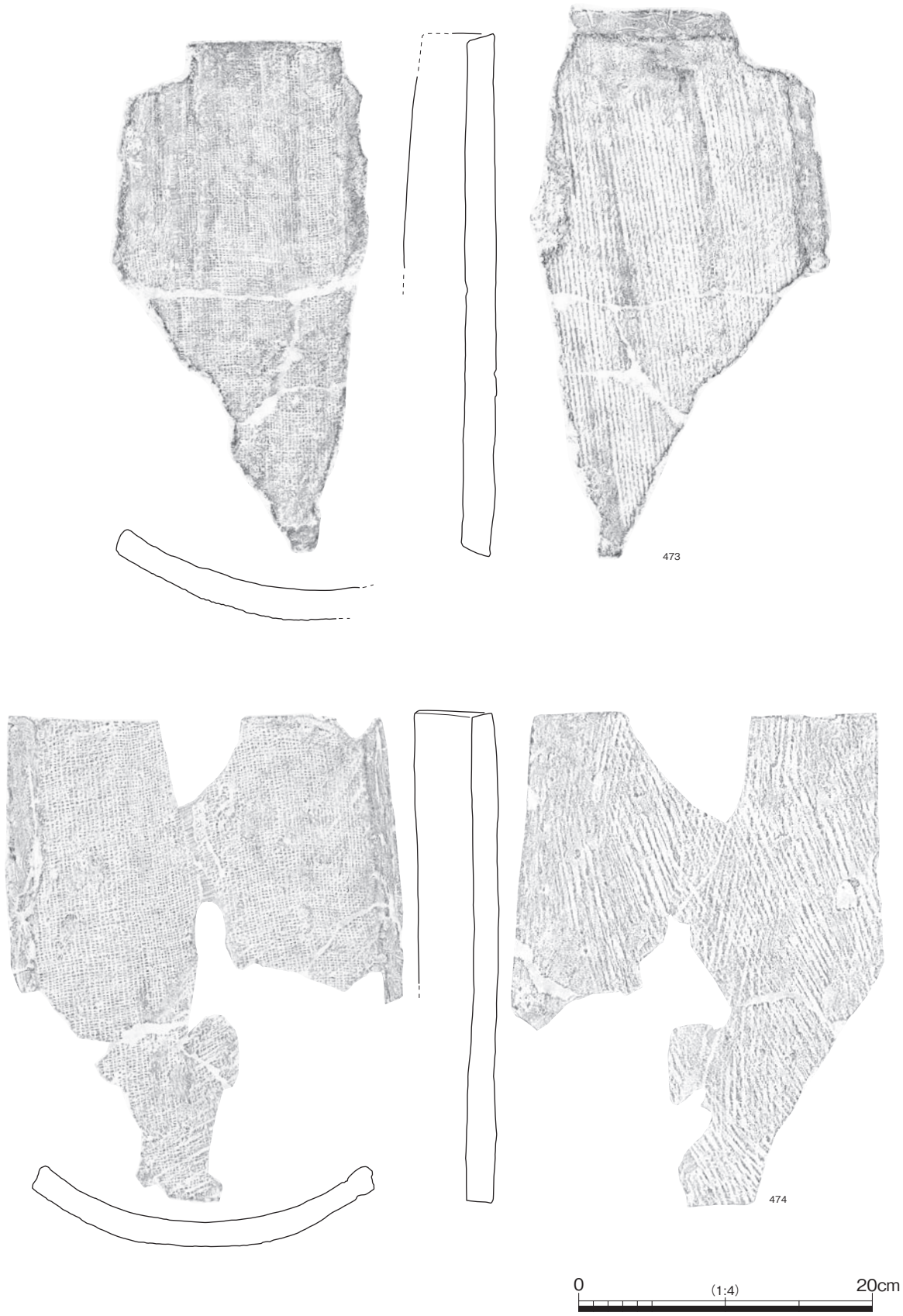


図 233　33-2Tr・SK2001 下層出土遺物 5

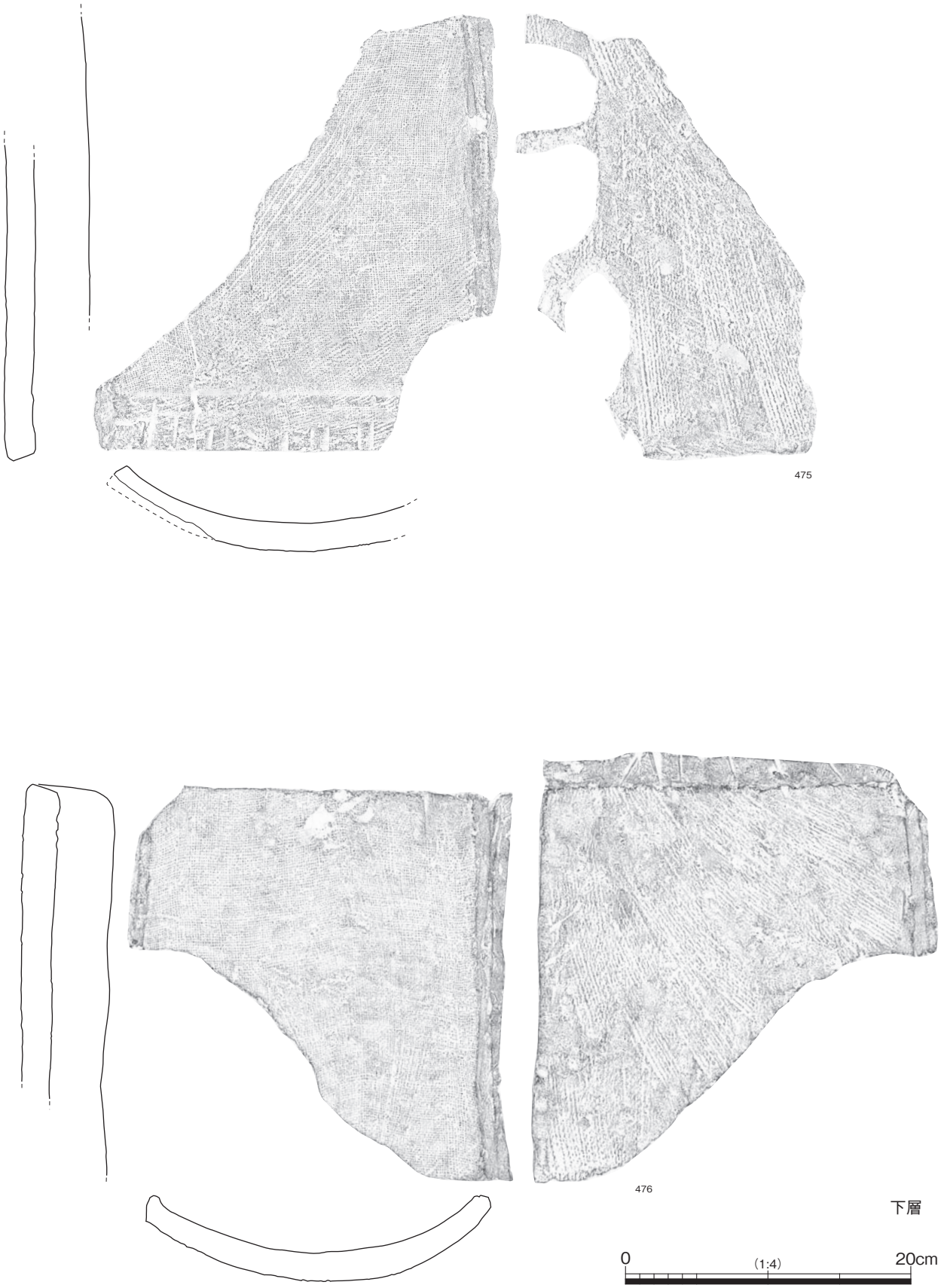


図 234　33-2Tr・SK2001 下層出土遺物 6

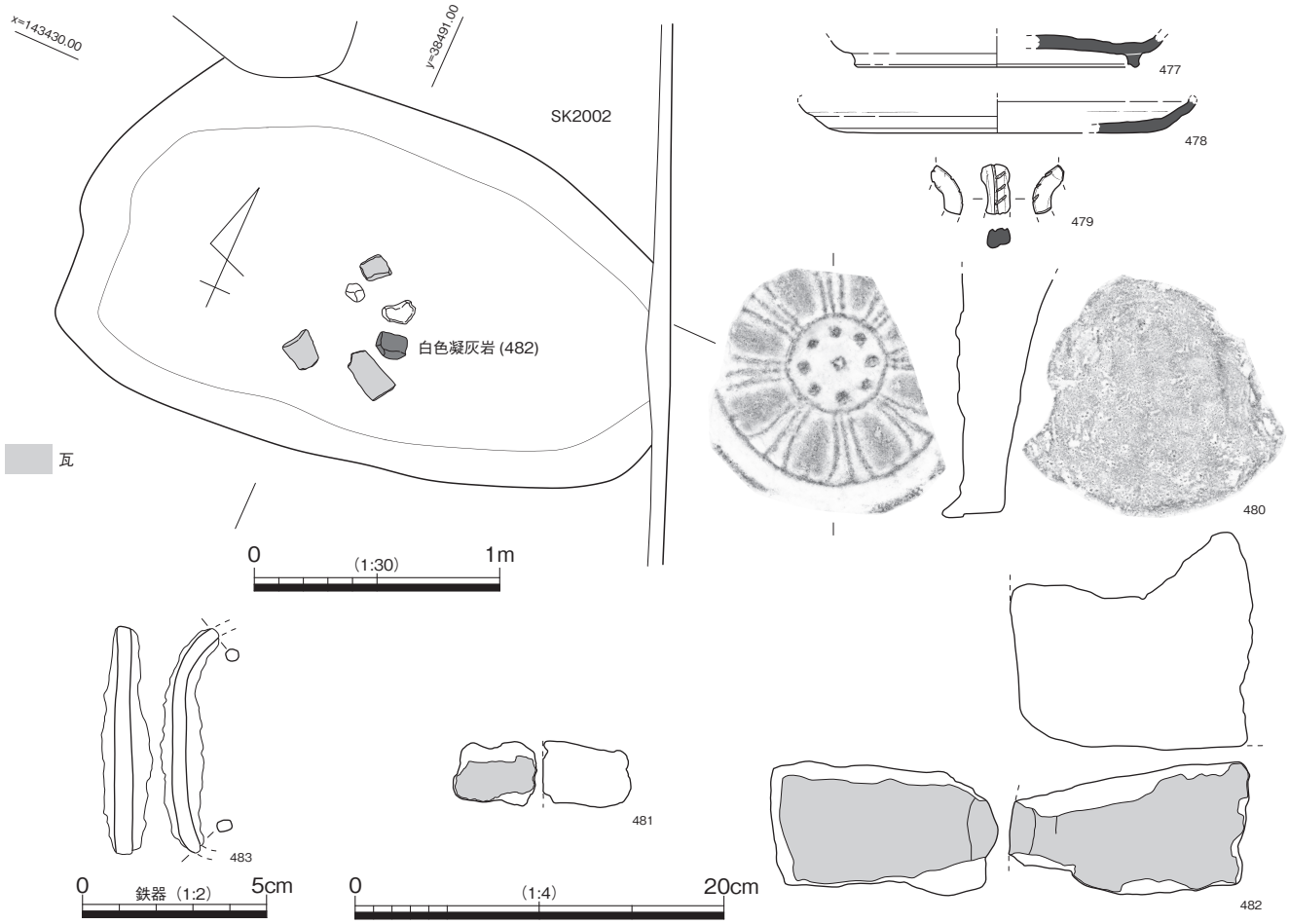


図 235　33-2Tr・SK2002 遺物出土状況及び出土遺物

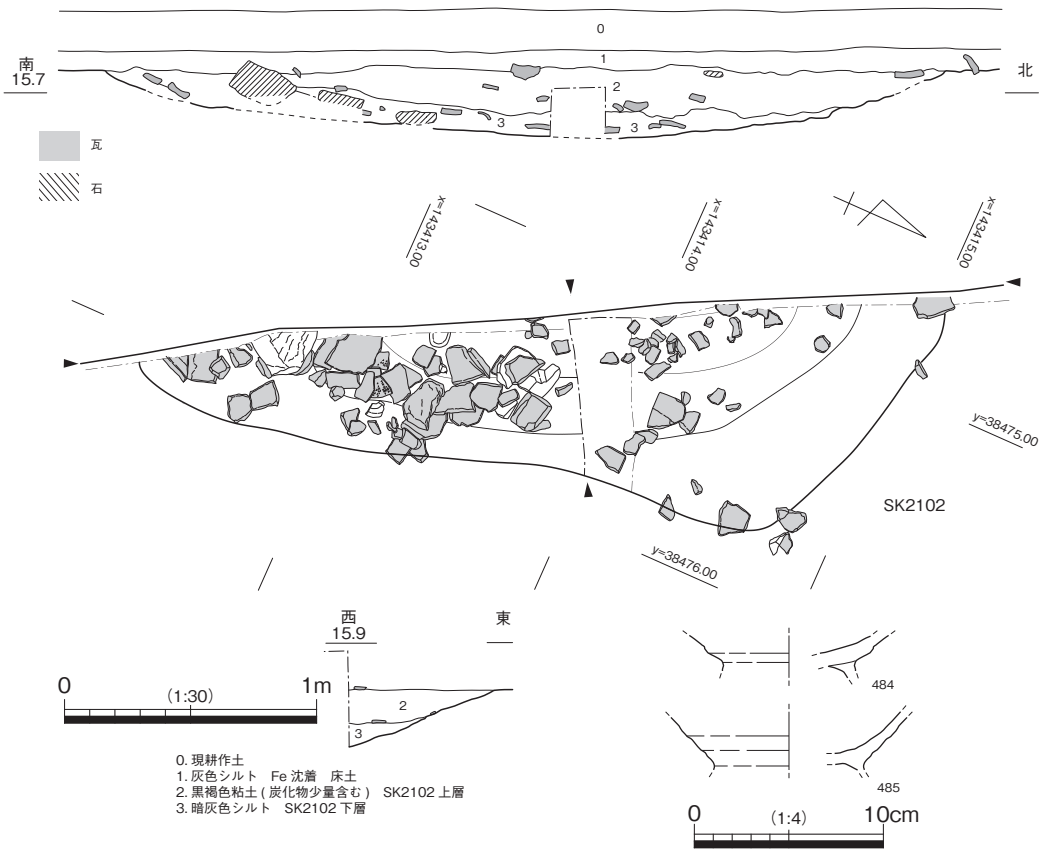


図 236　33-2Tr・SK2102 遺物出土状況及び出土遺物

SK2103（図 224.237 ～ 239）

33-2 トレンチ西部で検出した大型土坑である。整地土とみられる淡灰色・灰白色シルト（北壁３層・西壁 10 層、南壁４層）上面で検出し、SB2024、SD2104 を切り込む。平面規模は、長軸 3.6 m、短軸 1.7 mを測る不定形を呈する。検出面からの深さは 0.15 mで、中央に向かって緩やかに落ち込む。埋土は暗灰色粘土の偽礫を主体に埋没しており、埋め戻された可能性が高い。また、中央部を中心として、土器、瓦、不明石材が多量に廃棄されていた。

486 ～ 513 は出土遺物である。須恵器杯（498）は外底面に糸切りが確認されるため、搬入品と考えられる。軒丸瓦（507）は型式不明、同（508）は KH105 型式であり開法寺を中心に知られている資料である。511.512 は白色凝灰岩片。本遺構の瓦の出土量は破片数 82 点（丸瓦 27 点（33%）、平瓦 55 点（67%））、総重量 46,799 g（丸瓦 13,863 g（30%）、平瓦 32,936 g（70%））を数える。平瓦の凸面調整の格子叩きと縄叩きの比率は破片数では 41%：59%だが、重量比では 38%：62%となる。

これら出土遺物の年代観より、本遺構は 12 世紀に形成されたものと考える。

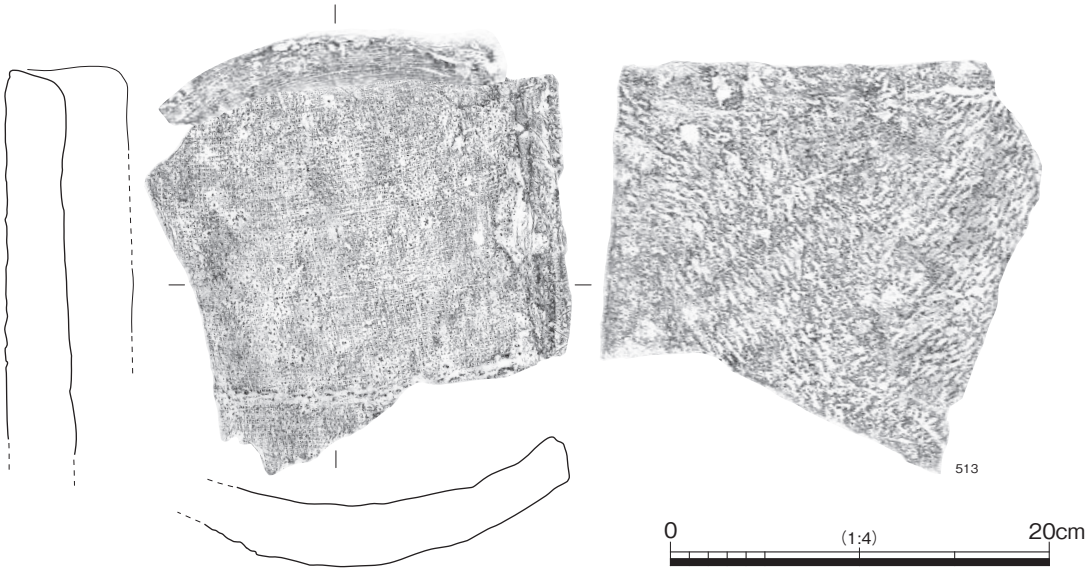


図 239　33-2Tr・SK2103 出土遺物 3

SE2003（図 240 ～ 243）

33-2 トレンチ北東隅で検出した井戸である。北肩が未検出であるが、平面規模は径３mのやや歪な円形を呈する。断ち割りは検出面から深さ 1.5 mまで実施したが、湧水が激しく底面を確認していない。また、井戸側についても検出できていないが、下位において黄褐色粘土の偽礫（12 層）が壁面に張り付いた状態でみられることから、これを井戸側の固定の裏込土と考える。井戸側は抜き取られたのであろう。

裏込土以外の埋土は、数単位に区分できるが、いずれも偽礫を多く含むことで共通しており、廃絶時には一括して埋め戻されたと考えられる。

遺物は、裏込土・下層・上層に区分して行った。514 ～ 518 は、井戸側裏込土より内側で最下層として取り上げた一群である。519 ～ 521 は井戸側裏込土からの出土遺物である。黒色土器椀（519）はやや深手であり、11 世紀末から 12 世紀の資料と考えられる。

522 ～ 553 は上層出土資料である。緑釉陶器托（522）は近江産の 10 世紀中葉から後葉の年代が想定される。

これらの出土遺物の年代観より、本遺構は 11 世紀末から 12 世紀初頭に形成され、12 世紀前半に廃絶したと考えておきたい。

図 237　33-2Tr・SK2103 遺物出土状況 . 平断面及び出土遺物 1

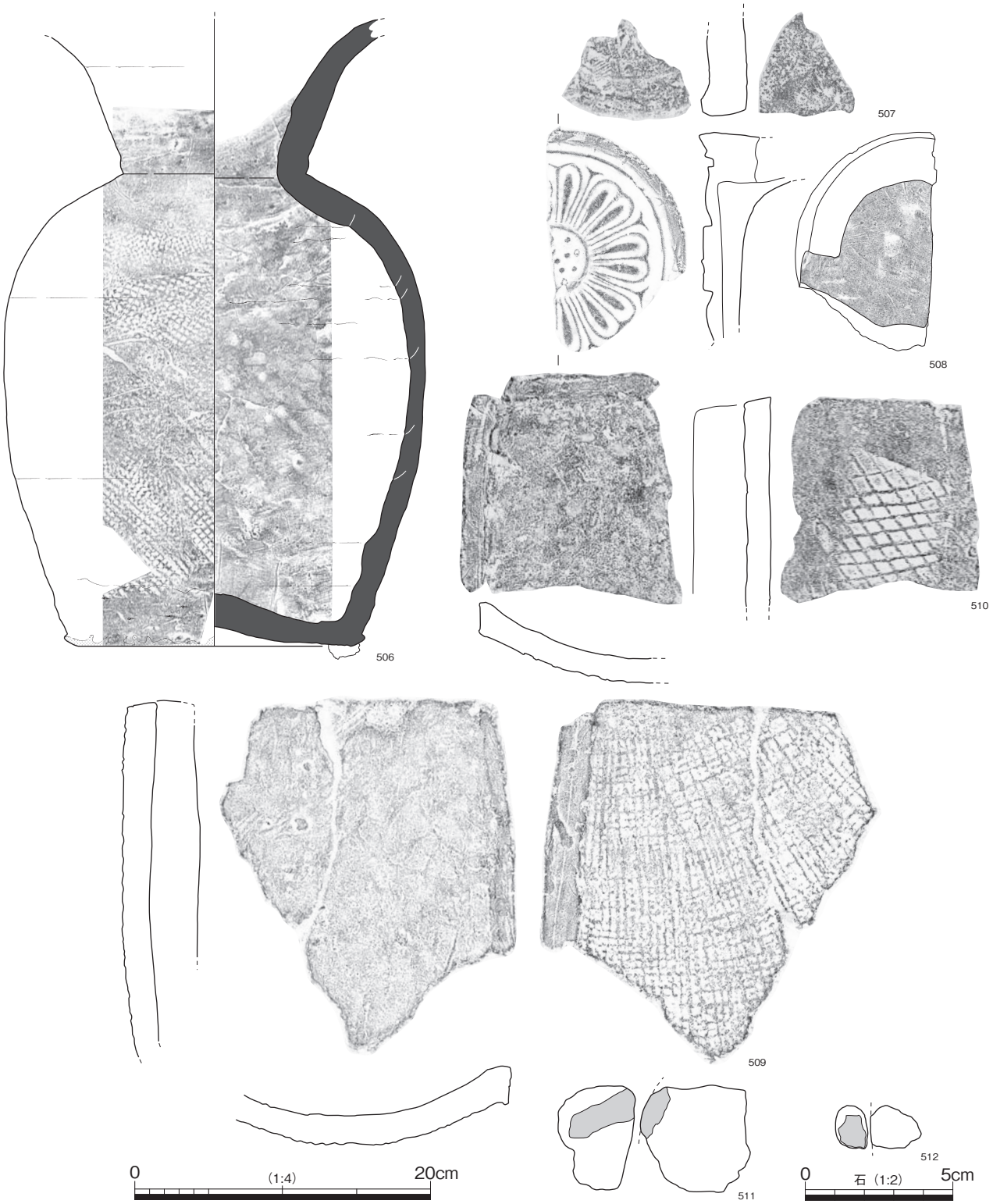


図 238　33-2Tr・SK2103 出土遺物 2

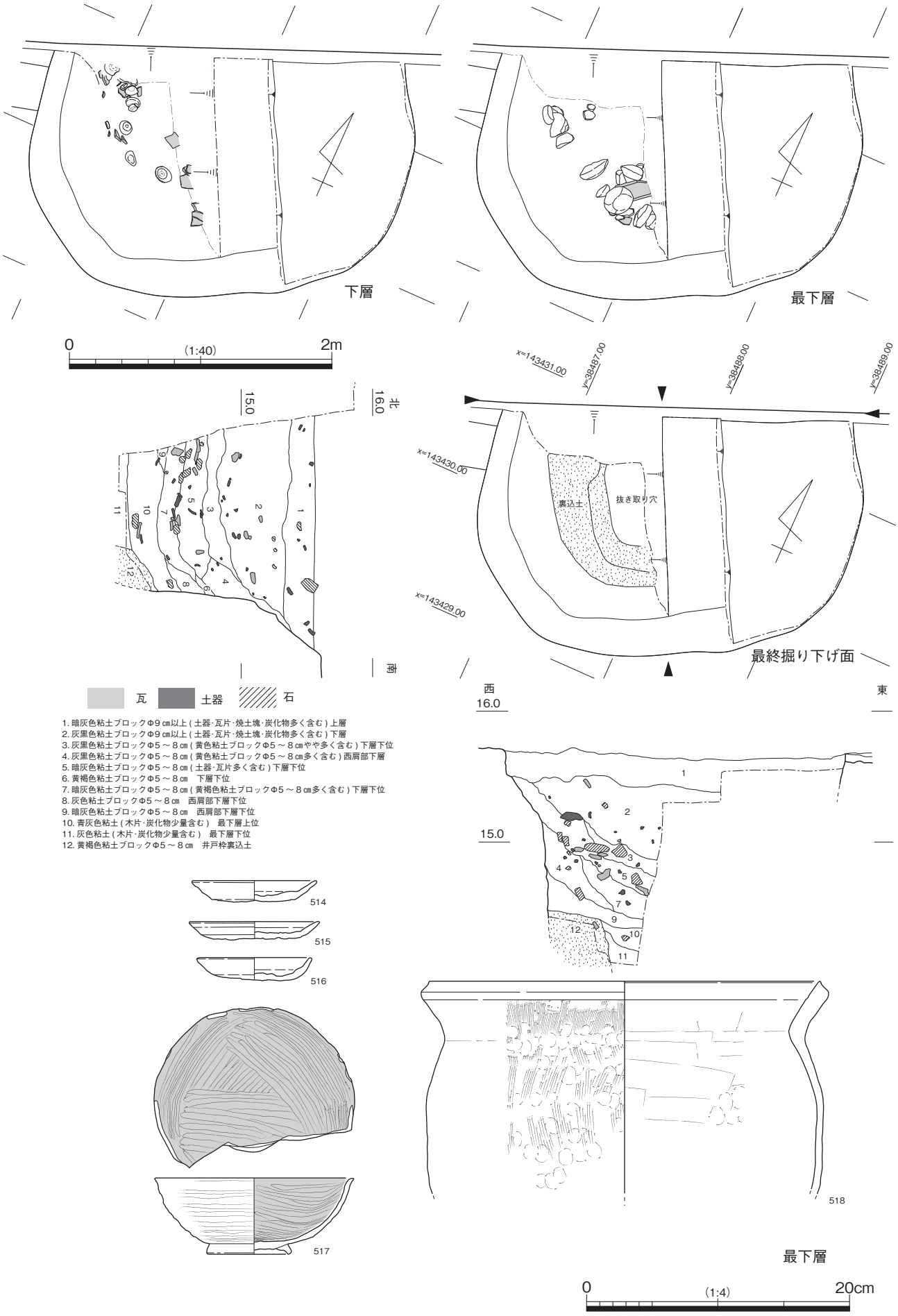


図 240　33-2Tr・SE2003 最下層出土遺物

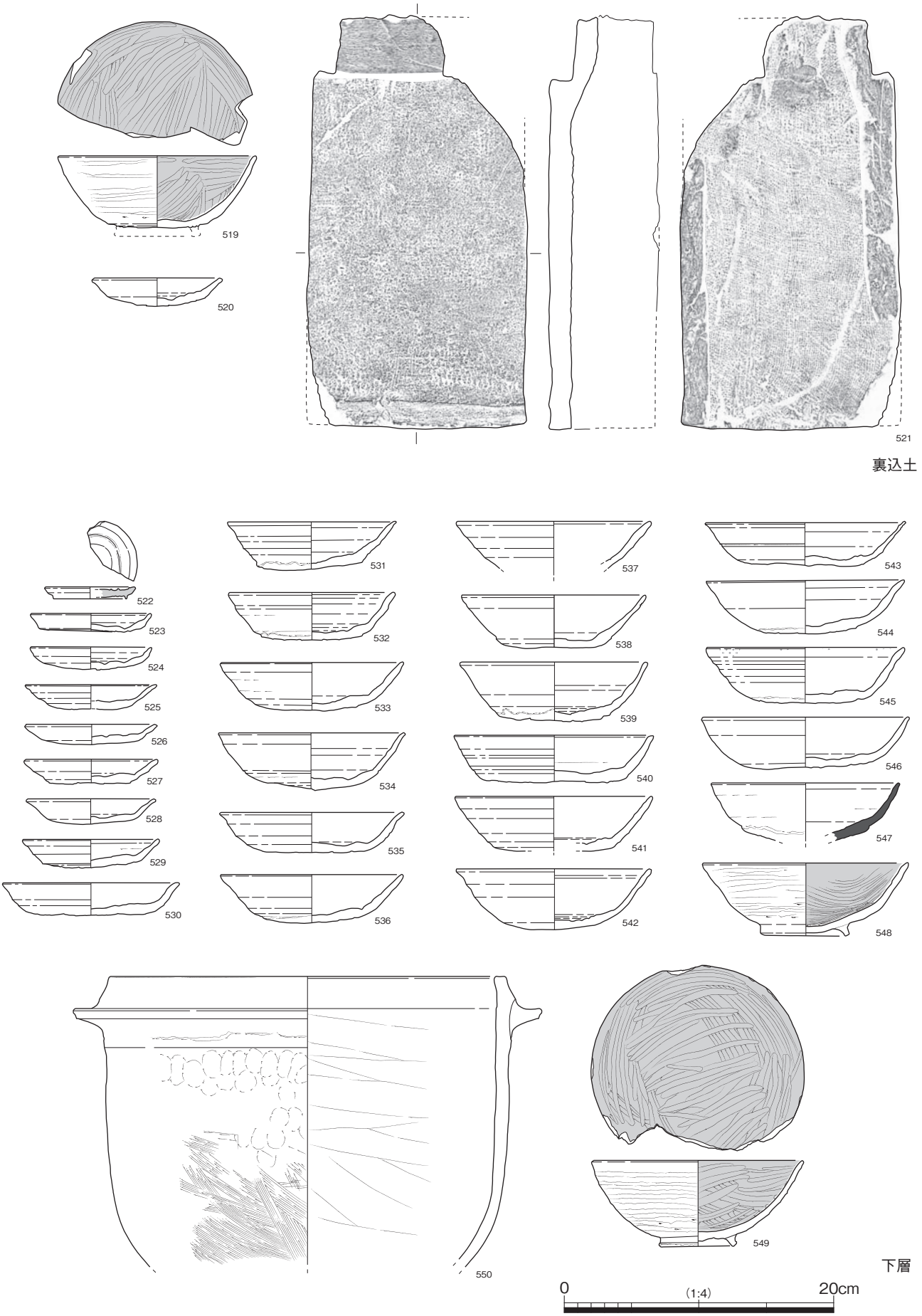


図 241　33-2Tr・SE2003 裏込土 . 下層出土遺物 1

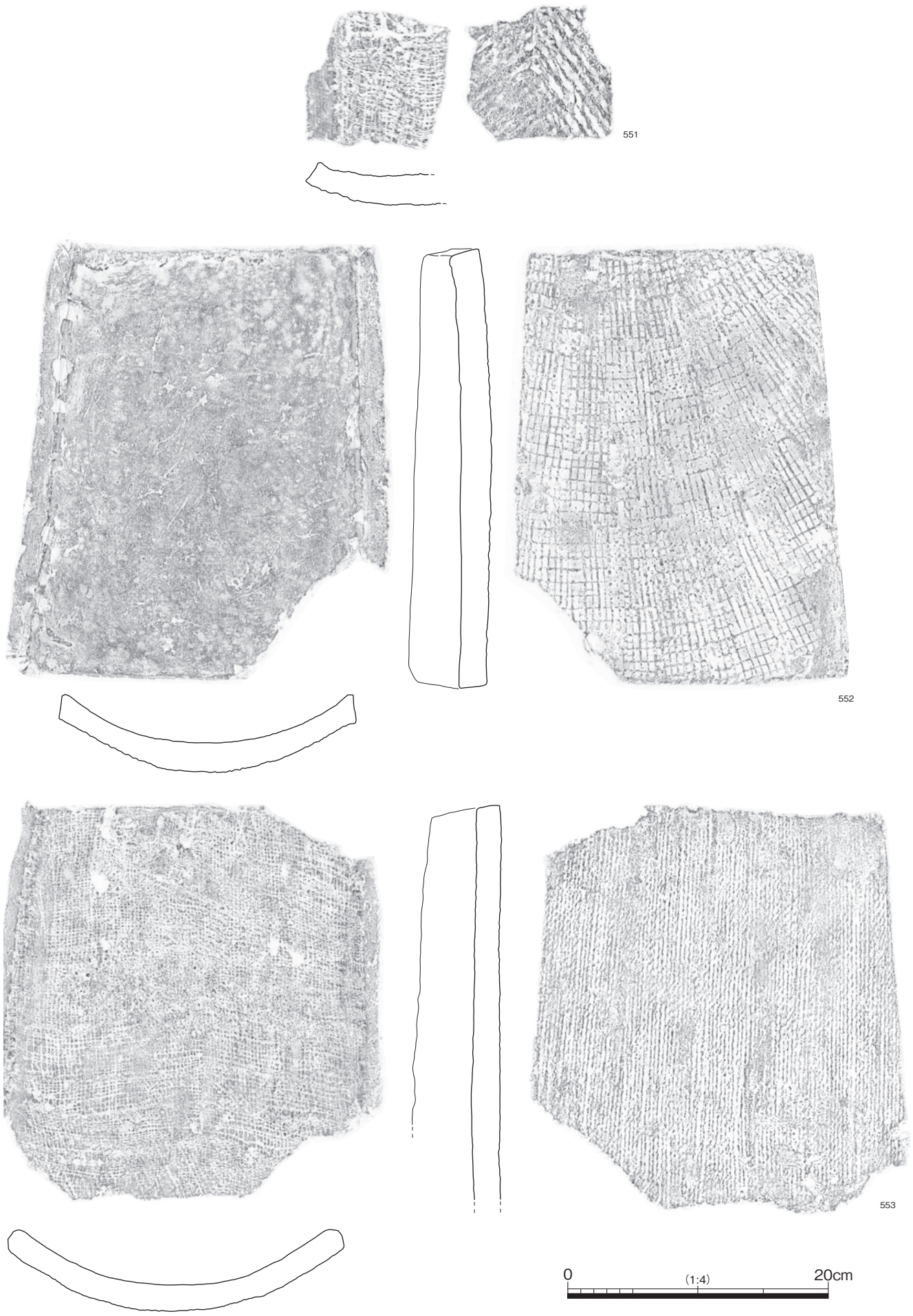


図 242　33-2Tr・SE2003 下層出土遺物 2

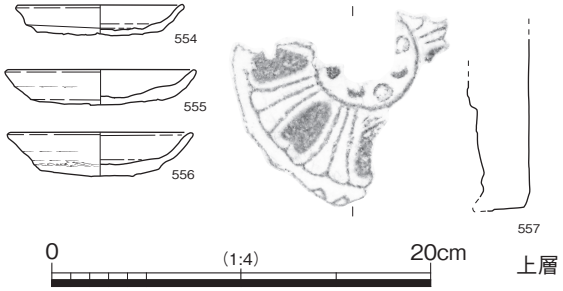


図 243　33-2Tr・SE2003 上層出土遺物

（4）小結

今年度調査では 33-1・33-2　トレンチのほぼ全域で建物遺構を確認した。33-1 トレンチでは昨年度の 32　次調査 32-1 トレンチ SB2011 の西側部分の調査を実施した結果、梁間 3　間、桁行 3　間の南北棟の建物となることが明らかになり、東西棟とした当初の想定と異なった結果を得た。

33-2　トレンチでは、31 次調査 31-4 トレンチの SB2022. 2023. 2024 を拡張する形で調査を実施した。その結果、SB2022. 2023. 2024 はいずれも東西棟であり、建物主軸線・位置を踏襲して建替えられたことが想定できる。層位関係や出土資料から、SB2022 が 8 世紀前葉を上限とする時期に造営されたのち、 9 世紀から 10 世紀前葉の SB2023、10 世紀前葉から 11 世紀後葉の SB2024 へと大型建物が継続する。

廂を含めた総面積が 100 ㎡を超えた大型建物が、約 400　年間にわたり同一地点で建て替えられたことになる。各段階の廂の面数は異なるが、この時代の同規模の廂付建物は讃岐国分寺などを中心に数例知られているのみであり、かなりの格式をもった建物と推定することができるが、讃岐国府における具体的な性格やこれまでの調査で確認している周辺の建物群との関係については今後の調査・検討が必要である。